おはよ。ってキスくれるの

川鵜鶏肋
春屋アロヅ
Fukapon
なぎ

mnfikmhyk
creature mixing
9

# Contents


**階段部へようこそ** 川鵜鶏肋 …… **02**

**オンステージ** 春屋アロヅ …… **46**

**あなたのとなりに** Fukapon …… **64**

**ちゃーじ** なぎ …… **79**

**五月病が重たいの** …… **X3**


# 大好きな場所

mnfikmyhk

CREATURE MIXING 9

# 階段部へようこそ

川鵜鷺助

「ええい、こっちか？」
どやどや、がやがや。
足下から聞こえてくる声。
屋上への扉が開く。
「草の根分けても探し出せ！」
「おう！」
「うーっす」
間違っても視界に入らぬようコンクリートの床に伏せ、息をこらす。
辺りを探し回る気配。足音は四人分、いや五人分はある。
「チッ、理科室側に逃げたんなら絶対ここだと思ったのに」
「あーあ、リサに怒られるぞ」
扉が閉まる音と同時に、腹から振動が伝わってくる。
ヒラメ四十という言葉をなんとなく思い出しつつ、心中で根拠レスに四十秒を数え、それからわずかに身体を起こし、そっと顔を出して階下をうかがう。
もう誰もいないようだが、念のためさらに四十秒を数えてから、ふたたび階下を確認。
どうやら偽装ではなく本当に諦めたようだ。
やれやれ、今日はいつもに増してしつこかったな。
タンク台座の鉄骨にもたれるように腰を下ろし、一息つく。
本来は生徒は立ち入り禁止の屋上。鍵を入手しているものは詠人以外にもいるだろうと想像はしていたが、案の定だ。
だが、階段室の屋根の上、水タンク下に隠れ家を確保しているとは、よもやお釈迦様でも気がつくまい。
「ったく、普段は無視してるくせに……あいつらこそ消えちまわないかな。死ねばいいのに」
「それを本当に望んでいるの？」
小声で悪態をついた直後、からかうような調子の声が頭上から降ってきた。
完全に警戒を解いていたところに予想外の方向からの襲撃に、狼狽せざるをえなかった。
慌てて見上げた視線の先、タンクの縁から黒いものが二本ぶら下がっている。黒のローファーと同色のストッキングに包まれた脚に見える。
一瞬死体でも乗っかっているのかと思ったが、ありえない。軽く組まれた脚は意思を示すように揺れている。
彼の後にのぼってきた者はいないから、タンクの上に腰掛けている人物は間違いなく先客という事になる。
つまり、ここは詠人一人の隠れ家の筈ではなかったのだ。かなり口惜しい。
だが必ずしも致命的な状況とは言えない。相手がリサの手下ならとっくに仲間を呼んでいるはずだ。
ただの女子一人なら危険は少ないだろうし、交渉の余地もあろうというもの。
「こら、パンツ見えるぞ」
この場合、必ずしも頭上をとった方が有利とは限らない。交渉の前に精神的優位を確保しておくのが得策だろう。
「後向いてるから降りて来いって」

「忠告ありがとうと言ってはおくけれど、心配には及ばないから」
仮称A子さんは、彼の目の前で軽やかに着地を決めた。
身の軽さに驚くより先に、一フレームたりともそれが見えなかった事にはげしく驚愕せざるをえない。
ここの女子の制服のスカートは、県内の中学では一二を争うほど短いというのに！
「見えないわ。そういう事になってるの」
表情から彼の疑問を見てとったか、A子さんは冷静にそう説明するが……
高度な物理学を引っ張ってくる必要はない。中学生の理科のレベルでも十分に異常だ。
考えられる可能性としては、生地がよほど重いか目が粗くて空気抵抗が少ないかだが、今現在もA子さんのスカートはちゃんと風でなびき続けている。少々の工夫でどうこうできる話ではないだろうに。不自然なぐらいパンチラしないアニメじゃあるまいし。
いや、まてまて。さっきから一体何にこだわっているんだ？
ばかばかしい。重要なことではない疑問に頭を使うのはすっぱり諦めよう。
あやうく初対面の相手にいきなり軽蔑されるところだった。詠人が感じた限りではA子さんの冷静な声には怒りの調子はなかったと思うが、一応頭ぐらい下げておいた方がいいだろうか。
人付き合いが不器用だという自覚ならオクで売るほどある。また何か見落として、相手を不機嫌にしているのに気付いていない可能性もある。
交渉を無難に進めるためには、まずは第一印象が大切だからな。
この場合足元を見るのと顔を見るのとどちらがより失礼なのかわからないが、スカートの裾を注視し続けるのはあまりよろしくないだろう事ぐらいは想像できる。
会話相手に向き直るために顔を上げ、はじめて上半身に目をやったことで、詠人はより以上の驚愕に襲われる事になった。
おおよそあり得ないカラーリングの生き物が、そこにいた。
「変なのがいる」
「……あんたが言うか!?」
心外な発言に反射的に突っ込みを入れる。
生まれて十四余年になる詠人だが、生物と無生物・二次元と三次元の区別が曖昧になるという経験は初めてだった。
視界に紗が掛かり、キラキラとした輝きをまとっているような錯覚がある。
肩口で切りそろえられた髪は目の覚めるような見事な銀髪（プラチナブロンド）。しかも菫色の虹彩という、東洋人離れした色合いのパーツによる強烈な自己主張。
顔立ちには年齢相応の幼さを残しつつも、あくまでも硬質な美貌。お世辞にも愛らしいとは言えない冷め切った表情に対しては、違和感を感じざるを得ない。
これはアニメのキャラクターか、さもなくば人形か妖精さんの類だ。現実の女の生々しさをまるで感じさせない。さらに言えば、生命体という感じさえ希薄だ。少なくとも、詠人を目の敵にしているリサあたりとは同種の生き物という感じがしない。
「ところでさっきの君の望み、あれは本気かしら？」
泉の妖精よろしく、A子さんはそうのたまわった。偉そうな腕組みが妙に様になっている。ただ惜しむらくは、
「押し上げるほどボリュームが無いのな」

ざきゅっ。
靴底がアスファルトを噛みしめる音とともに、妖精の姿が消えた。
ずしん。
下から体当たりを受けたような顎への衝撃に、決して小柄な方とは言えない詠人の身体が空中に浮き上がる。
ぎゅるん。
続いて、ローファーの踵が肩口に迫る。予想外の方向からの回避不能の打撃に、詠人は意識を刈り取られた。

「もし、もし」
頬を撫でる感触と優しい声に呼びかけられて目を覚ますと。
栗色の髪をサイドポニーテールに結ったお姉さんに膝枕されていた。大人びた顔立ちを見ると、詠人より一つ二つ年上だろうか。
「お目覚めですか？」
「なに、ここ天国？」
いや、黒服にエプロンの天使はいないか。頭にのせているのも輪っかではなく布製のヘッドドレスだ。
って、なんでメイド？
「いやいや、冥土の一丁目か」
「学校の屋上です。そういう悪趣味なジョークを言える余裕があるなら、身体の方は大丈夫そうですね」
すっごく優しい顔で駄目出しされてしまった。
学校という場所にはあまりそぐわない格好だが、コスプレ部の人とかだろうか。そんな部があるとは聞いたこと無いが。
ともあれ。
大した根拠はないが、この状況をあまり続けているのはよろしくない予感がする。
慌てて起き上がろうとすると、メイドさんに手で制された。
「もう少し目をつぶっていてくださいますか？　顔の泥を落としますので」
「はあ、すみません。ご迷惑かけます」
「いいえ、こちらこそ主がご迷惑をお掛けしたようで、申し訳ございませんでした」
恐縮した様子のメイドさんは、良い匂いのするハンカチで丁寧に顔をぬぐってくれたばかりか、詠人が起き上がるのに手を貸し、さらに制服の埃まで払ってくれた。
いやあ、やさしい。メイドさん斯くあるべしといったところか。ちゃらちゃらしたミニスカのメイドモドキとかとは一線を画したトラディショナルな衣装もお似合いで、右手だけにはめた長手袋がワンポイントとなっていてなかなかお洒落だ。左側の片ポニーと同じく、左右非対称のファッションってわけなのだろう。
「ねえ、もうそろそろ戻ってきたらどうかしら？」
またも頭上から降ってくる声。屋上室の屋根に腰掛けて脚をふらつかせているのは、例の妖精さんだ。
愛らしい見た目に反して威風堂々とでもいおうか。高所から見下ろすのが随分板についている気がする。いかにも他人に命令することになれていそうだ。
これは、あれか。妖精さんのお姫様か何かか。
「傷害未遂事件の犯人は、少しぐらい殊勝にされた方が心証がよろしいのでは？」

「問答無用で滅ぼさなかっただけでも感謝していただきたいところね。不適切な発言に対する制裁としては大幅に減刑したつもりですけれど、何か不服でも？」

これは何か？　死刑判決を受けていたという事だろうか。

妖精さんの世界では、被害者で検事で裁判官で刑の執行まで一人でやるとみえる。怖っ！　妖精さん怖っ！

いやいや、もうそろそろ冷静に戻ろう。妖精さんに言われて現実に返るというのは妙な感じだが。場所にそぐわない非現実的な人々を切っ掛けにして、ひとしきり現実逃避していたのは間違いない。

勇気を振り絞り、これまで目をそらしていたものに目をやる。

コンクリートと煉瓦に囲まれた小さな花壇の土が、人の上半身の形に凹んでいた。

「ここにめり込んでたのか……」

……たぶん掌底で浮かされて、そのま空中コンボで屋上室から蹴り落とされたんだな。

「園芸部が耕したばかりの柔らかい土が絶妙なクッションになったんですね」

そこにピンポイントで頭から突き刺さってたのを、このメイドさんに引っこ抜いてもらったと。

我ながらまっこと無様な感じだが、これは命があっただけでもめっけものだろう。あやうく所持金ゼロから再スタートさせられるところだったわけだ。

「ラッキーなのか、それともアンラッキーと言うべきか、判断に困るな」

「きっと詩紀さんのおかげかと」

しのり？　誰だ？

かつん、とローファーがコンクリートを打つ音に振り向くと、妖精さんは詠人と同じ床に立っていた。

「申し遅れたわ。私が新川詩紀よ」

なんとまあ簡潔かつ高姿勢な自己紹介だが……冷静に見れば、新川の制服のリボンの色は一年生を示す紫、つまりは後輩という事になる。

こうして名前と立場を知っただけで、先ほどまでの妖精さんが急に生身の存在に感じられてくるから不思議なものだ。

それでもなお、新川の日本人離れしたカラーリングは等身大の中学生にはとても見えないものだ。一体何者だろうか。

普通の女学生が学校でメイドさんを従えてたりはしないものだが……リサは渋イケメン執事つきなわけで。この学校、金さえあればやりたい放題ってことかもしれない。

「私のことは置物か何かだと思っていただければ幸いです」

新川の脇に控えるメイドさんはそう仰るが、こんな存在感のある置物もなかろうに。

「彼女は終。宮藤終。惚れても無駄よ。超堅いから」

「いや、女になんか惚れんけどさ」

三次元の女子なんて、何考えてるか分からん生き物じゃないか。

しかもこのメイドさんときたら、見ず知らずの詠人に妙に優しくしてくれる辺り、とても気味悪い。絶対に何か企みがあるに違いない。

「男色家、ね」

あくまでも冷静にそう断じる新川詩紀。

「ちょっとそこ、わざとらしく誤解するな」

やっぱりわけが分からない。
リサといいコイツといい、行動原理がまるで理解できない。まったく、女ってのはこれだから。
「そんなのはどうでもいいわ。聞かせて。さっき言ってた言葉は、本気なのかしら？」
まとわりつくように詠人との距離をつめてきた新川は、ぐっと顔を寄せ、舐めるように詠人を観察しつつそんなことを宣った。
「な、なんだよ」
「私の耳がまともなら、誰かが消えてしまわないか死んでしまわないか、とか望んでいたように聞こえたけれど」
「いや、まあ。それが出来ればこんなところに隠れてない」
「ふうん」
なおも観察を続けられる。居心地が悪い。
「対象が誰であるかには興味ないけれど、その願い、叶えられると言ったら？」
なんだと!?
何者だコイツは？
うさんくさい。うさんくさすぎる。メフィストフェレスか何かのつもりか!?
妖精でなければ天使か悪魔といった容貌の新川ではあるが、日本人然とした名が判明してしまった今となっては、その外見のもたらす神通力は失われている。事実、先入観無しで言葉だけ聞けば、ただのイタいやつにすぎない。
「はっ」
「……」
失笑を見咎められたかと思ったが、新川のほの白い顔には相変わらず淡泊な表情が浮かぶのみ。
「落下地点におあつらえ向きのクッションがあったのが、ただの偶然だとでも？」
新川に代わって、今度は宮藤さんに尋ねられた。
「怒りにまかせて蹴り飛ばしたはいいものの、命をとるおつもりはなかったんですよ」
それではなにか？
確かに……花壇を狙って蹴りこむまでは出来ないこともないだろうが、柔らかく耕されていた場所にピンポイントで落ちたのは出来過ぎに思える。
しかし、それまで彼女の意志によるものだとすれば、本当に悪魔か魔女の仕業だ。
「まあ、似たようなものね」
新川め、心を読みやがった！
「単なる推論よ、ええと……」
むむ。
そういう超常的能力を信じるかどうかは、とりあえず保留にしておくとして、だ。
一方的に名乗られただけとはいえ、こちらが名乗らないのは失礼に当たるんだろうな。
「白州詠人。お白州に、吟詠の詠に人な」
「ふうむ」
長手袋の手を顎に当て、メイドの宮藤さんが首を捻る。
「七の次は八、しかも詠み人知らずですか」
「……偶然。考え過ぎ」
「本日の貴女様がおっしゃらないでいただきたいスレッドはこち

らでよろしいでしょうか？」
「ちっ」
馬鹿丁寧なネットスラングに対し、お嬢らしからぬ舌打ちがはっきり聞こえたが、二人の表情は薄い笑みのまま全然変わらない。
やっぱ怖いぞ、女子。
「まあいいわ。とりあえずハチということで」
ハチ？
察するに詠人のことか？
「原住民のハチには悪いけど。ここまでおあつらえ向きの場所、はいそうですかと諦めるわけにはいかないの」
「ワガママですねー、もう。人を傷つけるのは嫌でも、無力な凡人になる気も、七夏（ななつ）さんを諦めるおつもりもないと」
「きっ」
「何か？」
攻撃力が宿っていてもおかしくない視線を、宮藤さんは柳に風と受け流している。
このメイドさんも、見た目はともかく只者ではないのだろう。お付きというよりはお目付役といったところだろうか。
「そういうことなので、スペースのシェアをお願いできますか？もちろん、以前からの入居者たる白州さんには最大限の配慮をさせていただきますので」
「……それ、まだるっこしくない？」
「詩紀さんが本当にそう思ってらっしゃるなら、白州さんはとうにここに居ませんよね」
「終が一緒だとやりにくいわね」
またどこか痛いところを突いたようだ。説明はまかせた、と言わんばかりに新川は手を振る。鷹揚にも投げやりにも感じられる態度だ。
「この場所が最適なんです。この学園を掌握するためには」
宮藤さんの説明はちょっと端的すぎた。しかも掌握って単語は穏やかじゃないな。
「あんたら、テロリストかなんかか？」
考えてみれば、見通しの良い高所は狙撃の基点としては最適だろうし、貯水タンクにそれなりの薬物を投入すればどうなるかは容易く想像できる。
が、目の前の二人のイメージとはまるで結びつかない。違和感ありすぎだ。
「むしろその逆を目指しているつもりではありますけど」
そうそう……そっちの方が似合う。祖父の有り余る遺産を世の悪との戦いに使うお嬢様とそのお付き、とかそういう感じで。
「実績としてはそう評価されても仕方ないかもしれませんね。残念ながら」
ってえと。
「ええと、例えて言うなら、怪獣はやっつけるけど町にも被害を与える正義の味方、みたいな？」
「ご慧眼です」
小さく拍手されてしまった。ほんと、当たりでいいのか？
「まさか、ウルトラな宇宙人とか言わないよね？」
「……私達なんて、ほんの弱々しい生命体に過ぎないわ」
新川は整った相貌に自嘲するような表情を浮かべる。
「それでも。外界に働きかけて自らの生存環境の改善をはかる。生物としての基本的なあり方ではなくて？」

「世の常の手段で行うなら、ですけどね」
宮藤さんの突っ込み？を無視して、新川は続ける。
「この学校の霊的構造は珠坂市と相同。改変規模は支配人数相応で、結果に目が行き届く。リハビリ用としておあつらえ向き」
やっべー。何言ってるのか全然分からねー。
「この学校の中でなら大抵の願い事は叶えられる。詩紀さんはそう仰ってます」
「はあ」
「それで、手始めにハチの願いを叶えてあげてもいい。さっきからそう言ってるの」
新川の、値踏みするような視線に促される。
「つまりお試し期間。さ、誰を消したいの？　言ってご覧なさい」
やっぱり悪魔の誘いの類か。
本当に出来るかはともかくとして、うっかり口を滑らせたら人格が疑われかねない質問だ。
でも残念ながら、
「言葉のアヤだよ。口をついて出ちゃっただけ」
これは本気だ。
「殺したいぐらいの恨みとか妬みとか、そういうのはないと？」
自他共に認めるヘタレです。申し訳ありません。
「同級生にムカッと来たぐらいで悪魔に願うぐらいなら、屋上登校なんかしてないよ」
素直な返事を聞かせたところ、新川の菫色の瞳がすっと細められた。
やば、面と向かって悪魔呼ばわりはまずかったか？
口より先に手が出る方である事は既に立証済みだ。何度も偶然が続くとは思えないし、初対面の変人の電波語りに命をかけられるほどお人好しのつもりはない。
吹っ飛ばされないようにと腰を落として身構えた詠人に対し、新川は意外にあっさりと表情を弛めた。
「嘘はない、か」
と、淡泊な反応。妙に簡単に信じてもらえたな。
新川の端麗辛口系の表情が、少しだけほっとしたように見えたのは気のせいだろうか？
ともかく、先ほどの暴力的な歓迎と比べれば随分あっさりと解放してもらえたものだ。
「おめでとうございます、白州さん。首の皮一枚で繋がりましたね」
宮藤さんに祝福されたまではよいのだが、なにやら表現が非常に不穏だ。
「はあ、どうも」
「返事が嘘だったら今頃は……」
「どうしてそこで口を濁して目を伏せるんです？」
「その若さであまりにも気の毒で……」
うげ。冗談としても詳しく聞きたくはないな。
「ねえ……なら、ハチはなんでこんなところにいるの？」
それには、聞くも涙、語るも涙の深いわけがある。
「教室にはおかしな女が居る。これまでみたいにただ無視されてるだけならいいんだが、最近なぜか僕を目の敵にして取り巻きどもをけしかけてくるんだ。養護の先生は目をつぶっててくれるけど、保健室はとっくに目を付けられてる。安心して過ごせるのはここぐらいってわけ。以上、おわかり？」

「取り巻き？」
　尋ね返す新川は相変わらずの仏頂面ながら、声には若干の不快感が滲んでいるように感じられる。
「リサって派手な女だよ。校内でステッキ持ってオシャレ系のサングラスをとっかえひっかえ。ダンディー執事がいつもくっついてるし、親衛隊みたい連中を何人も従えてる」
「二年A組の女王様ですね」
「知っているの？　終」
「一通りの噂ぐらいは」
　宮藤さんは頷く。
「安南（あんな）リサ。成績優秀で容姿に優れ人望も教師の信頼も厚いという、絵に描いたような優等生。周囲には常に人垣が絶えない、学園随一のカリスマです。某国の王族の血を引く本物のお姫様という噂もありますね」
　うーむ。
　その評価には釈然としないものを感じる。
「アレがか？」
　サングラスにステッキ、ギャングの女ボスのノリで取り巻きを引き連れ、嬉々として詠人を追い回すアレがお姫様とは片腹痛い。
　詠人からしてみれば、泥ん女様とかああいう印象なのだが。
「そうね、私も気に入らない」
「察するに同族嫌悪ですか？　それとも僻み？　ゆくゆくは斗流十家の全てを統べる詩紀様ともあろうものが？」
　よくわからんけど相当のお嬢なんだろう。そんなの相手に言うなあ、このメイドさんも。
「そんな爆弾リア充と同じにしないで欲しいわ。私は北斗の魔王の名代だもの。ならば孤高こそが正しい立ち位置であるべき」
　胸を張って言う。
　うわぁ、魔王ときたよ。痛い、痛たたた……
　そこまで精神武装しないと、「ぼっち」な自分を認められないとは難儀なやつ。
　ああそうか、なんとなく分かった。皆まで言うな、ってやつだ。
　新川の邪気眼妄想を熟知している誰かさんがこっそり手を回しては、それっぽい演出で自尊心を満足させてやってるんだな。さっきの墜落の件だって、きっと彼女がクッションを用意して待ちかまえていたんだろう。おあつらえ向きに気絶した詠人の顔に泥を擦り付け、花壇にそれらしい穴を掘っておいたのに違いない。
　あーアホくさ。
「つまり私はお友達にカウントされていないと」
　やらせの第一容疑者候補たるメイドさんは、そう言って目を伏せ、大袈裟に肩を落としてみせた。
　演技だってバレバレでも、自分が悪いことしたような気にさせられる。この人、悪女の資格十分。
「……一歩も二歩も引いてるのは誰よ？」
　さっきまで女神然としてすましていた新川だったが、なんか急に拗ねたような表情になった。
「昔はもっとお姉さんみたいだったのに……別に嬉しかったとか今寂しいとかそういうのではないけれど」
「私にとっても大切な妹分ですよ？　でも、親しき仲にも礼儀ありと申します」
「なら許す……ハチ、何がそんなにおかしいって？」
「は？」

矛先がこちらに向いた。
「その笑い」
言いがかりです。
「笑ってないよ」
「いや笑ってる」
助けを求めるようにメイドさんの方を見るが、
「確かに笑ってますよ」
と断定されてしまった。
自分の顔に触れてみる。
「……ほんと、笑ってるわ」
指摘されて初めて。本当に久々に、自分が笑みなんてものを浮かべていることに気付いた。
こうやって手玉にとったりおちょくったりできるというのは、深いところまで理解し合っている証拠か。なんて考えているうちに、なぜか急に笑えてきたのだ。
主従という立場に歪められてはいるが、この二人は親友と言ってよい関係なのだろう。ツーカーで邪気眼ごっこに付き合ってくれるなんて、友情なくしてはあり得ないはずだ。それが羨ましくないと言えば嘘になる。
かくいう詠人にもかつては友達といえる存在が居たような気もするが、今や一人ぼっちの根暗な屋上登校ときた。
急に寂しさが押し寄せてきた。ずっと考えないようにして、遠ざけ続けてきた感情が蘇る。
失って久しい、親しさ、に触れた事が原因だろう。それに気付いてしまっては、もう二人を見ていられない。
無言で踵を返した詠人だが。

「待ちなさい」
新川に背後から腕をつかまれたのはよいとして……よりにもよって、そのままねじり上げられた！
「あてっ！　いててててて！」
なんてことしやがる！
「ハチ、あなたやっぱり、私達と一緒にいるべきだわ」
新川の台詞も声色も真剣なものだが、痛みにうめく詠人にはそれどころではなく。
「まずは、放せ！　あいたたたたっ！」
細い指が手首を巧みに締め上げ、関節を極めている。それだけで肘・肩・脳天まで激痛が走り続ける。
技が鋭いだけじゃない。痛みを無視して全身の力を込めても体重を掛けても、年下の少女を振り払う事が出来ない。
靴がコンクリートに接着されているか、さもなくば屋上自体に根を張ったかのようにびくともしないのだ。華奢な癖になんという力だろうか。
「それより先に、逃げないと誓いなさい」
カチンと来た。
「なんでそこまで言われなきゃならないんだ！　いいからさっさと放せ、しまいにゃ本気で怒るぞ！　あいたたたっ！」
「ん」
手首に加えられた力が抜かれると同時に、少女の体躯が相応の重さに変じ、詠人は自分の力で勢い余って転倒する羽目になった。
しかも、普通なら下敷きになるはずだった新川はくるりと体を返して詠人に追従、変形の脇固めに極め、本来受けるべきダメージを全部詠人に押しつけてくれた。

「ぎゃーす！」
都合、本日二度目の気絶とあいなった。

「良い度胸だ。気に入った。私のうちに来て兄さんとピーしていい」
詠人の肩を抜きかけた事実など無かったかのように、新川様は大上段に宣った。
いやいや、よりによって繊細な美少女がそんな台詞を口走るのはどんなものかと。
「端で見ていて少し肝が冷えました。風前の灯火からの大逆転とはお見事です。詩紀さんの勘所を鋭く突きますね」
またも膝を貸してくれている宮藤さんが怖いことを言っているが、演出だと思って気にしないでおく。
それより、なんで一方的に痛めつけられて、挙げ句居丈高にされなければならないのか、だ。
間違いない。こいつはリサと大差ない、世間知らずのワガママお嬢だ。しかも妄想癖あり。
メイドさん的には義理と友情とで邪気眼ごっこに付き合ってあげているのだろうが、絶対こいつのためにはならないだろう。
わずか一学年とはいえ、人生の先輩としてしっかり教育してやらねばなるまい。
「よし！」
膝枕の体勢から一挙動で跳ね起きる。
一瞬くらっと来るが踏みとどまる。これから上下関係をはっきりさせようって時に弱みを見せられるかっての。

「おい、新川」
「なに、ハチ？」
この態度……詠人のことは先輩どころか、メイドの宮藤さんに続く手下その二程度にしか考えていまい。
逆鱗に触れられた引きこもりの恐ろしさを思い知らせてくれよう。
「毎日昼休みと放課後、ここに来い！　正しい学生の生き方というものを、一から教育してやる！」
「へぇ」
「先輩にあっては道を譲り、人気者にあっては顔を伏せ、教師にあっては小さくなってお目こぼしを願う……」
右拳を握りしめ、詠人は吼えた。
「それが本来あるべき学生の姿ってものじゃないか!?」
びしりと人差し指を突きつけるが、新川にはさほど感銘を与えなかったようだ。
「うわ、小さ……」
新川のように輝ける者にとっては、軽蔑に値する意見なのかもしれない。
だが、大切なのは身の程を知ること。自分を本来以上に大きく見せようなんて愚の骨頂だ。力の足りぬ者はいつか痛いしっぺ返しを食らう事になる。
みずから光を放てる者ならなおさらだ。虚飾でわざわざ価値をおとしめる必要などない。
「確かにみみっちいとは思いますが、白州さんの仰りようにも一理あります。でもどうしてここで、そんなことを？」
メイドさんの方にはご理解いただけたようだ。この人も相当爪

を隠してるとみえる。
「あんたらはここで正義の味方ごっこをやりたいんだろう？　でもこちらとしては、スペース共有と引き替えに叶えてくれる願いとやらに興味はないんだ」
「それで？」
「その代わりと言っちゃなんだけど、こっちの趣味にも付き合えよ」
新川は不快げに眉を寄せる。
「なに？　コスプレとか鞭で殴るとか？」
「拘束されて罵倒されるのがお好みなのですね、わかります」
「……いや、そういうのじゃなくて、な」
宮藤さんはともかく、新川は本気なのか冗談なのか判断に困る反応だ。
怒りとともに盛り上がったテンションが、これで一気に削がれてしまった。
「ま、まあ、ここから追い出さないでくれればそれでいいんだ。こっちはそうそうここを離れられないから」
「……テラヨワス」
「今はこれが精一杯？」
かくして、なんとか逆転した力関係も再逆転してしまったという次第。
ヘタレでゴメンナサイ。全く面目ございません。
「仕方ないだろ、屋上登校なんだから」
「ふふん」
自己の優位を認識した新川は、腕組みとともに高らかに宣言した。
「いいわ。その条件、呑みましょう。当面は追い払わないでおいてあげる。あとはあなたの努力次第」
「すみませんねえ、お二方には随分と御迷惑をおかけしまして」
「構わないわ。わたしは寛大なので許してあげます」
皮肉も通じないのかこいつは。
が、宮藤さんは別の感想を持ったようで、
「詩紀ちゃん、やっぱり優しいのね」
と、左手で主の頭を優しく撫でる。
「……こんな時だけお姉さんらしくならなくていい」
「あああっ、身の程をわきまえず出過ぎた真似をしでかしてしまい、申し訳ありません。以後自重します」
実にわざとらしい。先ほどから機会を見つけては主をおちょくっている。見た目はいかにもオーソドックスなメイドさんなのに、中身は相当お茶目と見える。
「ともかく。白州さんとの交渉はこれで成立ということですね」
今度はこちらに左手を差しだし、握手を求めてきた。
「こういうめんどくさい主ですが、わたくし共々、どうかよろしくお願いします」
「いや、お姉さんこそあんなのの世話は大変ですね、っ!?」
ぱしっ。
詠人の肩口めがけて落下するような後ろ回し蹴りを、焦げ茶色の何かが払いのけた。
今、メイドさんの右腕がぶれて、おかしな具合に波打って伸びて曲がらなかったか？
この人も何やらおかしな武術を使うと見えるな。怒らせないようにしよう。

「詩紀さん、そういうのは突っ込みにしてはちょっと過激すぎかと」
「それを予測してた終も相当なものよね」
落ち着きはらったままで突っ込むメイドさんに、同じく素で返す新川。
こいつらにしてみれば、じゃれ合いの一種なんだろうけどなあ。いちいち付き合わされる身にもなって欲しい。
「追伸。わたしの主は凶暴です」
「それなら知ってる」
あと、あんたもな。
「まあいいわ。ハチの同意が得られたのなら話は早いわ」
新川は声を上げ、高らかに宣言する。
「我ら三人が一同に介したこの良き日。白銀珠比女命（しろがねのたまのひめのみこと）の名において。その発足に際し、我らが秘密結社を階段部と命名するものなり」
「かいだんぶ？」
聞こえが悪い単語だなあ。
「屋上部じゃ語呂が悪いわ。ここは階段部の一択でしょう。いわゆるダブルミーニングというやつ」
「一体どなたが上手く仰るようにと？」
どのへんが上手いのか理解できないが、気になる。
「階段……会談……いや、怪談？」
「ご明察」
どうして漢字まで分かる？
「推論」
尋ねたつもりもないのだが……こいつ察し良すぎ。
「私達が追うべきは奇妙な出来事。学校で奇妙といえば、怪談以外にある？」
どうしてこうまで断定調なのか。
「なんだ、怪獣でも捜そうってのか？」
とからかうと、
「本当にいたら大変ですし、捨て置けないでしょう？」
とメイドさんに返された。
「その可能性は考慮する必要があるんですかね？」
どうやら、まだ邪気眼ごっこに付き合うらしい。ほんとご苦労様なことで。
自称正義の味方として、二人はこの学校の不思議を調査・解決してまわるつもりなのだろう。
「三人、って言ったわよ」
「こらまて僕も数に入ってるのか？」
「私が真名において宣言した以上、断れるとは思わない事ね」
宮藤さんに目で助けを求めると、気の毒そうな表情で返されてしまった。
この人でも無理なのか。
「しゃあないなあ。でも見張りぐらいならともかく、聞き込みとか出来ないからな」
安全地帯たるこの秘密基地以外で、知らない人にこっちから話しかけるなんて勘弁である。
「そんなこと期待してないわ。ねえハチべえ」
そのあだ名には何かあまり愉快でない枕詞がつきそうな気がする。期待されてるのはその立ち位置なのか？
「つまり白州さんはマスコット役ですね」

ものは言いようである。見た目だけで言えば、この二人の方がよっぽどマスコットに相応しいのだが。
「……まあ、そこらへんでよろしく」
適当にあしらっていればじき飽きるだろう。もう一人のお嬢、阿南リサも同じだ。
この時点では白州詠人はそう信じて疑わなかったのだが……

翌日の昼休み。早速素晴らしい捜査能力を発揮した宮藤さんが、部室にて聞き込みの成果を披露する事になっていた。
詠人は当然拝聴する方の立場であるが、安全性に関して緊急に言っておくべき事があった故、あえて早々に口を挟む事にした。
「なあ、その前に一ついいか？　こいつは一体どうなってるんです？」
右手の親指を立て、ぐるりと辺りを指し示す。
「一晩で仕上げたにしては、なかなか快適だとは思いませんか？」
どや顔で答えたのはメイドさんだった。
念のため解説しておくと、部室＝屋上室のさらに上であるが……
水タンクの鉄骨台座をブルーシートと合板で囲い、部屋っぽい空間が作り上げられていた。
どこからともなく引っ張ってきたテーブルタップが鉄骨にガムテープで括りつけられており、電源も完備。電気スタンド、小型冷蔵庫、ゲーム機と液晶モニタ、電気ポットまで準備されているという至れり尽くせりっぷり。
以上のガテン感あふれる上部構造に対し、コンクリートの床にはめり込むほど分厚い絨毯と、豪奢な装飾の施された座布団が敷かれているというアンバランスさ。
あとなぜか雀卓があったり。
これが全部、宮藤さんの仕業らしい。
しかも、ずらりと並べられた豪華な重箱弁当も宮藤さんの手作り。これだけでも軽く数時間はかかりそうな手の掛かり方で、見た目も味も（ありがたくご相伴にあずかった）非の打ち所がない出来だった。
これじゃ寝る時間なんて無かったんじゃなかろうか。でも眠そうな様子は一片たりとも見せない。
「花丸をあげるわ、グッジョブ終」
「身に余る光栄です」
料理については完全に同意できる。
しかし、それはそれとして。まずいだろうこれは。
電源容量とか漏水対策とか問題は多々あるが、それ以上に重大なセキュリティーホールがある。
「目立たないのが生命線の秘密基地だってのに、シンデレラ城と太陽の塔のごちゃまぜみたいにしちまって」
外から見ると、タンクごとひとかたまりの張りぼてオブジェ状態だ。
「上手いこと言うわね。座布団あげる。金のやつと銀のやつとどちらがいい？」
「今の地味なやつで十分だ」
「あ、そ」
うちの妖精さんは正直者にご褒美はくれないのかね。
そんな分厚いのに座ったらかえって足が攣りそうだが。

「外見なんて飾りです。白州さんにはそれがお分かりにならないんですか」
「そもそも飾らなくていいの！　これじゃ隠れ場所にならないよ……」
明日からどうやってリサや手下の追撃をかわせばいいんだ。絶対にばれてるぞ、この場所。
「それについては心配ご無用です。選ばれた者以外による探知と進入を回避するため、斗流秘伝の人避け呪符を多数貼り込んでありますからね。校門からもグラウンドからも見えるのに、半日経っても噂にものぼっていないでしょう？」
言われてみれば確かに。今時分は物見高い連中が大勢集まって携帯電話のカメラを向けてもおかしくない。
しかし、だからといって、それがオカルティックな呪術の効果とは限らないわけで。
スモークの高級外車に不用意に近づきたくないのと同じじゃなかろうか。ここのデザインはどうみてもまともなセンスじゃないし。
学校当局や生徒会あたりに何らかの圧力も掛かってるんだろうな。
「仮とはいえ、詩紀さんの御座所ですからね。耐貫通・耐衝撃・耐熱・耐放射線の札も贅沢に使用してますし、ちょっとした要塞状態です。計算上は戦術核の直撃にも耐えられますよ。さすがにコロニー落としまでは保証できませんが」
どこに落とすコロニーがあるんだ……
「というわけで、納得いただけたら本題に入ってよろしいでしょうか？」
納得は出来ていないが、渋々頷く事にする。
ここへの出入りを見とがめられないようにだけは気をつけておくとするべきか。
「ここ光鷹中学校にはいわゆる七不思議が存在します。中身はといえば、トイレの花子さんだの動く人体模型だのベートーベンの肖像画の目がうんぬんといったありふれた噂ですし、十年以上伝わっているという事ですから、これらは考慮に値しないでしょう」
なぜ考慮に値しないかはともかく、面倒が減るのは有り難い。
「ただ、今年度に入ってからなってから急に囁かれ始めた、新七不思議というものがあるそうです。ゴールデンウィーク明けですから一ヶ月強の間出来事ということになります」
「ふうん、面白いわね。当然中身も調べてきたのでしょう？」
「噂の内容には諸説ありますが、最も怪しい七つをピックアップしてきました。まず、一つめの不思議として最もよく知られているのが、『大変よくできましたガイコツ』です」
「「……」」
なかなか反応に困るタイトルに、詠人も新川も首をかしげる。
「概要としては人体模型系の亜流だと考えられますが……どうにも奇妙な内容なんです。噂の主は一体の動くガイコツ。一人きりで歩いている女子を狙い、突然物陰から襲いかかり、額に『大変良くできました』というハンコを押して去るんだそうです。既に被害者は十人を超えています」
「「……」」
さらに反応に困る。なんだそれは？
「こういう話は噂だけで被害者が見つからないのが通例ですが、今回は実際の被害者がはっきりしているため水面下で学校側も動

き、警備員も倍増されています」
と、部外秘、と書かれたファイルを示すメイドさん。
うわ、顔写真に身体測定のデータまで揃ってる。どうやってこんな個人情報の塊を手に入れられるのだろうか。
新川家がどのぐらいのものかは知らないが、金の力ってのは怖い。
「この学校の女子生徒であるという事以外には、被害者に明らかな共通点はなし。学年も一年から三年までばらばら。成績もピンキリ。正直なところ、必ずしも容貌やプロポーションに優れた女子が狙われたわけでもありません。正体も目的も、今もって全く不明です」
優しい顔してぶっちゃける。女というのは同姓にはここまで容赦ないものなのだろうか。
「どうみても変装した変質者か狂言です。本当にありがとうございました」
新川はめんどくささを滲ませた口調でばっさり切り捨てるが。
「それで終わらせるなよ」
淡泊さに呆れて突っ込みを入れてやると、メイドさんも頷き同意する。
「当局は信じてはいないようですが、襲撃者は理科室に置いてあるような骨格標本そのものだったそうで、そういう柄の全身スーツを着た人間ではなかったと目撃者の証言は一致しています。さすがに捨て置きがたいと思われますが」
「そうは言っても、本当に超常現象なのかどっかの馬鹿の仕業なのか、後者として悪ふざけなのか重大な目的があるのか……どうにも判断に困るわね」
まさに新川の言うとおり。
「中には死体やガイコツを見るのも嫌がるようになってしまった娘もいるそうです。いわゆるＰＴＳＤですね。社会生活への適応に問題が生じかねない深刻な被害です」
「いやそれ普通に気持ち悪いから。日常生活でそうそう見る事ないし」
メイドさんが真面目に妙なことを語るので、ジョークかと思って突っ込んでみたところ、
「……言われてみれば確かに実害ありませんね。正直感覚が麻痺してました」
と、意外な反応が。どうして麻痺してるのかは聞きたくない。
「馬鹿馬鹿しい。次行きましょう」
新川はあくまでも淡泊で、この件には既に興味を失っているようだ。その気持ちは分からなくもないが……
「いやいや待て待て。ここまでくちばし突っ込んだんだから、関わったからには半端にするなよ。最後までちゃんと関われって」
「……ハチの言にも一理あるわ。確かに、やるからには徹底するべき。根こそぎに容赦なく断固として」
説得のどの辺に反応したのかはわからないが、なぜかあっさり気が変わった。女というイキモノはつくづく理解しがたい。
まあ何にせよ、妖精さんがやる気になってくれたのなら幸いだ。若干引っかかるところはあるが……
「本当にオカルト事件だったら捨て置けませんしね」
メイドさんの発言も、どうも引っかかる。
「……変質者でも十分以上に問題だからな、今は無害でも今後どこまでエスカレートするか分からないんだし」

ややあって。
「そういう考え方もありますね」
「独自研究に基づく諸説の一つに過ぎないけどね。善良なる管理者としては尊重するにやぶさかではないわ」
口ではそう言いつつも、驚きの表情を浮かべる二人。
「……発想さえなかったって認めろよな」
やっぱり感覚がおかしいぞこいつら。
「ふっ、認めたくはないものね」
「若さ故のなんとかですか？」
あーもう、オタクってやつらは！
能力と権力はオークションで売るほど持ってる癖に常識が決定的に足りない。こんな困った連中、野放しにしておいちゃだめだろう。人として。
しっかり監視して常識で突っ込みを入れ続ける、それが詠人の果たすべき使命と改めて心得る。
「なんにせよ、まずはそのガイコツを捕捉しなければ始まらないわ」
「それが、目撃場所も時間も必ずしも一定しないんです。共通点といえば、被害者は常に一人きりになったところを狙われている点だけ」
ならば。
「女子が一人でいれば誘い出せるか？」
「ハチ、私をオトリにしようとか考えていない？」
そこらへんは言わずもがな。さきほど詠人を一瞬で沈めた手腕からして、新川の戦闘力がそこらの暴漢に引けをとるとは思えない。
「残念ながらそれでは不十分かと。この学校全体で、女子が一人になりうるタイミングがどれほどあるか」
宮藤さんの言う事もごもっとも。
くだんのガイコツ氏にとってもっと魅力的な餌を用意して一発で食いつかせないと、被害が広がるばかりだろう。
「どうせ何か共通点があるんじゃないの？　普通に調べても盲点になるような」
「かつ、その気になれば調べがつくような共通点ですね」
「……実はゾラ、とか？」
「ありえないし」
本気で軽蔑しないでいただきたい。冗談だから。
「でも。いいところ突いてる気がする。なんとなく」
「禿同させていただきます」
べつに上手いこと言わなくて良いから。
「そういう系でいいのなら、実は腐女子とか」
不思議そうに顔を見合わせる二人。
「むしろ主流派でしょ？」
「掃いて捨てるほどいますよね」
「……」
いやね、女子にしてみれば常識なのかもしれないが。一男子中学生にとってみれば世界観が一変するほどの衝撃的事実です。
忘れよう。不都合な事実はすっぱり忘れるに限る。
「じゃあ、実は鉄ちゃん」
「むしろ離れたような」
「リテイクプリーズです、白州さん」
「なら、ひそかに歳ごまかしてる」

「はい消えた」
ちゃぶ台を叩いて一刀両断された。
「だんだん離れていってるような感じですね」
メイドさんに言われるまでもない。自分でもそう感じる。
がしかし、だ。
「なあ、さっきから考えてるの僕だけじゃないか⁉」
この二人、ひたすら駄目出ししてるだけのような気がするのだが。釈然としないものがある。
「ハチがここから出たくないって言い張るから、せめて活躍の場を与えてあげてるんじゃない」
と上から目線。
「その件に関しましては頭脳労働担当大臣殿に全面的に一任いたしております」
こっちは褒め殺し、というか位討ちの一種か？
要するに詠人をからかって反応を楽しんでるんだろう。悪気はなさそうだが純粋に悪趣味だ。
リサといい、高貴なお嬢様連にはこういうのが当たり前になっているんだろうな。
自覚がないなら喚起せねばならない。ここは言うべき事を言おう。
「なあ、こんな事やってる間にも、『えへへおじょうちゃんどんな色のパンツはいてるのかなげへへへ』とか変態ガイコツに追い詰められてる生徒がいるかもしれないんだが。そこらへんについておたくらの意見を聞きたい。被害者を減らすより僕で遊ぶ方が大事なのか？」
主従の表情が真剣なものになる。
お嬢様育ちだけに、否定的な言葉を真正面からぶつけられる事など、そうそう無かっただろう。さすがに凹んだか？
自覚を促したいだけで非難するのが目的ではないだけに、詠人としてもあまり気持ちの良いものではない。少しは薬が効けばいいんだが。
無言で見つめてくる新川の目が据わっている。
やばい。逆ギレされたら今度こそ手加減無しのフルボッコだ。先ほどの交戦（というのもおこがましい一方的な攻撃だったが）で彼女の実力は痛感している。
相対位置は差し向かい（ヘッドオン）。向こうは正座でこちらは胡座であるから、初期条件は五分。一対一なら逃げに徹すればなんとかなるだろうか。
しかし、狭い部屋の中で二対一。メイドさんは新川側について参戦する可能性がある。彼女の戦力は未知数だが、たとえ最低限に見積もっても、一瞬でも退路を断たれればそれでジエンドだ。
二人が目配せしあう。
……刺激しすぎたかな？
いつでも逃げられるように軽く腰を浮かせておこう。
にやりと笑みを浮かべ、ぱちんと指を鳴らす新川。
「終？」
「イエス、マム」
が、予測していた襲撃はなされなかった。
あれれ？
宮藤さんはなんだか茶道っぽい所作でブルーシートをめくると、困惑する詠人と主を置き去りに部室を後にする。
「……」

まさか、武器になりそうなもの取りにいってるとかじゃないだろうなあ。
もしや何か思いついたのだろうか。
「落ち着いて座ったら、ハチ。餅は餅屋。あとは専門家に任せておくことね」
って、何の専門家なんだろうか。
あの人、格好はメイドさんそのものだがだが、身のこなしは女忍者（くのいち）を感じさせる。
新川は見た目がいかにも普通じゃないが、宮藤さんは見た目以外がミステリアスすぎる。
ほんと、こいつらは何者なんだろうか。
「暇だしゲーム付き合って」

ぴったり二十分の後（ちなみに格ゲーは詠人の二十五連敗であった）、
「ビンゴでした」
聞き込みから帰還した宮藤さんは、新川と詠人に向かって長手袋の親指をびしっと立てて見せた。メイド姿には不似合いな態度だが、なにやら不思議と決まっている。
「被害者の全員が、当日はボーダー柄のショーツ。俗にいうところの『しまパン』のローライズモデルを着用していたそうです。お手柄ですよ白州さん」
「……じょぉだん」
なんたるピンポイントさ。どういうガイコツなのだそれは。
「それじゃ何か？　好きなデザインのパンツ穿いてる女の子を、大変良くできましたと褒めてるわけか？　そのガイコツ氏は」
「……そうなの？　流石ね、私には変態の思考なんて理解できないから、まったくの盲点だったわ」
新川の視線に軽蔑が籠もっていると感じられるのは気のせいか？
「褒められた気がしないんだが……」
「最初からただ一人を狙い打ちにしているということは、事前にそれを確かめている、という前提が成り立ちますよね」
お願いですからスルーしないでフォローしてください宮藤さん。
「下着の柄を察知する特殊能力を備えているのじゃなければね。寡聞にしてガイコツが怪談下で這いつくばっていたなんて話は聞かないわ」
「ガイコツが式神のようなものにせよ、犯人の変装あるいは変身であるにしろ、普段は目立たない格好で下着の柄の調査を行っているとみて良いでしょう」
「要するに、覗き魔あるいは盗撮魔をつかまえれば済むわけか」
随分とシンプルな話になったな。
「しかし、そうした被害を受けたという証言はまったく無いのですよ」
宮藤さんこそ流石だ。既にそこまで捜査を進めている。
「よほど巧妙な手口を用いているか、あるいは」
「ハチ、あなたも手伝いなさい」
メイドさんに皆まで言わせずに、新川はそんなことを言い出した。
「安全なここをなるべく離れたくないんだけどな」
そもそも屋上登校のうえ、リサ様によって指名手配中の立場でもある。

「それが賢明でしょうね」
宮藤さんまで!?
「何も誰かと話せとか言ってるわけじゃない。相手を警戒させずに見張るなら、ハチほどの適任はいないって話」
悪うございましたね地味で。
「目は多い方が確実ですしね。大丈夫、安南リサさん本人にさえ気をつければ、あなたほど隠密行動に向いた方はそうそういません」
「ソリッド・白州の称号をあげてもいいわ」
そんなもの貰ってもなあ。
四六時中段ボールかぶって移動しろとでもいうのか。あれは想像より遙かに辛いものだというのに。

要請という形式を借りた脅迫を断り切ることは出来なかった。
新川だけでも手強いのに、一学年上なだけで百戦錬磨っぽいメイドさんにまで参戦されては、詠人に抗う術など一厘たりとも残るまい。
言われるままに、絶好の覗きスポットの一つである階段下（の段ボールの中）に隠れて見張りを続けていた。
こんなところをリサに見つかったらそれこそ言い訳できないので、さっさと片を付けたいところだが。
三日を費やしても、覗き魔などついぞ現れなかった。
その代わり、なぜか踊り場にガイコツ氏がいる。既に調査済みのターゲットを狙いに（褒めに？）来たってわけだ。この可能性は考慮になかったな。
しかも、ターゲットは安南リサ。くだんのガイコツ氏は、お付きの執事氏のお手洗い休憩のタイミングを狙っていたようだ。
これはどうしたものか。
とりあえず、宮藤さんから渡されていた狼煙符とかいうのを破る。メモ帳の一ページに筆ペンで落書きしたようにしか見えないが、これで魔術的に緊急信号が送られるという話だ。本当か？
「何者？」
リサはサングラスごしに踊り場を見上げ、夕日を背に負ったガイコツを見据える。
まったくいつもの調子だ。強気お嬢は全然状況が分かってない。
変態を無闇に刺激しては危険だ。でこにハンコだけでは済まなくなる可能性がある。
「ちっ」
敵とはいえ同級生の一人。放っておくわけにはいかないだろうな。
「安南リサ！」
カモフラージュの段ボールをキャストオフ、リサの前へと飛び出す。
「っ！　貴方は……」
リサの声色がこわばる。いやいや、詠人よりはガイコツ氏を警戒してほしいところだが。
「一次休戦だ！　ここは逃げろ、あとは僕たちが何とかする！」
「で、でも貴方……」
「そ・ん・な・こ・と・は、どうでもいい!!」
不満げな台詞に対し、勢いと気合いを押し被せる。
「なるべく遠くまでいけ！　そしてさっさと執事さんを呼び出して合流しろ！　絶対こっちには戻ってくるんじゃない！」

「え、ええ」
こくこく。
リサは詠人の言葉に圧されるように二度頷くと、ステッキで床を探るようにしてすり足でその場を離れていった。サングラス外せばいいのに。
「さてと」
見るところ。ガイコツ氏は理科準備室においてある骨格標本そのものだ。関節が金具で継いである。
しかも、露骨に後ろで黒衣が動かしてるわけだが。
被害者は節穴さんばかりか。
「貴様、何のつもりだ」
ガイコツが口を開く。
実際、腹話術に合わせて下顎骨をかたかた動かしているわけで。芸が細かい。
「我が崇高な使命を妨害せんというのなら、ただでは置かぬものと知るがよい」
痛い。
まあ、しまパンなんぞにこだわっている時点でまともなやつではないと想像はついていたが。
しかしどう対応したものか、と考え始めたところで、
「ハチ！」
「御無事ですか？」
二人がすぐに到着したところをみると、先ほどの狼煙符とやらは本当に効いたようだ。
「……何この痛いの」
一目見て眉を顰める新川。気持ちはよく分かる。
「そこのガイコツさん。差し支えなければ目的を伺ってもよろしいでしょうか？」
このメイドさんは誰にでも丁寧なんだな。
「目的？　目的だと？　知れた事よ。腐りきった人類の抹殺だ」
随分と大きく出た。二人羽織の癖に。
「で、その壮大な計画と、見なし痴漢行為との間に何の関係が？」
ガイコツの肩が落ちた。ちゃんと傷付いたように見える。ほんと芸が細かいな。
「無礼なやつめ。これは綿密な調査に基づいたマーキングだ。保護対象は確実に粛正対象から外さねばならないからな」
しまパン娘は粛正対象外、と。
「これはひどい」
言葉が口を突いて出た。信念はある意味立派とも言えるが、理解は出来ない。
「安心なさい。私にもわからないから」
「右に同じです」
「そちらの綺麗なのとメイドはなかなか見所があるようだ。今からでも遅くはないから改心してしまパンを身につける事だな。さすれば我が嫁にしたうえ、世界の半分をやろう！」
「では私は二次元をいただきたく」
と、宮藤さん。なんのこっちゃ。
「そ、それは困る！　他の嫁達に会えなくなる！」
「……これ、キモヲタの生き霊じゃないの？」
霊うんぬんはともかく、前半には激しく同意。
「霊体のままでは物理干渉が難しいため、骨格標本に憑いて動かしてるようですね。あの標本は本物の人骨のようですから、人魂

とは相性が良かったのでしょう」
メイドさんがなにやら捨て置けないことを宣っているが、そこは気にしたら負けな気がする。
つまりは、後ろの黒衣が生き霊だというのか。
「その妄想を叶える手伝いをしちゃったのは詩紀さんですからね」
願いを叶える、ってやつだろうか？　それも十分妄想に聞こえるのだが。
「だから片付けに来てるんだけど。終、任せるわ」
「……かしこまりました」
「自分で片付けないのか？」
「秘密基地ごと校舎消し飛ばしてもいいのなら」
「……」
そんな会話の間にも宮藤さんは階段を上り、ガイコツの前にまでたどり着いていた。
「な、何だ。何のつもりだお前ら！」
さすがのガイコツ氏も、まるで物怖じしない二人に調子を狂わされていると見える。
「こっ、怖いぞ、呪うぞ！」
腰の引けたガイコツ、情けなし。
「よいしょっと」
宮藤さんが長手袋の右手を伸ばして無造作に黒衣の腕をつかむと、がしゃりと音を立てて骨格標本が踊り場に転がった。
「っ⁉　なっ、なんで僕に触れる⁉」
「それはもう、専門家ですから」
夕日に映える、メイドさんのすっごくいい笑顔。
「ひぃ！」
じたばた足掻く黒衣だが、宮藤さんの右手一本で完全に拘束されている。
ワンハンドシェイクデスマッチ。しかし新川すら一目置くメイドさんに、ひ弱なインドアオタク風情が勝てるはずがない。
「さて、どうしましょう。古式に則り、指を一本ずつ折っていきましょうか。あっさりゲロしないでくださいね、楽しみが減りますから」
「ぎゃーっ！」
以下、残虐シーンは割愛させていただきます。
……と言いたいところだが、情けないことに黒衣氏は手首の関節を極められただけで絶叫をあげ、あっさりギブアップを宣言。
見た目に反してつくづく情けないお化けであった。
詠人に出来ることと言えば、生き霊にも関節ってあるのか、とかくだらないことに感心するぐらいで。
「ずびばぜんずびばぜんずびばぜんもうしませんたすけてたすけて」
あ、消えた。
「身体に戻ったようです。本体がどこかまでは確認できませんでしたが、これだけ怖い目に遭わせておけば当分は殻から出てこないでしょう」
鬼だ。鬼がいる。例え行状に多分に問題があった奴とはいえ、引きこもり仲間としては深ーく同情するにやぶさかじゃないぞ。
「とりあえずこれで一件落着」
何もしなかった新川は乏しい胸を張って宣言するが、
「やっと一件な」

まだ六つ残ってる事を忘れて貰っては困る。

翌日。昼休み。

「第二の不思議の舞台はプールだって話だけど？」

「はい。光鷹中新七不思議のその二。水泳部員の間で恐怖の代名詞として囁かれる、『プールの主リヴァイアちゃん』です」

主の問いに答え、宮藤さんはそう言った。

「学校側はこの噂を重く見て、設備老朽化を建前にプール使用を禁止したようです。おかげで大会に向けての練習もままならないとのこと。こっそり忍び込もうにも体育の西浦教諭自ら見張りに立っていますから、皆自腹を切って市営プール通いとか」

リヴァイアサンとは聖書にも出てくる巨大な海の怪物の名前だ。学校のプールなんて、クジラ一頭で溢れそうなスケールには似つかわしくない。

だからこそ、ちゃん、なのだろうが。

「推定身長一九〇センチ前後。瞬きしない大きな目玉、首の両側に鰓。両手に水かき。目撃者の証言を総合すると、不審者の姿は以上のような具合になります」

「まんま半魚人かよ……」

映画とかで同じみのモンスターの姿そのものだ。

「深みのモノ（ディープワン）？　まさか」

新川が頸をかしげる。

「あり得ませんね。水の魔物の動向を詩紀さんが感知できないはずがないでしょう。いえ、そうなるとこれはヤラセの可能性が高くなってきますね」

根拠はよく分からないが、詠人としても人間の仕業説に賛成だ。

「水泳部の活躍であおりを食らって予算を減らされた部が噂を広めているだけ、とか」

「いいえ。目撃者は何人もいますし、水泳部も含まれています。彼らが嘘をついていない事も、横の繋がりがない事も確認しました」

どうやって確認したのかは尋ねるまい。それが肉体的精神的健康に影響を及ぼさない方法であることを切に願っておこう。生き霊相手とはいえ前科があるし。

「演劇部あたりが宣伝効果を狙ってとか、科学部あたりの暇人が特殊メイクを実地でためしてみたくてとか」

「可能性としてはあり得ますね。とりあえずそこらへんを締め上げてみますか？」

「締め上げるって物騒な」

「いえいえ、同じ学校の仲間相手に暴力なんて……理事会の方に手を回して、難癖付けて予算供給を滞らせて反応を見るだけですが」

こらこら。

「そういうのも面白いけど、ちょっと迂遠すぎるわ。前回みたいなワンダリングモンスター相手じゃないのだから、放課後にプールに乗り込んでとっちめれば済む事ではない？」

「なるほど、ではそのようにいたしましょう」

このメイドさん、納得している口調なのにどうして表情は残念そうなんだろうか。

その放課後。

「こら、プールは使用禁止だ。ちゃんと連絡を聞いていなかったのか」
プールの門前に腕組みして立つ、ジャージに竹刀のマッチョマン。出で立ちだけで説明は不要だろう。誰あろう、体育の西浦教諭だ。
とにかく身体を鍛えるのが趣味だとかで、布地の胸や腕・腿の部分が筋肉でパンパンに張っている。
「別にプールに入るつもりはありませんが」
「はい。後学のため見学させていただこうと思いまして」
頭一つ半も違うこわもてマッチョにだみ声で凄まれてなお、眉一つ動かさずにこちらの意見が言えるのだから、この二人、実に大した神経だ。
詠人はといえば、もちろん陰から生暖かく見守っている。身の程を知ることも大切だと、行動をもって二人に教えているのだ。で、それが何か？
「ええい、駄目だ駄目だ。この僕が守る限りは、たとえ皇族でも神様でもこの門を通ることはまかりならん」
ほら言わんこっちゃない。世の中には可愛げや理屈や権威が有効な相手と、そうでない相手があるのだから。
「解散、解散だ解散！」
竹刀を振り回すマッチョ教師。
いかに新川や宮藤さんでも竹刀持った体育教師には勝てまい。そもそも体格に差がありすぎる。
例え勝算があっても、ただ邪魔だといだけの理由で校内で教師をぶちのめすわけにはいかない。
さすがの新川主従もこの門番を突破することは適わず、仕切り直しを余儀なくされた。
「で、どうするんだ？」
「どうも何も、さしもの脳筋ゴリラにも一晩中見張りを続ける体力なんてないでしょう？」
新川は事も無げに言うが、お嬢様が口にするような単語ではないだろうに。
「襲撃する方は悠々と時間を選べますが、守る方は常に気を張り詰めていなければいけませんしね。そこで、さきほど顔を出して未練を匂わせたのが効いてくるんです」
「はあ、分かりやすい解説ありがとう」
やっぱり鬼だこいつら。
「ここはお約束の払暁奇襲といたしましょう」
「作戦開始は〇四〇〇。それまで各自身体を休めておきなさい」
「アイ、マム」
各自、には詠人もカウントされているのだろう。きっと。
しかし、これだけは言わせて欲しい。
「おまえら、花も恥じらう年頃の女の子だろ！　男と同じ部室で寝るまではともかくとしても……その迷彩柄の寝袋はなんだ！」
「ドイツ軍仕様と南ア軍仕様」
「そういう意味じゃないんだけどな」
やっとうとうとし始めたと思ったところで、耳元への起床ラッパ直撃で叩き起こされた。
宮藤さん、凝りすぎです。
そしてお約束の払暁奇襲。

「作戦目的は捜索と破壊（サーチアンドデストロイ）。プール敷地への強行突入の後、コードネーム『リヴァイアちゃん』を目視確認の後、これを撃破します」
「なんでもかんでも撃破してどうする！　見極めてから対処を考えろよ」
「ノリ悪いわね、ハチ」
「むしろおまいら暴走しすぎ。自重しろ」

あそこまで遊んでおきながら、実際に動くとなるとツーカーで玄人裸足。詠人はついていくだけで精一杯だった。
今回は表門ではない。ぐるりとプールの裏に回り込んでの柵越えを狙うコースだ。新月近い細い月明かりだけを頼りに、物陰を伝うように音もなく進む。
かく言う詠人も、忍び歩きは得意中の得意だから何とかなっているようなものだ。必要に迫られて身につけざるを得なかったというのが悲しいが。
事前工作と努力の甲斐あって、なんとか気付かれずに校舎との間にあたる死角にまでたどり着く事に成功した。
さて、この二人にどうやって柵を越えさせるかなと（なにせスカートの制服にメイド服だ）思案していたところ……
「詩紀さん、これをご覧下さい」
「……ふーん、そういうことね」
「こらこら、声がでかい！」
なんたる不注意。先ほどまでの慎重さが嘘のようだ。
何を見つけたのかは知らないが、声を上げた二人に対し、小声でぴしりと注意を喚起する。せっかくここまで来ておいて、リヴァイアちゃんを見つける前に西浦に気付かれたらどうするのか。
が、その危惧は裏切られた。
背後から迫る、ひたり、ひたりという足音。
振り向けば、微かな月光を浴びてててらてらと光る皮膚。
猫背ぎみだが、背筋を伸ばして立てば二メートル近いだろう。
瞬きしない大きな目玉、首の両側に鰓。両手に水かき。いずれも噂に伝え聞く通りの姿。
詠人の目から見ても、ただ一分の隙もない半魚人。正真正銘の怪物だった。
ガイコツ氏に引き続き、こんな非科学的でオカルティックなものと対峙している。なんて学校だろうまったく。
「……リヴァイアちゃん、じゃあ可愛すぎだろう」
嘘、大袈裟、紛らわしい。公共広告機構に訴えてやりたくなる。
詠人達を牽制するかのように。がおう、とライオンか虎のような吠え声を上げる。リヴァイアちゃん（とは呼びたくない）もとい半魚人氏の目的は皆目分からないが、間違っても友好的な雰囲気ではない。
「あの、もし？」
話しかけたが、完全に無視された。まあ、人語を解する確率はせいぜい五分五分だろうとは思ったが。
再び吼える半魚人氏。後足で立ち上がった熊よろしく、水かきと鈎爪のある両腕を振り上げる。
「やばいぞ！」
声を掛けるが、二人は金縛りにあったかのように動かない。
「おい、二人とも！」
新川が、は～ぁ、と大袈裟にため息をつく。
宮藤さんはといえば、肩をすくめてお手上げの仕草。

おいおい既に諦めムードか!?
「それで？　次はどうします？　火でも吹きます？　それとも目からビーム？」
挑発するような新川の台詞に、半魚人氏はわずかにたじろいだ様子を見せる。とすると、やっぱり日本語が分かるんだろうか。
「もうこの辺でよろしいでしょう。覗き穴とファスナーが見えていますよ、西浦教諭」
今度こそ明らかだった。半魚人はびくりと身体を震わせ、一歩退く。
って、西浦だって？
「なんで分かった？」
くぐもってはいたが、半魚人の口以外から放たれた音声は間違いなく日本語であった。
水かきのある手で頭を掻く仕草で、急に人間くさくなる。
月明かりで見るからリアルに感じられていただけで、子細に観察すれば明らかに着ぐるみだ。
「推論よ」
新川はこればっかりだ。
「見張りを続けられる時間以外にもここに人を近づけないためには、こういった搦め手からの手段も有効ですからね」
メイドの宮藤さんは得心のいった様子で、何度も頷いている。
「参ったな。そこまでばれてたか」
半魚人氏、いや西浦教諭はどっかと腰を落とし、語り始めた。
「ここだけの話だぞ。老朽化が進んで補修が必要だってのは建前でな、実際にいつ事故が起こってもおかしくないレベルなんだよ。なのに、水泳部の連中が夜中に忍び込んでは勝手に練習に使うのが危なくて仕方ないんでな。それでこんな方法を考えたってわけだ」
筋肉だけかと思ったら、意外と考えてるんだな。ちょっと感心した。
「なかなか良いアイディアだろ？　お前らにバレるまでは上手く行ってたんだぜ。ここまで肝の据わった女どもがいるとは思わんかったがな」
がっはっは、とくぐもった声を上げる西浦教諭。
ふふふ、と上品に笑う新川。
「そちらこそ、大した鉄面皮っぷりね。ねえ、終？」
「ギャンブルですか？　女性にでも入れあげましたか？　それとも違法ステロイドの代金がかさみました？」
半魚人の高笑いが止む。
宮藤さんは辺りに繁った背の高い草に手を伸ばすと、葉を一枚ちぎり取った。
「知らない人にとっては手入れのなっていないプールの裏庭ですが、知識のある人間にとっては宝の山ですね」
ひらひらと指先でもてあそばれる葉は、ヤツデの切れ込みをさらに強くしたような独特な形状だ。
「まさか中学校の敷地内に大麻草が自生していたなんて、お釈迦様でも気がつきませんでしょう、でもマリア様は見てたりして」
話の展開が早すぎたため、状況の理解するには数秒の時間が掛かった。
話を総合すると。この筋肉おっさんは、偶然見つけたお宝の収穫までの間に人が近づく事がないよう学校当局に嘘の報告をし、さらにお化け騒動まで起こして徹底的に学生を追い払いに掛かっ

たという事になる。
　自ら栽培していたのでなければ現時点では犯罪にはならないのかもしれないが、これが外部に漏れればちょっとした醜聞ではすまないだろう。
「でもマニア様はちゃんとみてる。ね、終？」
「詩紀さんモナー」
　主従はそんな軽口をたたき合ってはいるが、大切な秘密の場所を荒らされた主がどういう態度に出てくるかは自明の理であるわけで。
　無言で立ち上がった不良教師は、鈎爪のついた腕を振り上げ、叩きつけるように振り回した。
　ほら、口封じだ。
　だが新川は、軽やかなステップで一歩下がって、西浦の拳を軽々とかわす。
　わざとらしい挑発で攻撃タイミングを予測していた所以の適切な回避行動ではあろうが……その挙動の軽やかさときたら、蝶の羽持つ妖精が風に乗って巧みに舞うかのようだ。詩才のない詠人にさえこの鉄火場でそんな事を考えさせてしまうほどだから、口さえ開かなければ絶世の美少女で通るのだが。惜しい。
「あら先生、こんなところで暴れたら大切なティーが台無しよ。これが本当の無茶かしら？」
　ほらな。早速これだ。
「相手を無闇と追い詰めるのには感心しませんね。やぶれかぶれのバンザイ突撃が来ますよ」
　そんな悠長なことを口にしている間にも状況は動いている。新川を守るように進み出た宮藤さんに西浦の拳が迫る。
　だが、鍛えに鍛えた体育教師の運動能力でも、着ぐるみの負荷が加われば話は別だ。関節の可動域は狭くなり、動きは遅くなる。
　大降りの攻撃を回避ざまに宮藤さんは一歩踏み込み、西浦のど元に手刀、顔面に掌底の二連撃を打ち込む。
　相当に腕のたつ宮藤さんとはいっても、所詮は中学生の女の子だ。筋肉の鎧相手にはダメージらしいダメージは通らない。しかも、動きを阻害する着ぐるみは、一方で強靱な鎧として働いている。
　一方は当たらず、一方は効かず。互いの攻撃が有効打にならない状態。
　ならば、ここでクレバーな対処法はといえば、
「新川、人を呼びに行け！」
　あのオッサンのパワーなら、着ぐるみをかぶっていても中学生には追いつけるだろう。だが、どう考えても一度に三人は足止めできない。宮藤さんをオトリにするようで気が引けるが、分散するのが最も確実だ。
「ん？　でも、もう終わるわよ」
　どすん、びしっ、という音に続き、くぐもった悲鳴が響く。土嚢に押し込められた豚が絞め殺されるような、とでも形容しようか。
　転がされた西浦の膝関節が、分厚い着ぐるみごとあり得ない方向に曲がっている。
　つまり、あれか。蹴り足の戻り際に踵固めで瞬殺。着ぐるみの鎧も関節技には無力だったと。
　あ、声が途切れた。悶絶したかな？　不運な小悪党に合掌。

我ら光鷹中階段部はその後も二週間にわたって新七不思議に対する調査と介入行動を続けた。その結果、第三、四、そして第五の不思議についても正体を暴き、一応の解決を見ることが出来たと自負している。

事件の詳細については省くが、

「ここはひどい中学校ですね」

とだけ言わせてもらう事にする。

その過程においては、ある時は平和的な交渉（悪辣な脅迫とも言う）が、ある時は逸失利益の補償（札束で頬をはたくとも言う）が。またある時は激しい交渉（肉体言語とも言う）が用いられた。そのいずれの場合においても、新川・宮藤両名の手腕には特筆すべきものがあった。

正直、二人のことを誤解していた。最初はちょっとヤバイ連中だと思ってたんだが、撤回せねばなるまい。

ちょっとで済むか。ぶっちゃけこいつらヤバすぎ。

オカルトの領域に精通し、超常現象を恐れず適切に対処できるなんてのは、新川や宮藤さんの怖さのほんの一面でしかない。

同年代の少年少女と比べて頭脳明晰で行動にも思考にも澱みがない。そこまでは良い。

が、それと同時に、他からの評価など一切気に掛けない。必要悪をなす事にも躊躇がない。社会常識とか良識とか、そうした他者の基準に思考を預けたり、甘えたりしようといった発想は皆無だ。

かといって自分一人の力で成し遂げようという拘りがあるわけでもない。家の財力や権力におぼれることも、逆に忌避することもなく。有効に利用できるものがあるなら当然のように利用するという柔軟さがある。

言葉で言い換えるならば、自分の行動の責任は自分が負うという当たり前の覚悟を持っているとも解釈できるが……両親の庇護下にあるはずの中学生がそういう境地に達しているという事こそが何より恐ろしい。一体どういう育ち方をしたら、老獪な少女戦士なんて奇形的なイキモノが出来上がるのだろうか。

そんな新川たちに畏怖を感じる。と同時に、その潔いまでの自然な在りように、どうしようもなく惹かれるのを感じる。

この二人の近くにいると、人前に立つことさえ恐れる自分が惨めに感じられた。

ずっと逃げ続けてきた事を恥ずかしいと思えた。初めて、自分を変えたいと思う事が出来た。

このまま階段部にいれば、変わっていけるかもしれない。そう思えた。

「……一六三〇時。集音ユニットに反応ありました」

「さて、第六の不思議に挑戦しましょうか」

「白州さん？」

「うぃっす」

促されるまでもない。調査行に同行させられる事にも、もう疑問は感じない。

二人に着いていったからといって何ができるわけでもないが、かくいう詠人自身がこの二人を見届けたいと考えている。

屋上登校を始めてからどれぐらいになるだろうか。

人との関りに楽しさを感じて高揚するなどどれだけぶりだろうか。未来への希望と生きている実感に、詠人は今確かに心躍らせ

ていた。

そして、すぐに萎えた。

「これが光鷹中新七不思議のその六。『旧音楽室のピアノと声』の真実です」

「……なんでだよ！」

旧校舎の施錠された音楽室から不定期に響いてくるピアノの音色と、人の声。

普通の生徒はこんな薄気味悪い現象にわざわざ近づこうなどとしないのだが、階段部は別だ。

予め仕掛けておいた盗聴マイクで演奏開始を確認し、メイドさんの見事なピッキングにより（いつもの事ながら呆れる）問題の旧音楽室に踏み込んでみれば。

バスガイドさんよろしく宮藤さんが示すその先には、古ぼけてはいるが良く調律されたピアノ。弾き語るは、一人の少女。

間違っても超自然現象なんかではない。合い鍵さえ入手していればそれまで。幽霊の正体見たりというやつだ。

だが、詠人にとっての最大の問題点はそんなところにはない。

燃えるような赤毛の少女は、鍵盤を叩く指を休めると、詠人達に視線を向けてきた。

いや、正確には彼女の視線は詠人ただ一人に注がれている。薄い色のサングラス越しにもはっきり分かる。

無粋な侵入者に対する抗議、というわけではないだろう。

詠人の頬はさぞや引きつっている事だろうが、それはあちらも同じ事。

新川はにやにや笑いを浮かべて、明らかに面白がっている様子。

他人事だと思いやがって。

「草むらを抜けてみたら、猟師と熊が隣同士、ってとこだ」

勢子を連れぬ狩る側の者と、仲間を連れているとはいえ狩られる側の者。互いに予想外の不幸な遭遇。

現に、赤毛の少女にしても、信じられないものでも見るような態度を隠しきれない様子。

が、

「ふう」

赤毛少女は何度か頭を振ってから一息つくと、こちらに向きなおって足を組みなおす。

スイッチを切り替えて仕切り直しといったところか。さすがにセルフコントロールの術は心得ているようだ。

「どうも今日はついているみたいね。追っても追ってもつかまらないキミが、まさか自分の方から出てきてくれるなんて」

韜晦はもうやめておこう。

ピアノを弾いていたのは赤毛にサングラスのお嬢。詠人の天敵、安南リサその人。

先ほどまでの動揺が嘘のよう。研究対象の生態を観察するかのような態度。

「ほんと、興味深いわね」

悪寒が走る。あまり愉快でない類の好奇心を隠そうともしない笑みが怖い。

「失礼。ハチとは積もる話もあるのでしょうけど」

新川に声をかけられた瞬間、リサは大袈裟に身体を震わせた。

サングラスの奥の瞳が何かを求めるように揺れる。

「先に本題を進めさせてもらってよろしいかしら？」

リサは小さく舌打ちするとサングラスを取り、新川達の方を見やって眉根を寄せた。
「んー」
日がおちてよく見えなくなってきたが、サングラスを外したら今度はピントが合わなくなった、ってところか。
続いてリサは驚愕の表情に。まあ、あのど銀髪を初めて見たら驚くのも当然だろう。
「……珠坂の、お姫様⁉」
意外だ。知り合いなのに気付かなかったのだろうか。
知り合いへの挨拶よりイジメを優先なんてのは随分失敬な態度に思えるが、スルーされた形の新川はむしろ楽しげな表情になる。
「ふうん。斗流十家をご存じなのね、センパイ」
「聞きかじり程度ですが、お噂はかねがね」
居住まいを正したリサは、椅子から立つとスカートをつまんで深々とお辞儀した。
「自己紹介が遅れました。わたくし安南リサと申します。拝謁の光栄にあずかり恐悦至極に存じます」
中学生が年下相手にする挨拶とは思えないが、そこは置いておいても。女王様リサがここまでへりくだって頭を下げるほど偉いのだろうか、この派手なのは。
「新川、おまえ何者なんだよ？」
「今の私は都落ちした未熟者だし。持ち上げても何も出ませんから、普通の学生相手にするように話してくれると嬉しいわ」
そこらへんの子細は聞いてはいないが、おそらくは謙遜の一種だろう。これまでの調査においても宮藤さんを介してさんざん横車を押しまくっていた事からも、新川が各方面に対してかなりの影響力を有していることは明らかだ。
「でも落っことすと危険なのは間違いありませんよ」
それもよく分かる。詠人はむしろ屋上に落っことされた方だ。
「貴女も、十家の？」
「詩紀さんにお仕えさせていただいております、宮藤と申します。安南様におかれましては、以後お見知りおきを」
「これはご丁寧に、こちらこそ今後ともよろしくお願いします」
ハイソな方々がハイソな世界のご挨拶をしていらっしゃる。
詠人としては完全に置いてけぼりを食らった感があるが、リサに観察されているよりよっぽど気が楽だ。
「早速でなんだけど、こんなところで鍵を締めてピアノを弾いていたわけ、聞かせてくれるかしら？」
リサは少し躊躇したが、
「隠し事はするだけ無駄かしら。いいわ、白状します」
さすがに女王。適応能力が高く、決断が早く、肝も据わっている。
だからこそ詠人は何度となく追い詰められかけ、今では屋上登校を余儀なくされているわけだが。
普段のサングラス姿のイメージが強いが、リサは意外にもぱっちりした綺麗な目をしていた。こうしてると常日頃の女王様っぽいきつい雰囲気は払拭される。地味か派手かと言えば派手な方だが、いわばアイドルっぽい部類の容姿だ。
馬鹿丁寧な言葉遣いを普段通りに戻したリサは、すすすと音もなく新川に近づき、持っていたステッキを机に立てかけた。
「私の視覚機能には、ちょっとした障害があるのよ。少々不便って程度ではあるから、本格的に見えないなんて方に言わせれば『障

害者なめんなヴォケ』とか一喝されかねないけど」
　頚を前に出して両手で両目を指し示すというのはいかにも子供っぽい仕草だが、サングラスを付けていなければそう違和感はない。ちゃんと年齢相応に見える。
　秘めた情熱を感じさせる黒々した大きな瞳を、新川は日本人離れした菫色の目でしげしげと観察し、
「ウロコはついてないようね」
　と宣った。
「見にくいって観点じゃ大差ないかも。いつも完全大解放。ジャンジャンバリバリ状態」
　例えに品がないなあ。
「……納得」
「どういう事だよ？」
　そんな説明で分かるものか。
「終にまかせるわ」
　華麗にパスされた。知らないとかじゃなくて面倒なのだろうと直感するが、突っ込んでも手か足が出るだけだろうから黙っておく。
「瞳孔が働かず、絞りのコントロールができないという事でしょうか。明るいところと暗いところで猫の目の形が変わるのは、素早く光量を調節する機構が備わっているためですが、人間も構造こそ違え同様の機能を備えています。薄暗くなってきた今頃なら、私ぐらいの瞳の大きさがが普通です」
「っ!?」
　宮藤さんが無造作に顔を近づけてきた。
　自己主張は弱いが落ち着いた雰囲気の整った顔がアップになる。そもそも女の子にこんなに近づかれた経験がないので、どうしても気まずくなってしまう（先だっての新川による攻撃時を除く）
「そんなにキョドらないの、少年」
　新川の方も、こちらはにやにやしながら、顔を寄せて見つめてくる。
　平成を保とうと思ってもどうしても身体がぎくしゃくする。完全に見透かされている。狙ったな、新川詩紀。
　安南リサも詠人と同様、まだ少しとまどっているように見えたが、適切に空気を読んだのだろう。二人の真似をして詠人に顔を寄せてきた。
「なんとなく楽しくなってきたわ」
　一体何が、と小一時間問い詰めたくなる。やらないが。
「リサ、ＧＪ」
「お誉めに与り恐悦至極」
　詠人から目を離さず、右の親指を立てる新川に、リサの馬鹿丁寧な返し。先ほどは普通の言葉に戻ってたし、きっとネタだろうな。
　しかしこれは効く。子細に観察され、どんな挙動をどう解釈されるか分からない状態では、人はそうそう身動きがとれない。この連中、中身はともかく見た目だけは一級品なので、視線のプレッシャーは親や教師を遙かに上回り、警察官やプロレスラーのレベルに匹敵する。しかも三人となれば、詠人が身動きとれなくなっても当然と言えよう。
　こういう時には素数を数えて落ち着くのだ……一…二…三…五……
「ちゃんと御覧になってます？　白州さん」

「はっはいっ！」
やや不機嫌の入った詰問するような問いかけに、ちょっと裏返った声が出てしまった。
だが、おかげで妙な雰囲気は霧散し、詠人は金縛りから解放された。新川が露骨に舌打ちを漏らすが、ざまをみろといったところだ。
宮藤さん、万能っぽく見えて割と天然かもしれないが、ここはむしろGJと言いたい。
「あれ？」
改めて宮藤さんの目を見る。と、リサよりも瞳孔がやや小さい。新川も同様だ。
目で問うと、宮藤さんは我が意を得たりとばかりに頷く。
「ベラドンナ、あるいはセイヨウハシリドコロという植物をご存じですか？　その名には綺麗な婦人という意味があり、瞳を大きくして美しく見せるための薬として用いられた事に由来するそうです。現代でも、ベラドンナから取り出されたアトロピンという成分が眼科の検査で目薬として使われれるのですが、そのよく知られた副作用に、まぶしさとかすみ目があります。安南様の抱えていらっしゃる症状は、おそらくはこれに似たような状態ではないかと」
「「おーっ」」
詠人とリサの拍手が重なる。二人の視線が交錯し、直後に目をそらしあう。向こうも気まずかったのだろう。
「さすがね。まえに医者にも同じようなことを言われたわ」
一介の学生メイドさんによる立て板に水の解説に、リサは素直な賞賛を隠さない。
「薬物の知識は使用人の嗜みですから」
宮藤さんは小さく会釈しただけで、特に自慢する風もなく淡々とした態度だ。
毒殺から主人の身を守るとか、そういう話なのだろうが……そんなので納得できるのか、ハイソな方々には。詠人的にはむしろもっとドス黒い何かの気配を感じられてならないのだが。
ともあれ、リサの告白は続く。
「正確には、明るさの調節能力が欠損していてピントの調節能力が著しく弱いのだそうよ。だから、状況によって濃さと度を調節したサングラスを使い分けないといけないの」
それこそが、常に付き随う渋イケメン執事がキャディーさんよろしく差し出す換えサングラスの正体、というわけか。
「では、その白いステッキも」
そ。と、リサは宮藤さんに答え、米国人ぽい仕草で肩をすくめてみせる。
「いかにもな白杖は父親に猛反対されちゃったから、こんな彫刻だらけの派手なの使ってるけど。おかげで傲岸不遜なイメージが定着しちゃって。心外だわ」
この女王様は、態度でかいのがイメージだけだとおっしゃる。ほお？
「実力で地位を作り上げた人間は、少しでも弱みになる要因を恐れるし、対外的なイメージを重視するから。会社どころか自分の娘の健康さえ守れなかったとか、病弱な娘を放っておいて仕事にかまけている、なんて評価を避けたいんでしょう」
「こらこら新川、余所の親父さんつかまえてぶっちゃけすぎだろ」
それが真実かもしれないが、わざわざ本人の前で口に出す必要

はない。
「矯正すれば普通に見えるわけですよね？　弱視にならなくて済んだのは、むしろ幼少期の適切な対応あっての事だと思われますが」
「どっちもその通りでしょうね。執事の木崎は、もともとは父が無理を言って雇った眼科医だし。父の仕事が微妙で繊細なものだって事も理解してるつもり。私のことで足を引っ張りたくないとも思ってる」
　なにやら、いい話風になってきた。取り巻きをけしかけては執拗に詠人を追い回す態度からは、なかなか想像できない発言だ。リサのことをちょっとだけ見直さねばならないかもしれない。
「それは人間が出来てて何より。で、ピアノや歌声とはどう関係が？」
　新川は一見すまし顔ながら、実際には興味津々といった様子だ。さすがにこれだけ振り回されれば慣れてきた。
「取り巻きはオクに出すほどいても、腹を割って話せる相手はいないわ。木崎は信頼と尊敬に値する男だけど、これ以上負担を掛けたくない。幸い、旧校舎に一応の防音が施された部屋があるというから……なんだかんだ理由を付けて木崎を使いにやって」
「それでモーツァルトK.２３１なんか歌ってたと」
「……うっ」
　綺麗な歌だったけど、モーツァルトだったとは。しかし詠人には遣り取りの意味がさっぱりだ。
　クラシックをひっそり練習するのに何か問題が？
　と、メイドさんに目で解説を求めると、
「詳細はご自分でグーグル先生にでもお尋ねください。わたくしの口からはとてもとても……」
　と顔を背けてしまった。赤くなるような話なのか？　これ。
「その真意こそが第六の不思議の本質だと思うけど」
　どうやら、新川は真実にたどり着いているらしい。しかも、リサにとってはあまり愉快ではない話と見える。
　それでも、どうしても本人の口から告白させたいと。まったく悪趣味な。
　いじめっ子がいじられてる様子で少しは溜飲が下がるかと言ったら、そうでもないんだな。
「……理屈で理解してててもストレスは溜まるもの。余裕を演じるにはガスを抜かなきゃやってられないわ。かといって家で父の悪口を叫ぶわけにはいかないでしょう。だから、ここで道徳的とは言えない替え歌とか思いきり弾いて歌って叫んで」
　ふむふむ
「録音して動画サイトにアップ」
「こらーっ！」
　学校随一のセレブリティーのくせに、個人情報を晒す危険性を知らないとは言わせない。
「心配には及ばないわ。ちゃんと匿名化して個人が特定できるデータは伏せてあるもの」
　いや、それにしてもだ。データ流出のリスクというのは、本質的にはコンピュータうんぬんの問題ではない。
　通常検索に用いられる情報を欠損させておいても、発信者に関する予備知識を持つ人間になら、正体の推理は可能だからだ。
　顔にモザイクを掛けてボイスチェンジャーを通しても。鍵盤の弾き方の癖、息継ぎの癖、替え歌であれば語彙選択の癖など、情

報はいくらでも残っている。リサ本人を知る者なら感づかないとも限らない。
たとえ断片的なものであっても、情報流出にはリスクがあるという事だ。
そういった事を噛んで含めるようにがーっと説明してやる。逆ギレされるかと思ったが、リサは意外と素直に聞いていたばかりか。
「き、きっちり叱ってくれて感謝するわ。以後気をつけます」
等と言い出した。Sっぽく見えるが、実はMな人なのだろうか。
わざとらしいにやにや笑いとともに、新川が追求の声を上げる。
「他にも余罪があるのではないの？」
余罪て……
でも鋭い。
「さすが。お姫様の目はごまかせないわね。いかにも荒らしっぽい筆致で、某大手掲示板に父さんと会社の悪口をガンガン書き込んだわ。恨みつらみの数々を書き残したテキストファイルを暗号化して、画像ファイルに偽装して海外サーバにアップロードもしてある。どう、満足？」
痛い。ひたすらに痛い。痛すぐる。
王様の耳はロバの耳、というやつなのだろうが。
端から見るとまったく無駄な行為としか思えないが、それでモヤモヤをはき出すことで精神の平静を保ち、ひいてはお嬢様の外面を壊さないでいられたのなら。彼女にとっては意義があったという事だろう。
そこで、ピンと来た。
「なあ、もしかして……僕を追い回してたのも……」
おそるおそる尋ねてみると、
「慧眼。貴方の調査は、スリルと好奇心を満たしてくれた。私にとっては絶好の憂さ晴らしだったわ」
リサは胸を張って言い切った。悪びれる様子など微塵もない。
だが悪趣味が払拭されるわけではない。正義の味方ごっこで新七不思議を追いかけていた新川と発想が同じではないか。
「まさにエンジョイ&エキサイティングね」
同意してるし。
「その件については正直すまんかった。この通り。私の考えが浅かった」
頭は下げたものの、実にさっぱりした態度だ。本当に反省しているのか。
いろいろと残念なやり口はともかく、父親への配慮といい、こうして頭を下げられる度量といい。人間的には悪い奴ではないのかもしれないと思えてきた。
「まさか妖精さんに人間らしい感情があるかもしれないなんて考えてもみなかった。人間中心の偏狭な考え方だったわ。猛省します」
前言撤回。お嬢様が聞き捨てならない事を言い出した。
「おいおい、妖精扱いかよ……」
その単語はむしろ新川の方に似つかわしい。背中に透明な羽が生えていても不思議はない。
いや、昔話の小人（ドワーフ）さんみたいのか。それはそれで、悲しいが。
「違うの？　私はてっきりそうだとばかり」
「では、第六の不思議は話し合いにて無事解決と判断いたしまして。議題を新七不思議のその七に移そうと思います」

「頃合いかしら」
何故三人の視線がこちらに集中するのだろう。
「私の方からも聞かせて欲しいんだけど、妖精さん」
真剣な表情と口調で、リサが詠人を問い詰めに掛かってきた。
「いつまでも妖精妖精言うな。白州詠人だっての」
あれれ？　いつの間にか攻守が入れ替わっている。
「じゃあ白須さん。あくまでも妖精でないと言い張るのなら、本当は貴方は何者なのかを教えて」
「あんたと同じ光鷹中二年、部活は帰宅部。あと秘密結社階段部に所属。ほら、普通の中学生だよ」
完璧だ。参ったか。ぐうの音も出まい。
と自画自賛していたところ
「いや、そのりくつはおかしい」
即座に反論される。
「ほら、制服着てるだろ」
とアピールしてみるも。
「制服なら夜道で出くわす変態でも着てるでしょう。ハチの正体の証明にはならないわ」
「学生であれば妖精でない、という前提が必要ですね」
階段部の二人も加わって、いちいち正論で攻めてくる。大人げない。いや、確かに中坊だが。
「どうやらお互いの認識に食い違いがあるようね。ねえ、新川さん」
「そうね」
飄々とした新川の返事に、リサは大きなため息を一つもらす。
「七不思議の妖精さんが、まさか貴女の庇護下にあったとは。つかまらないわけだわ」
「ちょっと違う。むしろこっちがお願いして場所を貸してもらってるのよ」
信じられない事をする人……と、こめかみを押さえて首を横に振る。
「……貴女たちがどこまで把握しているのか不明だから……全く理解を超えていたのだけど、ありのまま私が見たことを話すわ」
芝居がかった立ち方で、身振りを含めて大袈裟にアピールするリサ。
「何を言ってるのか分からないと思うけど、私にも何が起こってるのか分からないのよ。頭がどうにかなりそうだった。催眠術とか幻覚とか、そんなチャチなものでは断じてない」
いや、そういうネタはいいから。
「このババのめしいた目にも見える。あなただけはいつもクッキリ見えるのよ。白須詠人さん」
どっぎゃーん。と効果音が聞こえそうだった。
「よく分からなかった。もう一度」
何を言われてるのか分からない、というのは詠人も同じだ。
「目を閉じてさえ姿が見えるのよ。どうみても普通じゃない」
こいつ、おかしいぞ。
「ＪＫ的に僕の問題じゃないだろ」
この女の脳がヤバイ！　光鷹中がヤバイ！　宇宙的恐怖で世界がヤバイ！
そうした解釈の方が普通だと思うが。
「ラヴね」

「ラヴですね」
スイーツ脳主従が、自分で信じてもいない説を投じて無責任に盛り上げようとしている。勘弁してくれ。
「いや、ラブ違うからな。あり得ないだろ」
わざわざ下唇噛んで発音しなくていい。
そういう怪奇現象は同じラヴでもクラフト先生の方の管轄だろう。
こちとら屋上登校の地味ヲタだ。馬鹿にされたりおもちゃにされたりすることはあっても、惚れられるなんてあり得ない。
だから、
「うーん、案外そうなのかもしれない」
などと本人が言い出した時には。腰が抜けるかと思った。
「「モテ期キター！」」
「そこうるさい！　女王もちゃんと弁明を頼む。このままじゃ勝手にカップルにされるぞ」
リサは頷くが、
「これまでまったく考えてもみなかった新解釈だけど。言われてみると、それも一理あると思えるわ」
「反論しる！」
「「ほほう」」
主従ががっつり食いつく。
「初めて姿を見た日から。名前、誕生日、趣味、家族構成、ペット、癖、通学路、コテハン、巡回スレ、ひいきのサークル、好みの男子のタイプ、受け攻め……とにかく彼のことが気になって気になって四六時中頭を離れないのだから。これはもう、噂に聞く恋といっても過言じゃないのかと」
他人事みたいに冷静に言うが……
「思いっきり興味本位だろ」
仮にも恋だとか言い張るのなら、せめて照れるぐらいしてほしいところだ。
あといろいろと突っ込みどころが多すぎる。
「駄目だこいつ、腐ってやがる。早く何とかしないと」
「でも、誰にいくら尋ねても、誰も彼を知らなかった。いくら名簿を当たっても、この学校には彼に相当する生徒は在籍していなかった」
悪かったな、目立たなくて。無いと信じながら捜しているものが見つからないなんてのは、良くある事だ。
「彼はいつも一人だったし、少なくともリア充にはほど遠いと。それだけは確かだと確信できたわ」
「ほっとけ！　あとおまえら納得するな！」
悲しくなってきた……
「ならば、きっと、仲良くなれるんじゃないかと思ったのよ。たとえ妖精さんでも」
それで理解できた。
まったく、こんな奴らばかりなのだな。この学校ときたら。
「そっか。なら……」
明らかに格下の扱いやすい相手。弄りやすいオモチャ。
「あんたが求めてるのは友達でも彼氏でもなくて、ペットか下僕だと思うぞ」
楽しそうに語っていたリサの表情が、一変した。
「……そう？　そうなのかしら？」
今にも泣き出しそうな顔で、絞り出すようにつぶやくリサ。

心が痛むが、きっとここが言うべき時だ。さもなくば、こいつはいつまでもワガママ姫のままで、本物の女王様にはなれないだろう。

もう一言追い打ちを加えようとしたところで、

ゴッ。

脳が揺れた。一瞬意識が薄れ、辛うじて踏ん張り転倒を免れる。

攻撃者に苦情を述べようとして振り返ると、

腰に手を当てたメイドさんが仁王立ちになっていた。

ドドドドドド、って書き文字が視界に躍っているような錯覚さえ覚える。

「それはいわゆる怨恨平等主義ですよ」

言葉の意味はよくわからんが、とにかくすごい怒りだという事ははっきり分かった。

「ひがむに値するほど安南さんが幸せそうに見えるなら……敢えて言います、白州さんの目は節穴であると！」

反論どころか返事らしい返事もできず、ただガクブルするだけの詠人に、主の方も声を掛ける。

「私達のような社会の闇に生きるモノには、光の世界は眩しすぎる」

傍若無人の塊のような新川まで、そんな殊勝なことを仰る。

「だから、リア充とは表面的に合わせるだけで限界。ましてや愛や友情をはぐくもうなんて、思い上がりも甚だしいのよ」

天から二物も三物も与えられておきながら、ちょっとヲタでねらーな程度で闇とか大袈裟すぎるだろう。

「新川さんにも、経験が？」

落ち込みっぱなしのリサに尋ねられた新川は、直前までの発言が嘘のような無表情で答えた。

「北斗の主たる、樞の名代には、もとより人の情など必要としないわ。だから今は安南さんの話を続けましょう」

痛い。実に痛い。

これもまた見事な自己欺瞞のように思えるが、それで精神的バランスがとれるのなら敢えて異論を挟むこともないだろう。リサの課外活動と同じだ。

「ぶっちゃけ、闇の住人が本当の意味で心を通わせられるのは、同じ闇の住人だけですからね」

あ、肩を落としたメイドさんからも、なんかどす黒いオーラが。

「さあ、ハチ。ここは言うべきことがあるでしょう？」

「ありますよね？」

認めてしまえば楽になれる、みたいな言いぐさだ。

それ以上に、二人がパキバキ指を鳴らしているのが大変気になる。これはもう、脅迫ではなかろうか。

「おお、心の友よ！　とでも言えと？」

昨日までの不倶戴天の敵から、一転して友達呼ばわりにはどうしても抵抗がある。しかも自称同類項とはいえ、セレブ女子相手に気後れするなという方が無理というもの。

「次にふざけたら、白銀珠比女命の名にかけて、その粗末なモノを引き抜くから」

「真面目な空気の時に茶化さないでくださいね。また右手の不随意運動を抑えきれなくなりそうです」

ギャラリーの怒りメーターがさらに上昇中。

ボヤボヤしてると後ろからバッサリだ。どっちも、どっちも。

それに詠人自身としても、放っておくのは気が引けると感じて

いるのもまた、間違いないのだ。
「と、友達からで、お願いします」
握手など求めてみる。
これが最大限の譲歩だった。
「え、ええ。こちらこそ、是非ともお願いするわ」
すかっ。
ずーん。
「……避けた、避けたね！　オヤジにも避けられたこと無いのに」
最悪だ。らしくもなくなく身の上話にほだされて。思い上がってその気になったところを、一気にどん底に突き落とされた。
どうせこんな事だろうと思ってはいても、やっぱり堪える。
「三次元のセレブ女なんか信用した僕が馬鹿だった……」
「……いつもそう、きっと本当はみんなにも嫌われてるんだわ。ただおだてて、持ち上げて、表面だけ合わせて、からかわれてるだけ」
あれ？
どうして悪戯を仕掛けてきたリサまで落ち込んでいるのだろう。
「貴女たちって、つくづく類友ね」
新川のレアな呆れ顔、
「悲観的で繊細すぎる愛すべき人種ですから。私達と同じです」
「言う言う」
「お二方に、ちょっとだけ先輩としてアドバイスです。一度のすれ違いで信頼を諦めるのは早すぎますよ」
「もう一度試してみなさい？」
宮藤さんと新川の言葉には、有無を言わさず従わせるだけの力がこもっていた。
お互いORZ状態のリサと顔を見合わせ。頷き合う。
恐る恐る手を伸ばすと……
あれれ??
「こいつ、おかしいぞ！」
どうしても手をつかめない。何度試してもすり抜けてしまう。
「おかしいのは貴方よ！」
リサは机を叩き、新川主従を振り返る。
「これってどういう事？　彼、実体がないわ」
全面的に詠人のせいにされた。
「そうね」
しかも新川にまで同意された。
「で、それがどうかしたの？」
「大した問題ではないと思いますけど」
宮藤さん、貴女もですか!?
「立体映像？　集団幻覚？　妄想？　妄想の非実在少年なのかしら。実在しなければ誰とカップリングしてもおkよね」
「安南リサ自重しろ！」
自分が実在しているという事は、詠人自身がいちばんよく分かっている。コギトエルゴスムとかいうやつだ。
「僕は立体映像でも幻覚でも妄想でも、ましてやBLでもないからな」
でも、それを他者に信じさせることは簡単ではない。
「主張ぐらいは聞いてあげるから、私を納得させてごらんなさい。出来るものなら」
事実、リサはこんな感じで絶賛逆ギレ中。
「普通の人間ですがなにか？」

「「「ダウト！」」」。

リサどころか、三人が三人ともまるで聞く耳持たず。

反論が一切許されない状態で、詠人にどうしろというのだろうか。大人しく自分が幻覚だと認めろとでも？

そもそも、超常現象とか不自然すぎるのだ。新七不思議にしたって、半分は単なる誤解や演出だった。

今のすり抜けだって何かのトリックに決まってる。詠人が何の細工もしていない以上、リサがやらかしてると考えるのが素直だろう。

やらかしている、といえば新川や宮藤さんだって可能性はある。

例えば、この三人はもとよりグルで、階段部結成から今日に至るまですべてが壮大な仕込みだったり、とかいうオチはありうるだろうか。

人混みに馴染めない屋上登校の詠人をオモチャにするためだけにここまでするなんて事が……無いとは言えない。それが何より怖い。

傍若無人な二人の少女に無理矢理引き込まれた階段部という謎のグループもにも、今となってはそれなりの心地よさを感じるようになっていたことに気付く。

この二週間の間に彼女たちが詠人に対して示した態度の何もかもが、嘲りの刃を秘めた偽りの仮面であったとしたら。

「は、は、ははは」

泣けてくる。

そんな可能性を認めるぐらいなら、最初からすべてが引きこもりの寂しさから生まれた妄想だったとでも考えた方がよっぽどマシだ。

「そうだよな。三次元の女子が屋上登校の引きこもりヲタなんかと仲良くするなんて、天地がひっくり返ってもあるはずない」

痛い発言の目立つ銀髪の妖精さんも。

優しいだけでなくトゲのあるメイドさんも。

人気者のクールビューティーにして実はいろいろ残念な女王様も。

妄想の脳内友達なら納得というもの。

それにしても、無意識とはいえそんなに女友達が欲しかったとは。誇り高きヒッキーの風上にも置けない軟派っぷりではないか。

「恥ずかしや、なさけなや……」

ORZ

「詩紀さん。いくら何でもからかいすぎですよ。もう勘弁してあげてはいかがです？」

残響を伴って、遠くから聞こえてくる優しげな声。

「あー、妄想なメイドさんが何か言ってる」

「じゃあ、そろそろ種明かしを」

「銀色妖精の妄想も何か言ってるな」

「姫が種明かしって言ってるのに、いい加減帰って来なさいよ」

「残念女王の声までするよ。今日の妄想はほんとしつこいな……ひっ!?」

突如襲いかかる悪寒。

「……引き抜くって言わなかったかしら？」

遠ざかったはずの銀色妖精の声が、これ以上ない現実感を備えて詠人の意識へと浸透してきた。

いや、これは紛れもない侵略だ。抵抗を諦めたが最後、存在を浸食・上書きされかねないだけの攻撃的な意志の存在を実感する。

危険を察知した本能が意識レベルを急激に引き上げ、詠人を一気に現実に引き戻す。
「……ゴメンナサイ」
「はいお帰りなさいませ。種明かし、よろしいでしょうか？」
「ゼヒトモオネガイシマス」
多分に無理矢理言わされた感があるが、それでも満足げに頷いた宮藤さんは、突然口調を変えると一息にまくしたてた。
「解説しよう。白須詠人は地縛霊である。彼をスカウトした階段部は学園掌握を目論む正義の秘密結社である。白須詠人はマスコットとしてなんとなく階段部のために尽くすのだ」
なんとなくって……
「ちょっと待て！」
「はい、白州さん」
「マスコット扱いは最初から諦めてる。あんたらのいい加減さも大体理解したつもりだ。でもなあ……」
「ご理解いただき、ありがとうございます」
皮肉通じないなあ。上品な笑顔を貼り付けた宮藤さんの鉄面皮は小揺るぎもしない。
「……勘弁してくれ」
無茶苦茶だ。ただこのネタをやりたいばかりに、これまで仕込みに精を出してたんじゃないかとすら邪推されてくる。
「屋上室引きこもりは認めるけど、自縛霊呼ばわりはいくら何でも……」
いくらなんでも、友達を精神崩壊直前まで追い込むのはやり過ぎだろ。そろそろ真剣な対応を申し込もうと苦情を申し立ててはみた。
「僕も茶化さないから、一つ真面目に頼む」
「承りました。態度については反省し、改めさせていただきます」
宮藤さんの表情は、これ以上ないほど真剣だった。
新川もまた。白銀珠比女命を名乗るときの冷静沈着な彼女だ。
そしてリサの得心いったという顔。
「詳しく話を聞かせてくれないか」
自分が幽霊だなんてバカげた話が真実とは到底信じられないが、少なくとも彼女たちは冗談とは捉えていない。それは確かだ。
ならば、その根拠を聞いてみたいと、そう思った。
「可能なら、納得させてくれると助かる」
詠人の請いに応え。歌うように呪うように、新川が語る。
「ハチは確かに一つの精魂だけれど。現界の媒介となる肉体を備えていない。これは斗流では虚身魂（うろみたま）、より一般的には幻霊（ファントム）と呼ばれる概念に相当する特徴。でもそんな不安定な状態は長くは続かない。ならばこそ、学校という場所に肉体を仮託することで現界を続けているものと推察されるわ」
宮藤さんが話を引き取り、かみ砕く。
「私達斗流の理論では魂を世界に結びつけているのは身体ですが、その代わりに土地や建造物を媒介にする事も可能と言われています」
「僕が、それだってのか」
新川が頷く。
「なるほど、あんたらの言うところの自縛霊の定義は分かった。でも、僕がそれだっていうには説得力がなさ過ぎる。僕はただ屋上が気に入っているだけで、屋上から身動きとれない訳じゃない。それに……」

この違和感をどう説明してくれるのか。
「あんたら僕を殴るけるしたろ！」
彼女たちの言い分を真に受けると、僕の本体はあの屋上室だって事になる。それならこちらの身体は幻覚みたいなもの。どう考えても不自然だ。
「ご慧眼。その疑問はごもっともです」
宮藤さんが頷く。
「地縛霊というのは自然の原子や分子・現象を媒介にした精霊に近い在り方であって、意志をもって世界に関わるには知能を備えた肉体が必要とされているわ」
「魂だけで脳みそがなければ、ただそこに居るだけで何も出来ないんです」
「……」
暗に脳足りんと言われているのだろうか。
「だから、観察者あるいは使役者の知能の一部を借りる事で、意志を表明したりあるいは固有の物理干渉能力を発揮することが可能になるわ」
「誰かに見られて初めて、姿や意識を持てるというわけですね」
「ほお」
面白い設定だと思う。そんなのを自分のことだとか言われても困るが。
「じゃあ、私達と活動していないときに何をしているか説明してごらんなさい」
「家で宿題したり、マンガ読んだり、ネットうろついたり、そっちのお嬢に追い回されたり、タンクの下に隠れたり……」
ちょっと屋上登校なだけで普通の学生だと思われ。
「では白州さん、昨日の夜九時頃、どこで何をなさってました？」
「そりゃあ……あれ？」
どうして思い出せないのか。
だって昨日も間違いなく家に帰って……帰って？
どうやって通学してたっけ。徒歩？　自転車？　バス？
そもそも家ってどこだ？
おい、自分。しっかりしろ。
「では、私達に出会う前は、どこで何をしていました？」
……
「ほらみなさい」
新川に勝ち誇ったように言われる。なにやら腹立たしい。
「いやちょっとど忘れしただけだし！　ショックで記憶が混乱してるだけだから！　幽霊とか関係ないからなっ！」
とか言い訳を試みてみる。
「アルツハイマーなツンデレですか」
宮藤さんによるによる容赦ない突っ込み。
いや、自分でも無理あると思ってました。勘弁してください。
「つまり……」
先ほどから沈黙を守っていたリサが口を開く。
「私が発見したからこそ、彼が彼になったと。そういう理解でおk？」
「理解が早くて助かります」
新川は暗に皮肉を言ってるのだろうな。
フィクション的理屈はあるように聞こえるが。納得はしたくない。
いきなりおまえ幽霊とか言われて、ちょっと理屈が通っている

ぐらいで簡単にはいそうですかと認められるものではない。
突っ込みの余地がある限り突っ込み続けるべし。
「記憶の件は、時間制限がある萌え記憶障害を有しているということで説明可能。むしろ殴る蹴るの件についてｋｗｓｋ」
「それは簡単です」
宮藤さんはいとも簡単に詠人の手を取ってみせた。先ほどリサの手がすり抜けた詠人の手をだ。
となれば、やっぱりリサが幽霊だと解釈した方がいいと思うのだが。
「詠人さんの存在を認識しているのも、詠人さんの知能を構成しているのも、自分の意識の一部なんですから。脳内妄想を操るのと同じですよ」
言うが早いか、革手袋の手は詠人の腕をすり抜けた。怖気の走るような感触を残して。
「いつぞや頭から地面に刺さって無事でしたよね。あれは詩紀さんの優しさ。詠人さんを傷つけることも性急に事実を突きつけることも望まなかったから」
ああお優しいことで。いい話のように聞こえるが、本人がどや顔でふんぞり返っているあたりで台無しだ。ならばどつくな蹴り飛ばすな、と言いたいところだが。
理屈ではない。今のでなぜか実感してしまった。ああそうか。そう思ってしまった。
「安南さんの手がすり抜けたのは、彼女がハチを人ではないもの感じて畏れを持っていたから。私達がハチに触れられるのは、方法を理解していたから。まあ終の右手は特別製だから、他人の妄想だろうと記憶だろうと単なる概念だろうと触れるのだけれど」
まだ言い訳は思いつく。否定する材料はある。
だが、自分はそういうものだと心が屈してしまった以上、それは無意味だった。
「ふっ、認めたくはないものだな。自分自身が人間でないかもしれないなどと」
「白州さん、意外と余裕ですね」
無茶な状況で精神の安定を保つには、自ら茶化して笑い飛ばすしかない、ってことを分かっていただきたい。
こうなっては、詠人が普通でない事は明らかだ。もしかして、本当に幽霊とかそういう類のものなのかもしれない。諦めてすっぱり認めるしかないではないか。
だが、それ以上に明らかなこともある。
「お、おまいら非常識すぐる！」
こいつらの方も、どう考えても普通じゃない。
宮藤さんの手袋の中身とか、どうなっているのか想像するだけでも正気度が低下しそう。
そして先ほどからのご高説が正しいのなら、こういう理屈も成り立つはずだ。
「僕があんたらの妄想によって姿を与えられた存在だと認めるなら、僕がオタクなのも引きこもりなのも、全部あんたらの脳みそ由来って事だな！　そうだな⁉」
「その通り」
「ご慧眼です」
「そういうことになるのかな」
開き直った！　こいつら開き直った！
「こんな設定は嫌だっ！　やり直しを要求する！　どうせなら自

信満々の天才イケメンリア充にしてくれ！」
　切実な要望だった。
「我ら闇の住人の脳内にそんな華々しい成分が一片たりとも存在するはずがないでしょう常考」
　腕組みして偉そうに言うような台詞か、新川よ。そして頷くな、宮藤さんにリサ。
「誇りを持ちなさい。今のハチは私の力と彼女の願いから生まれた存在。祈りと想いの結晶」
　ものは言いよう、だな。なんとなく聞こえがいい単語を使うだけでイメージが一変する。卑怯だ。
「だから、ちゃんとかなえてあげてくださいね。安南さんの望みを」
　さらに、宮藤さんにもハッパなどかけられてしまった。
「望み？」
「この学校の中でなら、詩紀さんは大抵の願い事を叶えられる、以前にそうお話しした筈ですよ」
「白銀珠比女命は人々の無意識の祈りを収集するから。内容の良し悪しによらず」
「白州さんも御覧になりましたよね？」
　そうか。
　新川達の言っていた事は、本当だったのだ。
　自分ではできない行動の代理を骨格標本に託した少年がいた。麻薬と金銭の入手を望んだ教師がいた。
　他者からの関心をおそれた少女がいた。過去の不幸な事故現場の封印を望んだ少年がいた。
　彼らの願いは表向きの姿からは想像もつかないもので、叶えられたはいいが大抵は裏目に出ている。
　有り難迷惑な話だ。
　コントロールの効かない願望成就が新川によってもたらされたと証明することはできないが、不器用きわまりない彼女を見ていると非常に納得できる気がする。
　だからこそ、新川みずからが泣く人の涙背負って願いの始末、というわけだ。とすれば、彼女たち主従はこれまでも同じようなことを繰り返してきたのかもしれない。まったくご苦労さまなことで。
「ご心配なく。だんだん慣れてきてるわ。何度も同じ失敗を繰り返すつもりはないから」
　表情に出てしまったのだろう。不本意そうな顔でそう宣言された。
　まあ、悪いことばかりではないのだろう。
　いかにもリア充な表向きとは反し、自分が自分で居られる場所を、ただ一人の本物の友達を求めた少女もまた、いたのだから。
「……友達に、なってもらえるかしら」
　リサが、おそるおそる、手を刺しだしてくる。
　新川のもたらした幸運は、リサにそこら辺の浮遊霊を知覚するチャンスを与えた。結果、詠人は友人候補に相応しい意志と意味を得た。そういう事になるのだろう。
　が、友達になるという段階は彼女自身に任されていた。
　今思えば、取り巻きを使って追い回させるというやり口は、リサなりの本気の表れだったのだと思う。沈着冷静でならした彼女らしからぬその行動は、人付き合いの不器用さを露呈させていた。
　こいつは詠人を怖がっていたのだ。妖精とか幽霊とかいう存在

へのおそれではなく、自分から近づいた相手に否定されること・断られる事への恐怖。
阿呆くさい悩みではあるが、詠人もヒッキーの端くれ、その恐怖心の大きさはよく分かる。一歩の歩み寄りにどれほどの勇気を必要とするかも。
こちらからも手を差し出し、迎えに行くぐらいはいいだろう。
「あんたが本当にそれを望んでるんなら。あんたの祈りから生まれた僕が断れるはずがないだろう」
三度目の正直。
詠人とリサの手は、今度こそ、ついに握り合わされた。
「だから、ちゃんと責任とれよ」
「ええ、今後ともよろしく」
長らく狩り狩られる間柄であったが、ようやく心が通じ合った気がする。
なら、今考えている事は同じはずだ。
目配せに、小さな頷きを返してくる。よし、Ｇｏだ！
次の瞬間、二人は同時に身を翻し、
「なっ⁉」
詠人は新川の右手を、リサは左手を、それぞれ捕らえる。
「見たか！　これぞ親友同士でのみ為し得る究極技能の一、ツーカー！」
「メイドさん、あなたも」
「はいはい」
四人が握手で輪を作った。
「なに、何のつもり？」
困惑顔の新川に言ってやる。
「一人だけ上から目線？　ふざけんなよ」
「私はもう友達だと思ってるわ。貴女はどう？　お姫様」
「詩紀さんがご自身の願いを叶えていけないなんて、そんな理屈はございませんでしょう？」
宮藤さんにしても、思いは同じか。
「あなたたち……お馬鹿でしょう」
こめかみをおさえて首を振る新川。よし困ってる困ってる。
「おたくと同じ程度にはね」
今こそ好き放題やられた反撃のチャンス。ついに言ってやった、といったところか。
「特にリサ、あなた本当に馬鹿。志が低いにも程があるわ」
無視された……
「ただ望みさえすれば貴女の目は治っていたに違いないのに。どうしてこんな中途半端なところで満足しちゃうのかしら」
新川の言葉には怒りすら含んでいるように感じられた。
「中途半端？　それは違うわ。私の目がまともなら、きっと彼の存在に気付くことがなかったと思うから。これが良かったのよ。ありがとう詩紀ちゃん。何度でも言うわ、感謝してる」
「ど、どういたしまして」
ちゃんと普通に照れるとか出来るんじゃないか。意外と可愛いところもあるもんだ。
かくして、僕らは晴れて友となり、階段部に四人目が加わったのであった。

†

「こ、これは私の知り合いの話なのだけれど。田舎に幼なじみが帰ってくるのだそうよ」

ある日。仲良し三人組＋αの一人が言い出した。

「以前に不始末で多大な迷惑を掛けてしまってそのまま離ればなれになった相手で、本来なら面と向かって謝罪すべきところだけど、不用意に会いに行けばまた迷惑を掛けてしまうかもしれない。二度と顔も見たくないほど恨まれているかもしれない。この場合、貴方たちならどうする？」

完璧超人に人生相談されるとは、珍しいこともあったものだ。

「はあ。それで、あんた自身はどうしたいんだ？」

ばっちーん。

「知り合いの話だと断ったはずですが。ちゃんと聞いてなかったようね」

「ゴメンナサイ」

ビンタ一発でたっぷり三メートルは吹っ飛ばされた。霊体を殴るとは、相変わらず非常識な奴だ。

「その方のこと、好きなのね」

「……余計な詮索は慎んでいただけません？」

どうして自分は殴られるのに相方は大丈夫なのか。明らかに差別だ。

「気ばっかりつかって、内心を隠して笑える子なのよ。どんな顔をしても信じられないわ」

もう知り合いとか誤魔化すのは諦めたと見える。

「なら、試してみればいいだろ」

「いちど全部さらけ出しあったからこそ、私達は盤石でいられる。きっとその子も同じじゃないかな」

こいつはなまじ賢い分、思考が先走りすぎだ。だから、相方と二人がかりでハッパをかけてみる。

「そうね……貴方たちに倣ってみるわ」

豊かな銀髪は上昇気流にうねり、菫色の瞳は見たこともないほど据わり。

彼女の残した笑みは、彼と相棒を震え上がらせるに十分だった。

「「グッドラック、親友」」

僕と相方は、女神様にそこまで愛されている幸せ者に、合掌した。

# オンステージ

春屋アロヅ

ハロウィンが終わると、世間はクリスマスに向けて一ヶ月半前から準備を始める。町に出始めた飾り付けを指さして気が早い、と笑っていた美紀の下にサンタの使者がやってきたのは、十一月も半ばを過ぎたある日のことだった。

「井上さん、突然ごめんね。お願いがあるんだけど。あたしたちのバンドでベース弾いてくれない？」

四人で弁当を食べているところに現れた女子三人組は、そう切り出した。雅は三人とも知らない相手だ。そのうち一人はどこかで見たような気がするが、思い出せない。美紀もどうやら知った相手ではないらしく、困惑しながら答えた。

「……オレ、別のバンドやってて、そっちが結構キツいから、かけ持ちはちょっと……」

「あ、ずっとっていうんじゃないの。ずっとやってくれたらもちろん嬉しいけど、とりあえず終業式の日まで」

「終業式？」

話をまとめると、終業式の日の放課後に軽音部でクリスマスライブと銘打って講堂でライブをやるらしく、そこで美紀にベースを弾いてほしいということだった。

「年内だったらバンドの方にも支障ないよね？」

今までずっと話していた子の右隣の子がにこやかに言った。美紀はその口ぶりをいぶかった。

「なんでそう思うんだ？」

「あたし、カルマ式のファンなんだ。こないだのライブでしばらくお休みって言ってたから、今なら大丈夫かなって」

えっ、と漏らして固まった美紀の代わりに雅が反応した。

「そうか。どこかで見たことがあると思ったら、ロトンヘブンで見たのか」

「そだよ。あなたもいつもいるよね」

彼女が微笑むのに、雅は静かに頷く。「ロトンヘブン」というのは、美紀の所属するバンド「カルマ式」がよくライブで使う、小さめのライブハウスだ。

「あたしドラムやってるんだけど、井上さんが同じ学校だって知って、一回でいいから一緒にやってみたかったんだ。軽音部には入らなくてもいいから、お願い！」

彼女が拝むように手を合わせると、他の二人も頭を下げた。美紀は救いを求めて視線を友人たちの方に向ける。助け船を出してくれるはずだ。

「どうせしばらく暇なんでしょ？　せっかくなんだしやってあげなよ」

「ミキちゃんの演奏、また聴きたいな」

「せっかく請われているんだし、引き受けて悪いことはないんじゃないか？」

揃って向こうに助け船を出した。美紀は絶句して視線を戻す。わずかに沈黙があった。

「……どういう曲やるつもり？」

美紀の言葉に、三人がぱっと晴れやかな顔になる。

「コピーなんだけどね。リンゴちゃんの曲を四、五曲やるつもり」

「あたしたち三人はやったことある曲もあるから、それも含めてメンバーが揃ったら決めようと思って」

「今日か明日の放課後に曲決めしようと思ってるんだけど、空いてる？」
代わる代わる、たたみかけるように言われて、美紀は圧倒されつつどうにか頷いた。
「ど、どっちも空いてる」
「じゃあ今日ね！　部室使えないからE組に来てもらっていい？」
「わかった……」
美紀が応じると、三人は口々にお礼を言って去っていった。
「美っ紀〜、ついに学内デビューだねぇ」
「なんだそりゃ」
「でも、実際ちょうどよかったんじゃないか？」
雅が言う。美紀は顔を上げた。
「なんでだよ。確かに間が空くからちょうどいいっちゃいいけどさ」
「軽音部に少しツテができたじゃないか」
「……まぁ、な。入部する気は今んとこないけど」
美紀がわずかに口ごもったのに気付いているのかいないのか、佳奈が問いかける。
「そういえば、なんで美紀、軽音部入んないの？　すっごいうまいのに」
「んー、まぁ理由はいろいろあるんだけど……」
美紀はわざとらしいしかめ面でそう言って席を立つと、やにわに綾乃に抱きついた。
「えっ、わ、えっ？」
「放課後こうして綾乃と過ごす時間を削るなんてできないっ」
展開についていけなくて焦る綾乃をそっと抱きしめつつキリッとした顔で言い放つ。
「そもそも放課後は大して過ごしてないじゃん」
「帰りに寄り道する機会が減る、ということか」
佳奈のツッコミに雅はさりげなくフォローを入れた。そのまま美紀と綾乃がじゃれ合っているのを見ながら、視界の隅で佳奈がいささか不満げな表情をしているのが見て取れた。

その日の放課後。担任の号令とほぼ同時に教室に姿を現したお迎えに美紀が連れ去られるのを見送って、三人で学校を出た。
「わざわざお迎えが来るとは思わなかったよね」
「ね。ミキちゃんの気が変わらないうちに、なのかな」
「美紀、超渋々だったもんね。あのリーダーっぽい子に逃がすなって言われてたんじゃない？」
そう言って笑っていた佳奈が、ふと真顔になった。
「雅、実際のところどうなの？　あたしら何も考えずにやれやれ言っちゃったけど」
「どう、と言うと？」
「部活に入りたくない理由、知ってるんでしょ？　昼休みはごまかしてたけどさ」
佳奈の視線を受け止めて、足を止めた雅はわずかに視線をそらした。話してよいものか、話すべきなのか、親しい相手だからこそ迷う。沈黙。それを破ったのは雅でも佳奈でもなく。
「カナちゃん、それ今訊くの止めよ？」
「……なんで？　だってもし美紀が嫌なのに断り切れなかったんだったら、あたしたちが——」

「うん。でもね、たぶんミキちゃん、嫌じゃないと思うんだ」
綾乃は佳奈をまっすぐに見上げていった。微笑んではいるが、その視線は真剣そのものだ。
「さっきもびっくりしてたけど、嫌だって顔してなかったし。前にミキちゃん、楽器弾くの好きだけど誰かと一緒にやるのが一番だって言ってたから」
佳奈は目を丸くして綾乃の言葉を聞いていた。
「それに、ミキちゃんが今まで部活やらなかった理由と今あの三人とバンドをやりたいかどうかは関係ないでしょ？　部活には入らなくてもいいって言ってたし。だったら、ミキちゃんが話してくれるまでは知らなくていいと思うの」
綾乃はそこまで言って一度言葉を切ると、にっこりと笑って「ね！」と付け足した。
「ん……わかった。綾乃がそう言うならもう訊かない。ごめんね雅」
「ん、いや、いい」
三人の間の空気が緩む。綾乃はつつつ、と佳奈のそばに寄っていくと、その腕を取って歩き出した。
「わっ。こらこら綾乃？　あたしは美紀じゃないんだからね」
「うん」
頷いて佳奈を見上げた綾乃は、さっきの大人びた笑顔とは違う、いつもの笑顔だった。熱愛中のカップルのように佳奈の腕を抱き寄せたまま、離そうとしない。佳奈は苦笑して、綾乃に歩調を合わせた。
「困ったなぁもう。美紀が伝染っちゃったじゃん」
「正面から抱きついてこないだけいいんじゃないか？」
「どーだか。そのうち後ろから飛びつかれそうだわ」
翌日。いつもと同じ時間に現れた美紀は、愛用の楽器を背負っていた。かばんだけ自分の席に放り投げ、楽器は背負ったまま雅の席に来る。
「はよーす」
「おはよう」
「おはようミキちゃん。もう今日から練習なの？」
隣にいた綾乃が尋ねると、美紀は当たり前という顔で頷いた。
「そもそも本番が終業式じゃん？　あんまり時間がないから、できる曲から合わせていくかってことで」
楽器部室に置いてくる、と言い置いて教室を出ていく。それを見送った綾乃がそっと呟いた。
「よかった……」
「ん？」
雅が聞き返すと、綾乃は慌てて言った。
「ううん、あのね。昨日はあんなこと言ったけど、もしかしてミキちゃん、本当にやりたくなかったらどうしようって思ってたから、そんなことなさそうでよかったなって」
「ああ、それは大丈夫だ。昨日も夜に話したけど、ちゃんとやる気だった」
「そっか……」
胸を撫で下ろす綾乃に、雅の口からお礼の言葉が漏れそうになる。それを抑えて、代わりに美紀がやるようにくしゃっと綾乃の頭を撫でた。
「ありがと」

代わりにお礼を言って嬉しそうな綾乃。と、佳奈が二人に近づいて来た。
「おっはよー」
「あ、おはよう」
「おはよう」
「ねえ、今そこで美紀とすれ違ったんだけどさ。美紀、楽器持ってきてたね」
「持ってきてたな」
雅が頷くと、佳奈は綾乃に笑いかけた。
「綾乃の言ったとおりだったね。あの子結構やる気じゃん」
綾乃ははにかみながら、そうだね、と嬉しそうに笑った。

そうして美紀がバンドに加わってから二週間が過ぎて、そろそろ月が変わる頃。雅がそろそろ夕飯を作ろうかと腰を上げかけた時に、携帯が鳴った。美紀からのメールだ。
『今日泊まりに行っていいか？』
簡単な文面に、雅もシンプルに返信。
『構わない。夕飯は食べずに来い。』
時間的に、バンドの練習が終わってすぐに送ったのだろう。着くまでにはもう少しかかる。雅は二人分の材料があるかどうか、と、エプロンを片手に冷蔵庫を開いた。ふーむ、と唸って、再度携帯に手を伸ばした。
それからきっかり三十分で現れた美紀は、買い物袋を食卓に置き、かばんとベースを雅の部屋に放り込んで、リビングのソファに倒れ込んだ。雅はそれを見て、熱い日本茶を淹れた。
「ご飯が炊けるのにもう少しかかる。飲んで待ってろ」

美紀は湯呑みを身を起こして受け取ると、恐る恐る一口飲んだ。まだ熱かったか、次は飲まずにテーブルに置いた。
小さめの音量でラジオを流す。炒め油のシューシューという音がそれに重なる。やがて炊飯器がピー、ピー、と鳴り、フライパンの中身にも十分に火が通る。深皿を二つ出して盛り付け、食器と一緒に食卓に運ぶ。台所にとって返して、美紀に買ってこさせたレタスを洗ってボウルに積み上げ、作り置きの卵サラダを小鉢に入れて、もう一往復。
「そろそろできるぞ」
美紀に声をかけて、ご飯と味噌汁をよそう。食卓を通り過ぎて台所に来た美紀に茶碗を持たせ、自分はお椀を持っていく。
「「いただきます」」
静かに声を合わせて、食べ始めた。食べている間も、いつもなら何かしら会話があるが、今日はラジオから聞こえる誰かの会話だけだ。雅は黙々と食べる美紀の横顔を伺った。
何があったのか、大まかに想像はつく。具体的なことを訊くのはまだ早いか。
いつもなら会話が途切れても気にならない雅だが、美紀のこういう沈黙には平静でいられない。いつもは表情を隠さない美紀の感情を抑えた顔が気にかかる。それでも自分から口を開かないのは、夕飯も入浴も済ませて、二人で部屋に入ってからだと思っているからだ。いつも、相手に何か話したい時はそうしていた。
夕食を終えると、美紀はすっと二人分の皿を取って台所に運んで、そのまま洗い物を始めた。休んでおけ、と言いかけて止めた。代わりに風呂にお湯を張って、バスタオルやパジャマを二人分準備しておく。

交代で入浴して、紅茶とクッキーを準備して、雅の部屋に入る。いつもどおりだ。美紀が最低限のことしか話さないこと以外は。
「何があったんだ？」
雅が促す。俯いて、パジャマのボタンをいじっていた美紀は、ためらいがちに話し始めた。
「あの軽音部の三人とケンカになってさ」
「ケンカ？　曲も決まって練習してるところなんだろう？」
「そうなんだけど……」
美紀はいったん言葉を切って、話し始めた。
「あいつら、練習してこないんだよ。ドラムは仕方ないとしても、歌とかギターは家でもできるだろ。けど歌詞がうろ覚えだったり音が微妙に間違ってたりタイミングが違ったりするとこをバンド練で直しても、次の練習で全然直ってないし、直そうって頑張った感じでもないんだよ」
雅は納得がいった。美紀は周りが大学生だからというのもあって、日々それなりの時間を練習に充てている。楽器を持っていれば、雅の家に来た時に弾くこともある。今回のバンドに参加することになったばかりの頃にも、雅が夕飯の支度をしている時に楽譜を広げて練習していた。
「ここ一週間それが続いたもんで、真面目にやる気あるのかよってもめてさ。やる気がないってわけじゃないんだろうけど、出来が悪いのに練習しないで良くなるわけないんだよ。そんなん考えるまでもないことだろ」
美紀の声が大きくなってきた。自分でもそれに気付いてか、紅茶をそっと口にする。
「ドラムはむしろ楽譜に何かメモったりしてて、学校でしか練習できないのにちゃんと形になってきてるんだよ。元々オレのこととかカルマ式のこととか知ってるからだろうけど、誘った手前、みたいなことも考えてるらしくてさ」
雅は静かに頷きながら、どう言ったらよいか考えた。
美紀は中学生の頃から音楽をやっているし、それ以前からバンドをやっている兄がそばにいた。雅は美紀と付き合うようになって初めて「習い事」でなく「趣味」で楽器を演奏している人が身近になった。自分自身は習い事をした経験もなく、今でも何か楽器を触りたいとは思わない。だから美紀の話に普段のように答えるのは難しい。
「オレああいうのすげー嫌で。そんなにちゃんとやる気ないんならオレがやらなくてもいいだろ、って言ったらそれは困るって言うしさ。ならせめてまともに練習して来いって話だよ」
「ドラムの人は仲裁してくれなかったのか？」
「んー、なんかあいつ立場弱いのか押しが弱いのか知らねえけど、入りたいけど入れないって感じでおろおろしてた」
その時の様子を思い出したのか、ようやくわずかに苦笑を浮かべる。雅はそれを見て、ゆっくりと、言葉を選びながら言った。
「お前の方が正しいと思う。私は練習のことはよくわからないが、お前の技術をアテにして頼んだのなら、最低限それについて行く姿勢は見せるべきだろう」
「だろ？」
「ただ、お前はずっと部活に入らずに浩太さんたちとやってるから、特に練習熱心な人しか知らないだろう。浩太さんたちは高校も大学も軽音部にいるんだから、同じようなことを悩んだことがあるんじゃないか？」

美紀は雅の言葉に驚いたようだったが、それでも遮らずに聞いていた。
「何もやってない私よりも部活で音楽をやっていた浩太さんの方がきっとそういう時にどうしたらいいのか、的確なアドバイスをくれるだろう」
「んー、何か兄貴には言いづらいんだよな……」
「何故だ？」
「すげーバカにされそうな気がする」
ぼそりとそう言った美紀の表情に、既に怒りはない。拗ねたような言い方に思わず「そうかもしれないな」と返すと、こちらを睨みつけてきた。
「お前他人事だと思って……」
「でもその後でちゃんと教えてくれるだろう？」
「そうかもしれねえけどさ……」
わざとやっているわけではないはずなのだが、こういう時の美紀の表情はかわいくて仕方がない。そう言うと本人はオレにとっちゃ褒め言葉じゃねーよ、と文句を言うが、男でも女でもかわいいものはかわいいのだ。
「ま、しゃーねーか。兄貴に聞いてみるわ」
「それがいい」
美紀がようやく笑みを浮かべた。それに雅はほっとした。美紀の悩みを解決することはできなかったが、それでも美紀の気持ちを和らげられたことに。
「ところで雅、いつも着てるオレの寝間着どうした？　タオルの上に載ってたからこれ着たけど」
今更な疑問。美紀の言うとおり、普段はここに置きっぱなしのTシャツにジャージという姿なのだが、今日は水色のパジャマだ。サイズはぴったりのはず。
「ああ、ちょうど昨日洗濯機に放り込んだからな。まだ洗ってないし、掘り出して着せるのもどうかと思って、私のを着てもらってる」
「やっぱお前のかこれ……」
美紀は改めて着ているパジャマをしげしげと見ている。若干頬が赤らんでいるのは、女子のパジャマだと意識したせいだろうか。
「サイズは問題ないだろう？　身長もほとんど変わらないし」
「……まあな。ちょっと緩いけど」
赤面しているのはそのせいか、と思い直す。確かに身長はわずかに雅の方が高いくらいだが、体型は雅の方が明らかに凹凸がはっきりしている。美紀はそれこそ体型も男子に間違われるくらいスレンダーだが、雅はいくら無愛想で言葉遣いが固くても男子だと思われたことはない。
「ああ、私の方が太いからな。それは勘弁してくれ。ズボンが落ちるほどではないだろう？」
「いや別にお前だって太ってねぇだろ。単にその、オレと違って胸があるだけで……」
「お前の服は私が着たらかなりきついからな。逆もまた然りだろう」
「だろうな。……っておい。待て、お前オレの服なんていつ着た？」
「前に間違えてお前の制服を着てしまったことがあったんだ。クローゼットに自分のと並べて吊ってあって」
「ああそっちか……」
「そっち？」

雅は問い返して、その瞬間の美紀の「しまった！」という反応を見て何のことだか理解した。
「さすがに預かり物の衣装に断りなしに袖を通したりしないぞ」
「いや、そうだよな。でも他にないと思うだろ」
一月ほど前に浩太たちが通っている大学で演奏した時の美紀の衣装を、雅は預かっているのだ。泊まりに来た時に着てやる、という約束があるからなのだが、それは未だに果たされていない。
「ふむ。話のついでだ。あれを着てもらうか」
「でぇっ!?　なんで!?」
「いや、せっかく話に出たことだしな。そういえばあれから何度も来てるのにまだ一度も着てもらってないから、そろそろかと思って」
雅はそう言って反論される前に立ち上がる。クローゼットを開けると、クリーニングのビニールをかけたままの衣装を出した。黒のフリルで飾られた膝丈の赤と黒のドレス。ハンガーから外してベッドに広げ、隣に二の腕までを覆う手袋とオーバーニーソックスを並べた。さすがに靴は室内ではくような物ではないので、手元にない。
美紀は自らの失言を後悔しながら雅がいそいそと用意するのを見ていたが、一揃い広げた後で雅が「お茶を淹れ直してくる」と言い置いて部屋を出ると、諦めたように着替え始めた。

そして練習のない日を挟んだ翌日。ちゃんとベースを背負って登校した美紀は、いつもと変わらない様子で過ごして、放課後になるとあっさりと練習に向かった。他の二人は美紀のトラブルを知らないらしく、心配そうなそぶりもなく美紀を送り出した。二人には言っていないのだろうから、雅も気にしているのを表に出すわけにもいかない。
美紀が行くのをためらっているわけではないので心配することはないのだろうが、相談に来る前にもそれなりにイライラしていたはずなのに、雅を含めて誰もそれに気付かなかったのだ。感情をあまり隠さない美紀には珍しいことだけに、どうしても気にかかる。本人からはどうするとも聞いていないが、きっと浩太に相談して何がしかのアドバイスをもらったのだろうと信じるしかない。
その日の夜は、今までに作ったことのない料理を作ってみた。美紀が次に来たら振る舞おうと考えているレパートリーなのだが、煮詰めすぎてやたらと味が濃くなってしまった。焦げ付いてしまって鍋を洗うにも余計な時間がかかるし、いいことなしだ。
悶々としていても仕方がない。家事が一段落ついたところで、美紀にメールを送ってみた。いつもさほど待たずに返信が来るから、とテレビをつけてぼんやりと見ながら待っていたが、なかなか携帯が鳴らない。テレビも面白いわけでもなく、無闇に起こる笑い声が空虚に響く。かえって心の置き所がなくなってしまい、テレビは消して先に入浴を済ませてしまうことにした。
いつもより時間をかけて全身を洗い、普段より長めにお湯に浸かる。美紀のことは考えないように意識してのぼせる寸前まで粘ってから、浴室を出た。湯冷めしないよう体を拭くのは手早くやってリビングに戻った。携帯に目をやると、ちかちかと青く点滅している。思わず飛びついて、安心半分、不安半分で携帯を開く。新着メールではなく、不在着信のアラートが出ていた。美紀からだ。すぐにかけ直して、呼び出し音を聞きながらキッチンに向か

う。ポットにお湯を注ぐ前に美紀が出た。
『もしもし？』
「もしもし。すまん、すぐに返信が来なかったから先に風呂に入っていた」
『あー、ごめんごめん。たぶんメール受け取ったの帰りの電車の中でさ。揺れてて全然気が付かなくて』
　美紀はこちらが心配していたことなど気付いていないのだろう、気楽な口調でそう言った。
「そうなのか。練習……じゃないな。食事でもしてきたのか」
『うん。ひとまず解決はした。オレが部室に入るなり向こうが謝ってきてさ。オレもちょっと言い過ぎたわ、みたいな感じで、一応もっと練習してくるからこの四人でやろうってことになった』
「そうか」
　雅はほっと息を吐いた。どうやら美紀だけでなく相手の方もどうすればいいのか考えていたらしい。当然と言えば当然だが、収まるところに収まったようだ。
「そうするとこれから向こうの三人は猛練習だな」
『まあそれはそうしてもらわないとな。あと半月くらいあるから、終業式までにはなんとかそれなりの形にできると思う』
「そうか。しかし終業式の日の放課後か。人集まるか？」
『んー……それは若干不安なんだけどな……』
　二人はこれまで終業式の日に軽音部の定期ライブをやっているなんて聞いたことがなかった。それに、たとえ知っていたとしてもどれくらいの人が放課後まで残って聴いてくれるかも定かではない。
「まあ最悪三人に聞かせるつもりでやればいい」
『軽音部的には完全に失敗だなそれ』
　そうは言いつつ、半ば他人事のように笑う。話を続けながら、雅はなんとなく文化祭の中庭ステージで演奏する美紀の姿を思い浮かべた。いつも着ている制服姿で、スカートをひらめかせながら踊るようにベースを弾く姿を。
「そういえば、あの衣装は持って行くか？」
『いらねーよ！　着ねーよ！』

　翌日からも、週の半分以上は放課後になるとベースを背負って練習に向かう日々が続いて、三週間。あっという間に終業式の日がやってきた。コートを着ていても首をすくめてしまうほどの寒さだが、幸い空はすっきりと青い。
　雅はこの日、いつもより三本ほど遅い電車に乗った。雅の最寄り駅から二駅のところでエレキベースを背負い、通学かばん以外にもう一つかばんを提げた美紀が乗ってきた。
「お、珍しいな」
「おはよう。今日は少し遅れたから合わせた」
「なんだよ、寝付けなくて寝坊するほどオレのライブが楽しみだったのか？」
「お前は通知表が楽しみだろうな」
「……うるせーよ」
　教師たちからの評判は揃って悪い二人だが、学業だけで見るとはっきりと差がある。雅は特に気にするほど低い成績ではないが、美紀は中学の頃から芳しくない。
「まあそれはともかく、ライブの準備はできたか？」
「当然」

今度は自信たっぷりに断言した。練習の成果は出ているらしい。学校に行く足取りも軽かった。
「軽音部員で宣伝もしてるらしいな。さすがに三年は来ないだろうけど、一、二年は結構来るみたいなこと言ってた」
「ほう。それならいいな。せっかくなら客は多い方がいい」
「だな。ド頭だしオレらが客寄せ役ではあるんだけどさ、最初に客が少ないと盛り上がるにも限界があるしなー」
「そういえば、カルマ式と同じやり方でやるのか？」
「ああ、そうする。ヴォーカルが客のせるのあんまり慣れてないらしいからさ。五曲ならなんとか保つだろ」
校門を通りながら話しているのはステージの進め方だ。カルマ式のリーダーである浩太は曲と曲の間にMCをあまり挟みたがらず、言っても一言二言ですぐに演奏を始めてしまう。休憩なしで演奏するのは長くなると演奏者の負担が大きいが、特に短時間のステージでは客の熱を冷まさずに最後まで持って行けるし、MCが苦手でも勢いで進めてしまえる。
「まぁ、練習自体はあれからちゃんと進められてるし、あいつらが緊張して動けなくなったりしなきゃそれなりにできるだろ」
そう言って、教室のドアをがらりと開ける。席につく前に、クラスの男子が美紀に声をかけた。
「井上ー、お前今日の軽音のライブ出んの？」
「おー、出るよ。一発目」
「最初かよ。じゃあ聴き行くわ」
「サンキュー！」
美紀は笑って気軽に答える。雅はその笑顔を横目で見ながら自分の席についた。
朝は出席だけ取ってぞろぞろと講堂へ移動だ。終業式をぼんやりとやり過ごし、HRが始まって五分もすると、担任が名前を呼ぶ声も聞こえないくらい騒がしくなる。手元に戻ってきた通知表は一学期と比べると軒並み大きな数字が並んでいる。そこにはさして感慨もないが、担任のコメントには思わず目が行く。
「よう、どうだった？」
先にもらっている美紀が寄ってきた。綾乃も一緒だ。
「ひととおり上がってたな。そっちは？」
「オレのも全部上がってた」
「すごいね二人とも。あたしはほとんど変わってないよ」
綾乃は賞賛の笑顔を浮かべて美紀を見上げているが、雅には成績が上がった理由はわかっている。綾乃をいじめていた輩を相手に、授業中にいきなり怒鳴ったり机や椅子を叩いたりすることがなくなって、どの教科でも授業態度が劇的に良くなったと見なされたからだ。
雅もそういう時に美紀を止めながら相手を罵倒したり、美紀を止めようとする教師を辛辣な言葉で牽制するのが常だったから、二学期に入ってトラブルの相手がいなくなって、相応の数字になっただけのことだ。元が不当な評価だったのだから数字の変化に感慨などあるはずもない。美紀もそのことはちゃんとわかっているだろうが、綾乃にそれを告げることはない。
「ま、こんなもんよりライブだライブ」
「そうだな」
「ミキちゃん、頑張ってね！」
「頑張るともさ！」
美紀は力強く宣言した。

その宣言どおり、美紀はHRが終わるやいなや教室を出て行った。雅は気付いていたが、席の近い友だちと話していた佳奈はそれに気付かなかったらしい。雅の席に来てから周りを見渡して、

「あれ、美紀は？」

と訊いてきた。

「先に行った。準備はできるだけ早く終えたいんだそうだ」

「なんだかんだで気合い入ってんね」

「ちょうどバンドが休止期間に入っているからな。集中もできただろうし、初めてのバンドでやるのもそれなりに楽しいらしい」

雅はそう言いながら、いつもより饒舌になっていると自覚した。部活のイベントの中で、制服で演奏する美紀を見るのが楽しみなのだ。

綾乃も一緒に、三人で講堂に向かう。途中で佳奈の友だち二人とすれ違った。挨拶ついでにライブの話をしてみると、二人とも存在自体は知っていたらしい。

「あー、クラスの男子がそんなこと言ってた」

「行く？」

「いやー、だってあいつと別に仲良くないし。佳奈行くの？」

「行くよー。あたしの友だちが最初のバンドでベース弾くんだ。ヤバいよ、超うまいの」

佳奈がちょっと声を落として言うと、二人とも少し興味が湧いたようだが、ヴォーカルやギターでなくベース、というところで今ひとつ乗り気になれないらしい。

「でもベースって目立たなくない？」

「聴いたらわかるよ。あたし音楽とか全然わかんないけど、あの子がヤバいのはすぐわかったもん」

「……どんな曲やるの？」

「……なんだっけ？」

佳奈は綾乃に助け船を求めた。綾乃は知らない二人の視線に少し緊張しながら答えた。

「全部椎名林檎の曲って言ってたよ」

「だって」

「マジで？　あたし好きなんだよね」

「じゃあ試しに来てみなよー。つまんなかったら曲の途中でも帰っちゃっていいらしいし」

結局最後の一言が効いたらしい。後で行くね、と言い残して別のクラスの友だちのところに行った。

「へっへー。宣伝成功」

「カナちゃんすごい」

「どんくらい来るかわかんないもんね。せっかくだったら人多い方がいいし」

満足げにそう言った佳奈は、講堂に入るなり中を見渡してぽつりと呟いた。

「全っ然人いないじゃん……」

その言葉どおり、ステージでは軽音部員がスピーカーの位置を調整したり配線したり、と忙しそうに駆け回っているが、客席側はちらほらとパイプ椅子に座っているくらいしか人影がない。

「まだ準備中だからな」

「後から人来るかなー」

「たぶんな」

雅はそうは言ったものの、特に根拠があるわけではない。軽音

部員に椅子に座って待つように促されて、ステージから妙に離れた位置にあるパイプ椅子に腰掛けたが、雅も一抹の不安を感じていた。

終業式が終わった時に暖房を一度切ったのだろう、制服だけでは少し肌寒い。ステージの上では配線が終わったのか、数人が楽器を手にステージに立って、ドラムがどん、どん、とバスドラムを踏み始めた。そばでベースを抱えてアンプの前で何やらやっている後ろ姿は美紀だ。そばにもう一人、ベースを抱えた女子が立っていて、美紀と何か会話を交わしているように見えた。彼女も含めて、美紀以外のメンバーには見覚えがない。

「向こう側のスピーカーの前にいるの、美紀だ」

雅がそう言うと、綾乃も佳奈もはっとステージを見た。

「あ、ホントだ」

「いつもそうだけど、雅、気付くの早くない？」

「見慣れてるからな」

当然のように言うと、二人は妙に納得したような顔で顔を見合わせた。

『じゃあ次ベースー。咲ちゃんの方から先やっちゃっていい？ 井上さん、終わったらエフェクターすぐ片付けるよね？ じゃあちょっと切っといて』

ドラムの調整が終わり、続いてベース。美紀はミキサーの指示に手を挙げて応えた。もう一人のベースが音を出して調節し、続いて美紀がエフェクターを挟んだ音を出して再調整。

続いてギター、キーボード、ヴォーカル、と順番に音の調整が進んでいく。その間に徐々に客が入ってきて、気付けば講堂の後ろ半分に並んでいるパイプ椅子は半分以上が埋まっていた。

「人増えてきたねー」

「ね。さっきはどうなることかと思ったけど」

『じゃあ全員で音出してみるわよ』

マイクを通して、そんな言葉が聞こえた。講堂中が急にざわめき、がたがたと席を立つ音もする。

「えっ、始まるの？」

「たぶん音量調節の最後だと思うが、美紀も弾くみたいだし前に行こうか」

「行こ行こ。せっかくだし近くで見たいじゃん。あっち寄っとこ」

「人がよさそうだし」

# Wildflower / Superfly

三人が立ち上がるかどうか、というタイミングでギターの歪んだ音がイントロを奏でる。すぐにもう一本のギターとドラム、続いてキーボードとベースが入ってくる。ステージにいるのは美紀と同じバンドの三人ではない。ギター弾き語りのヴォーカル、ギター、キーボード、ベースに美紀ともう一人、そしてドラム。美紀は最初は弾かずにゆるく構えたまま立っていたが、途中で高い音で歌に絡むようなリフを入れ始めた。

美紀は初めて一緒に弾くメンバーだろうに、落ち着いて自分の音を挟み込むタイミングを見ている。カルマ式のメンバーほどではないにしても、それぞれがうまいのだろう。それとも初めてではなく、このメンバーでも練習していたのだろうか。

サビで少しずつ上っていく音をヴォーカルは力強く歌い、ベースとドラムが躍動感のあるリズムを作り、それをギターとキーボードが彩る。

二番に入ってベースが交代した。美紀のベースはもう一人とほ

ぼ同じラインを弾いているが、二人の音がまるで違うのはすぐにわかる。そして、その場に立ったままだったもう一人と違って、美紀は全身でリズムを取り、間奏のところではギターに駆け寄って向かい合って同じフレーズを弾き、元の場所に駆け戻って今度はベース二人で顔を合わせて、と動き回っている。無線のシールドを使っているから、エフェクターに繋がれていないので動きに制限がないのだ。

エンディングからドンドンドンドン、ときっぱりとしたリズムで曲が終わると、講堂中に歓声が響き渡った。もちろん雅たちも叫ぶ。

ミキサーの方を伺ったヴォーカルが頷いて、ステージ上のメンバーに撤収を告げた。美紀を除く面々がぞろぞろと下りて行く代わりに、美紀のバンドのメンバーがステージに上がってきた。

「今のもすごかったね。これも練習してたのかな」

「そりゃそうじゃない？　ちゃんと曲だったもん。ついでに一曲くらいって言われて巻き込まれたとか」

「たぶんエフェクターを使ってるからだろうな。他の人と音が違うからバンド全体のバランスを見たい、と言われたら断れないだろう」

「でも楽しそうだったよね」

綾乃の言うとおり、演奏中だけでなく曲が始まる時から、美紀はずっと楽しそうに演奏していた。これまではカルマ式でしか見られなかったその笑顔を、同じ制服を着た人と共有している。雅はドラマーと言葉を交わしている美紀の背中にそっと微笑んだ。

『さて、それでは改めて、金田高校軽音楽部のクリスマスライブを始めます！』

元気全開のアナウンスに歓声が上がる。

『今日は六バンドが演奏します。どのバンドも熱い演奏を聞かせてくれるはず！　最後までお付き合いください！　それではさっそく行ってみましょう。トップバッターは一年生四人のシャロン！　どーぞ！』

司会が振るのと同時にメンバーが定位置についた。ドラムはやや中央より右手寄りの後ろ、左手にギター、右手にベース。ギターとドラムの間くらいにキーボードが置いたままだが、そこには誰もいない。

#閃光少女

中央に立ったヴォーカルがギターと目配せをして、同時に歌い始めた。ギターだけをお供にワンフレーズ歌って、ドラムとベースが入ってくる。音をひずませたベースとドラムがシンプルなパターンできっちりとリズムを刻み、ギターはやや控えめに飾りを付けていく。

声のパワーはさっきの音出しで歌っていたヴォーカルには及ばないが、細い声なのにギターと二人でも対等に歌っていたし、全員が入ってきてからも突き通すようなまっすぐな歌い方で聴き手の耳に届かせる。

疾走感あふれる曲を長いエンディングまで弾き終わると、拍手と歓声が講堂に響いた。美紀は足下のエフェクターを爪先でとんとんといじると、ドラムの方を振り返ってそちらに頷きかけた。

#修羅場

ドラマーは他の二人にも視線を送って、スティックを四つ、打ち合わせた。ベースのぐぅんと唸るような音で曲が始まる。軽い音のギターが踊るように短いフレーズを並べ、ベースは最初の曲

以上に音の数を減らしてうねりを作っていく。ドラムもギターも、ベースのリズムを逃すまいとするように美紀の方をじっと見つめていた。

ヴォーカルはギターと同じように、ベースが作りドラムが支えるリズムに乗るように軽やかに歌う。美紀は時折他のメンバーを見るくらいで、後は同じ場所に立ったまま、手元を見ながら顔を伏せて弾き続けた。

「なんか最初があの服だったせいか、美紀が制服で演奏してるの変な感じ」

佳奈がそっと呟いた。綾乃は苦笑して、でも今日はカッコいいよ、と囁き返した。佳奈もすぐに頷く。

二曲目がベースの音で終わると、美紀はようやく顔を上げた。満足そうに微笑んで、ヴォーカルの方を見た。

「ありがとうございました！　シャロンです。二曲続けて聴いていただきました」

一度言葉を切って、全体を見渡して続けた。

「次の二曲はヴォーカルを交代して、ベースの美紀ちゃんが歌います。ってことで、交代！」

そう言って美紀に合図すると、自分はさっとキーボードのそばに移動した。代わりに美紀がベースを抱えたままゆっくりと歩いてマイクの前に立つ。

「てことで、こっから二曲は麻美(あさみ)がキーボード弾きます」

一言ぼそりと言って振り返る。キーボードの後ろで構えた彼女が手を挙げたのを確認して、客の方に向き直った。マイクにそっと手を載せて。

「じゃあ行こうか」

#茜さす帰路照らされど……

言葉が消えた瞬間にピアノのイントロが始まった。ゆったりとしたピアノの和音に乗せて美紀が静かに歌い出す。右手はマイクに添えられたまま。女子にしては低めの歌声に、観客がわずかにどよめく。ワンフレーズ歌って、その手をすっと下ろす。

サビの一言目で、雅は思わず息をのんだ。直前までの静けさから一転、一気に声量を上げて歌う声にベースとドラムが加わって、鮮烈な音の波が押し寄せる。

もう何度も聴いている歌声なのに、雅は初めて美紀のステージを見た時のように震えた。単純に歌に感動したからなのか、見慣れないメンバーに囲まれて歌っているからか。どちらかはわからない。ただ、美紀の歌に震えた。

歌い終えて、美紀はエンディングをキーボードに任せてすいとマイクから離れた。元いた場所に歩きながら、イントロと同じフレーズを丁寧に繰り返すキーボードに音を重ねる。その上でドラムがソロを取る。

スネアのきっぱりした音で曲を終えると、わずかな間があって、これまでで一番の歓声が上がった。佳奈が「美紀ー！」と叫ぶ横で、綾乃も負けじと「ミキちゃーん！」と叫ぶ。雅は声を出すことはおろか、手を叩くのも忘れて美紀を見つめた。会場を見渡す美紀と目が合う。美紀は少しだけ意外そうな顔をして、すぐに笑った。

#丸の内サディスティック

歓声が止まないうちに、美紀は楽器を構え、いきなり歌い出した。イントロなし、前振りなしの歌を、全員の音が同じリズムで追いかける。ギターもベースも最初の曲より暴力的な音色で、よ

り攻撃的な美紀の歌を支え盛り上げる。

最初の間奏はギターが取って、キーボードが和音を弾く。何のエフェクトもないピアノの音色が、不思議と違和感なくギターソロを支えた。再び歌が戻って、次のソロは美紀自身のベースが取った。マイクからわずかにずれて立つと、ややゆっくりにも感じられるフレーズをピアノとドラムを従って紡ぎ、低音のロングトーンから歌に戻った。ピアノ伴奏のみの静かなブリッジがあって、再びサビで全員が一気に出る。歌が途切れてもスキャットでさらに盛り上げて、断ち切るように終えた。

歌い終えると美紀はすっと最初にいたベースアンプのそばに戻り、ヴォーカルがキーボードの後ろから駆け戻ってきた。その手には拡声器が握られている。彼女がマイクの前に立つやいなや、ギターが一人でイントロを弾き始めた。それにかぶせるようにヴォーカルがマイクに叫ぶ。

「これで最後の曲です！　今日は本当にありがとうございました！　次からのバンドもぜひ聴いていってください！」

言い終えるのとほぼ同時にベースとドラムが加わって、ヴォーカルが拡声器を構える。

＃幸福論　悦楽編

ギターもベースも前の曲の音は変えず、ヴォーカルの細い声が拡声器でざらついた声に変わって楽器の音色に近づいていく。間奏も一人一人がブレイクの間にわずかに取るくらいで一気に突き進んでいく。最後にはそれぞれの楽器をめちゃくちゃにかき鳴らしヴォーカルも言葉にならない叫び声をあげた。

嵐のような音が途切れると、それを取り返すように歓声と拍手が講堂を埋め尽くした。あるいは頭を下げ、あるいは手を振って、四人はステージを下りていく。

「ね、ミキちゃんのとこ行かない？」

綾乃が佳奈と雅の裾を掴んで言った。頬を真っ赤に染めて、今すぐにでも美紀の下りた方に駆け出しそうだ。雅は頷くと、二人より先に立って歩き出す。ベースに近い方にいたのだが、それでも袖に辿り着くのは大変そうだ。何しろ気付けば講堂の半分近くのスペースに人が密集しているのだ。交代の時間だし、最初のバンドとは思えないほどの熱気を逃がそうと密度は多少下がるだろうが、それでも小柄で華奢な綾乃では苦労するのが目に見えている。

それでもそれなりに骨を折って、なんとか辿り着く頃には次のバンドが始まりそうになってしまった。美紀に手招きされて外に出る。ひんやりした冬の風が、興奮と中の熱気で火照る体に心地よい。

「ミキちゃん！　すっごいカッコよかったよ！」

「ホントに。やっぱ美紀、ベースもだけど歌すごいわ」

興奮して代わる代わる話しかけ、美紀も嬉しそうにそれに答えた。そのやり取りを聞いていると、さっきまでの震えとも熱気とも違う、温かい思いが灯る。

「ほら、雅も何か言ったら？」

「ああ。佳奈も言ってたけど、今日は歌が特によかったな」

「そうか？　まあオレがセンターでってあんまりないから気合いは入ったけどな」

口ではそう謙遜したが、どこかほっとした顔だ。普段とはいろいろと違う状況で演奏しただけに、自信はあったにしても褒めてもらえたので安心したのだろう。

「さて、と。美紀、あたしたちはこれで帰るけど一緒に帰る？」
「いや、片付けもあるし一応全部聴いてくよ」
「そっか。ま、出演者だもんね」
「そゆこと。だから先に帰ってて」
「おっけー。じゃあまったねー」
その場でひらひらと手を振る美紀に見送られて、雅たちは教室に戻った。かばんを置きっぱなしにしてあるのだ。
「いやー、東青大で見た時もうまいと思ったけど、ホント一人突き抜けてる感じだねー」
「うん。他の人もうまかったけど、ミキちゃんはなんか、プロみたいだったね」
「雅ー。美紀ってプロになるのかな」
「どうかな。まだ聞いたことはないな。少なくともカルマ式でデビューはないとは言ってたが」
雅は自分でも考えながら答えた。浩太からは自分はプロにはならないと言われたことがあるが、美紀や他のメンバーについては聞いたことがない。
「そうなんだ。あんなにうまいんだからみんなでデビューしちゃえばいいのに」
そしたらCDとかDVDとか出してさ、駅のでっかいポスターにバーン！　て美紀が写ったりして、と妄想を膨らませて笑う。
次々に湧き上がってくる佳奈の話を聞いて、雅も思わず、武道館の大きなステージで踊るように演奏する美紀の姿を想像した。

翌日からは冬休み。半端な時間に食事をしてしまい、いつもより一時間遅れで家事を終えた雅は、居間のソファにぽすんと腰を下ろした。
昨日から続く快晴で、窓の外はどこを切っても青空だ。このままぼんやりと過ごすのももったいないか、と目的もなく腰を上げかけたところで、携帯が鳴った。
「もしもし」
「もしもし雅？　今日暇か？」
「ああ。三十日に親のところに行くまでは何も予定がない」
カレンダーに目をやる。大晦日の一日前に、両親の家に行くことになっている。年末年始くらいは家族で過ごそうということだ。最初は冬休みに入ったらすぐにでも、と言われたのだが、三十日まで引き延ばした。
「じゃあ買い物付き合ってくんね？　服見たいからさ」
「ああ、わかった。昼過ぎにするか？　こっちはいつでも構わないが」
「ならこっちもすぐ出るわ。駅で会おうぜ」
了承して電話を切る。てきぱきと身支度をして、急いで家を出た。単に「駅」とだけ言われているが、北間に行くのなら指しているのは美紀の家の最寄り駅だ。北間駅は雅の家から見て美紀の家のさらに先にあるから、行く途中で合流しようということになるのだ。
電車に乗って四つ目の駅で、美紀が乗ってきた。
「よ」
「うん」
軽く挨拶を交わして、そのまま電車に揺られる。この辺りでは北間が一番、というよりほぼ唯一のショッピングエリアだから、二人も行き慣れているし、同じ学校の生徒は大半がそうだろう。

たまに家族で来ているクラスメイトに出くわすような場所だ。
今日は何を目当てに、と美紀が説明するのにいちいち頷いて、大まかにルートを話し合う。美紀の服はほぼメンズなのだが、何度も付き合っているうちに雅も店の場所を覚えてしまった。
合間に雅のよく行く店にも立ち寄って、一時間ほどで買い物を終えた。まだお昼を食べていない美紀に付き合って、ファーストフード店に入った。
「あー、疲れた」
「疲れたって、お前自分の買い物はあっという間に終えてただろう」
「それでも疲れた」
買った数は美紀の方が多いのだが、売り場をざっと見渡してすぐにこれとこれ、と決めてしまうので、時間のロスがほとんどない。雅に意見を求める時でも、こっちがいいと言えば「じゃあこっちにするか」とあっさり決めてしまう。
むしろスカートを一着買っただけの雅の方が、どれがよいかと悩んで試着して美紀に選ばせて店を変えて棚を眺めて、とやっていたから時間がかかっている。
「そうだ。改めて、昨日はおつかれさま」
「ああ、ありがとな。最初はどうなることかと思ったけど案外楽しかった」
「正直私もどうなることかと思っていた。昨日はステージで楽しそうだったから安心したんだ」
「だろうなー。愚痴ったりしたしな。あれも聞いてくれて助かった」
そう言って美紀は微笑んだ。結局雅は何もしていないが、それでも人に聞かせることが美紀にとっては解決に繋がっていたのだろう。
「あれはいつものことだ。むしろお前、なるべく言わないように遠慮していただろう」
「あー、まあな」
「前にも言ったが、私相手に辛いのを隠すな。かえって迷惑だ」
「いつもすまないねえ」
「それは言わない約束だろう」
雅は心から責めているのだが、お決まりの文句でかわされてしまう。
「まあ今回は最初っから微妙な顔してたからさ。何考えてたのかも大体わかったし」
そうだろうと思うし、だからこそ文句を言った。それでも心配をかけまいと思ってしまうのが美紀だ。諦めるしかない、と思って、話題を変えた。
「そういえば、本番前の音出しの最後、みんなでやっていただろう。あれは練習してたのか？」
「テスト休みにリハやったんだけど、その時にエフェクターかますんだったら一応全体でバランス見ときたいって言われてさ。あのヴォーカルの二宮先輩に二曲やる暇はないんだし、一曲で交代しなさい、はい楽譜！　ってコード譜渡されて」
「強引だな」
「強引なんだよあの人。なんでかベースやってた榎本先輩に代わりに謝られたけど。で、その場で合わせただけで本番」
普段のカルマ式がバンドでも何度も練習していることを考えればかなりの強行スケジュールだ。

「まあ音源もその日にもらえたから二日くらいさらう時間があったからな。別に音出しなんだから完璧に合ってなくてもいいし」
「にしてもいい具合に合っていたけどな。こう言うと悪いが元々のバンドと比べても大した差はなかったぞ」
「それはあいつら凹むな……。でもまぁ、シンプルな曲だし、あっちの方が周りはうまかったからな。実はちょこちょこ間違えたし」
雅の遠慮のない感想に、美紀は苦笑する。
「先輩ってことは二年生か」
「そう。一年と二年で結構差が出るのな」
「それはお前が言うと嫌味だな」
そうかね、と言いながらハンバーガーにかぶりつく。少し間があって、雅は気になっていた質問をぶつけた。
「軽音部には入るのか？」
「いや？　入る気はないけど」
答えはあっさりと返ってきた。
「ないのか」
「ない。あれはあれで楽しいし誘われもしたけど、カルマ式でやってた方がいいや」
「理由は訊いてもいいか？」
「兄貴とか寛美さんとか金やんとか、みんなうまいもん。オレがあん中じゃ一番下手だから頑張らないといけないだろ。うちの軽音だと、まあ二年生はそれなりだけど寛美さんみたいな変態はいないし、そもそも二年生ってそろそろ引退しちゃうし」
「純粋に音楽的というか、技術的な問題か」
「技術っつーとアレだけど、まあ主にレベルの問題だな。中学んと同じ問題もないではないけど、あん時はホラ、オレもいろんなことを許容できなかったわけでもあるし」
そう言う美紀の表情を雅はじっと見つめた。美紀がその視線にやや気圧されているのがわかって、一度目を閉じて座り直した。また目を開いて美紀と視線を合わせる。
「それならそれでいいんだ。どっちの理由であっても、入るなり入らないなり、お前が決めたのならそれでいい」
「微妙に納得いってない顔してるけどな」
「ん。……浩太さんたちはみんな東青大の軽音部に入っててカルマ式もやってるんだろう。そんなに差がないような気がしてな」
見抜かれていた。雅は余計な抵抗はせずに思ったことを口にした。
「んー、なんだろうな。東青は人が多いしうまい人はうまいから、兄貴とかにしてみたらやってみたいことができるってのはあるかもな。うちの軽音はそういう意味では逆にいい環境じゃない」
そうか、と雅は相槌を打った。美紀はそれに、と続けた。
「たぶん気になってるのはこっちなんだろうけどな、オレが一学期に教室で暴れたの知ってる奴もいるからさ。たまたまあいつらとか先輩方はよく知らないみたいで全然気にしてなかったけど、昨日の片付けとかでも近寄ってこないのもいるにはいるんだ。それはそれでめんどくさい」
やはり、と思った。美紀は特に気にしていない様子だが、雅には何故か引っかかる。
「ま、それでも前と違ってそんなんは二、三人だからな。入部した方がいいと思えば気にしないで入るから、それはやっぱ大した問題じゃないんだよ。気にすんな」

「そうか。そうだな。すまない」
「ん、心配してくれたのはありがたいよ」
美紀は優しく言ってくれた。
「にしても、やっぱステージの上で演奏するのはいいな。コピーでもオリジナルでも超楽しい」
「そうだな。それは見ててもよくわかる。真剣な顔してても笑ってても。本当に好きなんだな」
「おうよ。演奏するの自体も楽しいけどさ。ステージからだとお客さんの動きとか表情とか結構どこでもわかるんだよ。それでなんか楽しんでたりノッてたりしてるなってわかるのが最高」
「ああ、なら私がいつもいるのは申し訳ないな。なるべく隅の方にいるようにはしてるんだが」
「なんで」
「楽しんでるようには見えないんじゃないか？」
「そうか？　いつも十分楽しんでくれてるように見えるけど。違うのか？」
美紀は不思議そうに訊いてきた。雅はわずかに戸惑って、それからゆっくりと首を横に振った。
「十分楽しんでいるよ。いつもね」

# あなたのとなりに

Fukapon

「失礼しまーす」
少女が扉を開くと、少女らしさとはとうに決別した女性が振り向いた。
頬杖を離して首だけを動かすと、ライトブラウンの髪がふわりと、黒仕立に包まれた肩をかすめる。
「いらっしゃい。今日も憂鬱な仕事が来てるわよ」
「やっぱり恋愛ものですか？」
少女は会話を続けながら、抱えていた黒のピーコートをコートハンガーに引っかけ、やはり黒の小さなリュックサックをハンガーのそばに置いた。
「ええ。クリスマスが近いと毎年こうなのよ」
ニットとボレロをグッと持ち上げる胸を前に出し、女性はティーカップを下げるべく立ち上がる。
入れ替わりで少女がテーブルに着いた。
テーブルと言っても、折りたたみ式の長机。総じて質素な部屋で、他にある什器も僅かだ。彼女たちが座る椅子が二脚、壁面のスチールキャビネットが一架、電気ポットの乗ったワゴンが一台。以上。
綺麗と言うよりは殺風景な中で、少女テーブルに置かれた数枚綴りの書類をめくっている。
「何がおかしいのよ？」
今度は二人分のティーカップを持って戻ってきた女性は、訝しげに少女を見ている。
彼女は漆黒の髪を有する頭を小さく揺らし、くすくすと笑っている。噛み殺そうにも、殺しきれないといった風だ。
「ねぇ、教えなさいよ」
女性はティーバッグを沈めたカップを彼女の前に、自身の前に置く。
「ねぇ？」
さらにもう一度、早くも焦れたように催促して座ったとき、少女から答えが返ってきた。
「それはですねぇ、この依頼者『風間光（かざまひかる）』って、うちのクラスの『風間涼（すずみ）』のお兄さんなんですよ」
「ああ、言われてみれば同じ名字ね」
彼女とて答えの意味は理解できるが、少女が笑っている理由は未だ理解できない。クラスメイトの兄が恋愛相談を持ち込んできた。それだけではないのだろう。
「そんなにおもしろいかしら？」
「だって、この中学生みたいな悩みが、妙にはまってまして」
ようやっと落ち着いてきたのか、少女は顔を上げて、カップに手を伸ばした。
「いただきます」
「どうぞ」
女性も紅茶を口にしながら、少女の持つ書類から写真入りの一枚を抜いた。映った顔を改めて眺めると、彼女の表情は霞を深め、首まで傾げている。
「依頼は確かに、可愛いっちゃ可愛いわよね。彼氏は少なくとも成人してそうだけど、彼女が若いのかしら」
「ううん、彼女の方が年上ですよ。千鶴（ちづる）先生のちょい上、三十二

歳」
「あら、音葉は彼女の方も知ってるの？」
「もっちろん。一緒に遊びますから。彼女の方もすっごい奥手なんですよ、その年で初めてだから」
「ふぅん。なら今回、依頼者捜しでミスることはなさそうね」
女性は持っていた書面を少女の方へとスッと滑らせ、席を立った。
「行くわよ。今日は長くなるから、暖かくしときなさい」
「はーい」
ハンガーから各々コートをひったくると、袖を通しながら部屋を出て行った。
パタリと閉じられた扉の上に記された部屋の名前は――
〈魔法学科第九準備室〉
夜の帳を下ろした寒空の下、二人はすうっと闇に溶け込んだ。
学校から十数分も歩くと、ちょっとした街に出る。
ちょっとしたとは言え、この時期は赤と緑で目映く着飾っていた。
「指定場所はここよね？」
ポケットから抜いた手まで黒ずくめ。雨宮千鶴がちらりと手袋をめくり、腕時計を確認する。
「はい。噴水広場、ここです。あと二十分、実質十分と行ったところでは」
隣で控えるのは湯川音葉。千鶴と並ぶと拳一つ半、音葉の方が高い。男性であっても並の高さ。
身長にとどまらず、身体的に似たところがこれっぽっちもない二人。しかし並んでみるとまるで姉妹に見える。
ニット帽、ピーコート、手袋、ラップキュロット、タイツ、ブーツ、全てが黒。二人の個性が消し去られた結果、近似しているのである。
「どっちが先に来るの？」
「場合によりますが、今日はヒカ――対象甲、の方でしょう。乙、は仕事の都合上ギリギリでは」
音葉は言い間違いにふと視線を揺らしながらも、十数メートル先の広場の観察を続けている。
同様に真正面を睨んでいる千鶴は、語気たおやかに、音葉に言葉を返した。
「ダメよ、これはお仕事。私情を挟まないでね」
「はい」
「尤も、この手の恋愛ものは私情を挟むぐらいがちょうどいいときもあるけど」
己の言葉に苦笑しながら、彼女は両手をポケットに戻して、続ける。
「我々魔法使いは――」
「社会では異端の、疎ましがられる存在である。故に、好意的な接点を持ち続けることで社会での摩擦を和らげるため、学生と教員による魔法奉仕活動がある」
「よくできました。だから、活動での失敗は許されないわ。たとえ結果がどうなろうと、依頼された要件を満たさねばならない」
「はいっ。千鶴も、ね。恋愛ものは不向きですよねぇ？」
「はいはい、そうね。惚れた腫れたを捌くには最悪のお年頃だわ。でも、私はあなたの学校の、魔法学科主任よ」

「そのプライドが、結婚を遠ざけてるのでしょうか」
音葉がぺろっと舌を出す様が、横目を流した千鶴に見えた。
彼女の苦笑から苦みが抜ける。
そして次の一言で、二人から笑みが消えた。
「っと、対象甲、来ました」
「オーケイ」
噴水広場に現れた男は、ベージュのトレンチコートに暗色のチノパンを着用している。
特徴のない格好は活動中に見失いかねないが、今回は問題なさそうだと千鶴は判断した。
「細身の長身の彼よね？　今、噴水前で携帯を見ている」
「はい。一八七センチだそうです」
あれだけの長身はそう多くない。往来の中であろうと頭一つ抜けてくれるだろう。加えて音葉が彼を知っている。
視野に対象甲、光を残しながら、右を確認。待ち合わせに駆け込んできているであろう女性は見当たらない。左を確認、同じく。
しかし隣の音葉が解せぬ行動が目に入った。
「音葉、どっちから来るかわかってるの？」
「はい。左、私たちの来た方です。格好はオフホワイトのハーフコート、グレイのスカートスーツ。インナーはペールピンクのタートルネック」
音葉は光の彼女が誰かを知っている。踏まえてどこから来るのかぐらいは察することができよう。しかしなぜ、今日の格好までキッパリと言い切れるのだろうか。
狐につままれた様子で、それでも光を視野の右端で捉えたまま、千鶴も自ら歩いてきた一本道の先を観察する。
光は我々とは逆に視線を向けている。彼の彼女だ、通常であれば彼の視線側を重視すべきだろう。
千鶴はこれまでの情報に、何かヒントがあったかと考え直す。
（三十二歳？　グレイのスーツ？　もしかして――）
千鶴が続きを口にしようとしたとき、果たしてその姿は見えた。
「――！」
現れたのは二人が予期した通りの人物。
千鶴は目を見開いた。
驚きを隠せない彼女に対し、音葉はカラッとスマイルを向ける。
「ね？　当たったでしょう？　ご存じ私のお姉ちゃん」
光に駆け寄る彼女も、まるで同じスマイルを見せた。
表情どころか、髪型も、スタイルもよく似た姉妹。
音葉と瓜二つの彼女が、光の前でペコリとお辞儀をしている。
「音陽（おとひ）さん、彼氏いたんだ……」
「千鶴、仕事中ですよ」
溜息とともに漏れた言葉に、音葉がすかさず冷たい声を返す。
「そうね。私の気持ちなんて知ったこっちゃないわ」
「さっすが私の先生、素敵です」
「さすがは私の生徒、性格悪いわぁ」
冗談を投げ合いながら、千鶴はすっかり無表情を取り戻した。
十数メートル先でいちゃつく二人を見て、今更の驚きや、手遅れの疑問がふつふつと湧き上がる。しかし彼女は努めて穏やかに、余計な感情を追いやった。
「千鶴、依頼の確認」
「はい。ただいま十九時、これより三時間、二十一時まで、対象甲の右手と対象乙の左手を繋げ続けることが対象甲からの依頼で

す」
「よくできました。今回の魔法は簡単よね。ただ、三時間は長い。三十分ごとの交代にするけど、それでもキツかったら言いなさい。私が代わるわ」
「はい」
「繰り言になるけど。無理はダメよ。魔法の失敗は対象の身体にも関わるわ」
「はい」
「今回も私からやるから、よく見て、不安なことがあれば言いなさい。いいわね？」
「はい」
「よろしい」
千鶴はテンポよく確認を終えると、少々トーンを緩めて、仕事に手を着ける。
「さてと、早速繋げてやるわ」
彼女の変化に音葉も敏感に追従した。
「何か恨みがましいようですが」
「黙らっしゃい」
冗談半分、本気半分で軽口を叩きながら、千鶴は音陽と光の一挙手一投足を見守った。
——待たせちゃってごめんね。寒かったでしょ？
——ううん、僕も今来たところだから
——ホントに？　いっつもそうやって……
——ホントホント、じゃ、行こっか
こんな会話なんだろうなと妄想、いや、推測するのも彼女たちの仕事である。ここで推測を外すと、自然に魔法をかけられない。
もちろん千鶴は外さない。推測通りに手を繋ぎ出したところで、あっさりと魔法を発動させる。
彼女は特別な挙動を見せることもなく、二人を追うように歩き出す。
「音葉もタイミング合わせられた？」
視線を二人に、むしろ音陽に向けたまま、隣の音葉に問うた。
「うーん、ハズレですね。お姉——対象乙があっさり手を繋ぐとは思いませんでした」
「そうね。下手に知っている人だと、先入観から失敗してしまうことがたくさんある。もちろん、うまくいくことだってある。何を信じるかは経験するしかないわ」
千鶴は自嘲的な笑みを浮かべながらも「私もたくさん失敗したけどね」とまでは言わない。
どのタイミングで魔法をかけるか、どの魔法を選択するか。世間的には早いが、一度ぐらいは実際に失敗させようか。隣で能天気に笑う音葉もあと数ヶ月で卒業だ。千鶴としてはそろそろ仕上げかなと、仲良く手を振る二人を見ながら考える。
一方の音葉は笑顔通りに、毒気のない嫌味を返した。
「はーい。年の功ってやつですね」
「悪かったわね、年増で」
「でもでも、私はそんな千鶴が大好きです！」
「はいはい、黙って仕事なさい」
先生と生徒らしかったり、らしくなかったり。意味があったり、なかったり。ちょっとした会話をいくつか続けているうちに、音陽と光は街中の小さなレストランに入った。
フロアは小さく、千鶴たちが入ればたちどころに気付かれるだ

ろう。
さてどうしたものかと周りを探すのは、魔法をかけていない音葉の役目だ。
「千鶴、あそこの喫茶店は？」
「よさそうね。ちょうど窓際が空いてるじゃない」
音葉が指差したのは、レストランの通り向かいにある喫茶店である。
二人は店内でコートも脱がず、お目当ての窓際を陣取ると、やはり窓際に座った向こうの二人を見つめた。
ここからは持久戦である。
千鶴と音葉で交代しながら、おそらくは二時間強、ひたすらに魔法をかけ続ける。
千鶴にとってこの作業は、割と簡単なもの。
「ここのコーヒー、おいしいじゃない」
コーヒーを飲んだり。
「あ、このモンブランもおいしい」
ケーキを食べたり。
「今日のおすすめコーヒーお代わりー」
またコーヒーを飲んだり。
「手を繋いだままとは食事とは器用だよねぇ」
無駄口を叩いたり。
「音葉の新しい彼氏はまだなの？」
まだまだ無駄口を叩いたり。
「あ、三十分だね。音葉、準備はいい？」
たまに窓外に目をやる程度で、喫茶店でくつろいでいるようにしか見えない具合のまま、交代の時間を迎える。
一方の音葉は、そうもいかない。
「はい。では――」
千鶴から引き継ぎの令を受け取ると、唇をきゅっと締めて、ガラス二枚と道路一本向こう、音陽と光を見つめる。
軽く目を閉じて、深呼吸。
数秒の後に瞼を上げると、もう一度深呼吸。後に再び、口を開いた。
「かけました」
「よくできました。辛くなったら言うのよ」
千鶴とのやりとりも、向こうの二人を見ながらだ。
ここから三十分の無言。音葉は魔法に集中しているからもちろんのこと、千鶴にとっても退屈な時間ではない。
千鶴は時々コーヒーカップに口を付けながら、音葉の横顔を見て時間を待つ。
一心不乱に対象を見つめる音葉に異変はないか。千鶴は丁寧に観察する。
観察の目的はもう一つ。
（職員室の音陽さんもよく、こんな顔してるわ）
音陽にそっくりな妹として、音葉を見つめている。
平時に見つめようものならば何を言われるかわかったものではないが、今なら堪能し放題である。
しかし今日は、彼女を身代わりにする必要などない。
彼女は音葉から視線を外し、通り向こうの二人を伺う。
（あーあー、二人で見つめ合っちゃって……）
残念ながら、音陽が千鶴を喜ばせることはなかったが、時間はあっという間に流れ去った。

そして三度目の音葉の順番になったとき、二人は光が立ち上がるのを認めた。
「音葉、まだいける？」
「はい、大丈夫です」
「オーケイ、頼むわ。移動中は私の肩、摑んでなさい」
「はい」
光に引かれて音陽が立ち上がると、千鶴と音葉も俄にテーブルを離れた。
「あと二十分、駅まで送って終わりかな」
会計を済ませ、喫茶店を出る。
音葉は千鶴の言葉に反応することもなく、じっと通り向こうを見つめ続けた。程なくしてレストランから出てきた二人を、そのまま目が追う。
「進むわよー」
推測通りに進む彼らを少し見守ると、千鶴も駅へと向かって歩み始めた。
いつもよりゆっくりと。
追っている音陽と光の歩調に合わせたのはもちろんのこと、今は不慣れな盲人を引いている。対象の二人から遅れないよう注意を払いながら、音葉が魔法の実行に集中できるよう穏やかに歩く。
「駅前に着いたわ、依頼時間はあと十五分」
駅前広場で少し語らうのだろうか。
あるいは駅に入ってプラットホームで時間を潰すか。
前者であって欲しいと千鶴は思うも、歩みを止めそうな気配はない。以前手を繋いだ二人が広場を通過する前に、音葉に声をかけた。
「駅に入ると少しの間、姿が見えなくなるわ。いける？」
「努力はしますが、あまり確実とは……」
今日はここまで二つ返事で応えてきた彼女が、初めて表情を曇らせている。
しかし千鶴は逆に、ふっと微笑んで振り返り、ウィンクを飛ばした。
「適切な判断ね。私が支援するから、やれるだけやりなさい」
「はい」
音葉は改めて表情を引き締めて、階段の奥へと消える音陽と光の手を見つめる。
肩の重みを確かめ、千鶴は笑顔のまま、少し歩みを早めた。
「お疲れさま」
「お疲れさまですっ！」
音陽は解かれた手を振り、電車に乗り去って行った。
電車の姿が見えなくなると、光も向かいのプラットホームを降りた。
「今日も助かったわ。ありがと」
「こちらこそ、ありがとうございました」
駅での十五分を乗り切った音葉に、千鶴はいつの間にか買った缶コーヒーを手渡す。
「さてと、すぐ帰る？」
「どう、しましょうか？」
二人だけのベンチで姿勢を崩し、同時にパカンと、コーヒーを開ける。
この時間の上り線はガラガラだ。我が物顔で振る舞ったところ

で誰の迷惑にもならない。
「そういえば、夕飯を食べてないわね」
「あ、そうですね。コーヒーはたくさん飲みましたけど」
千鶴は足を振り上げて、ひょいっと立ち上がった。
「よし、食べに行こう」
「はいはーい」
音葉も真似て立ち上がると、勢いそのまま千鶴に抱きついた。
身長差から彼女は千鶴を見下ろして、景気よさそうにぎゅーっとする。しっとり満たされた千鶴の柔らかさが、冬の厚着越しにも感じられる。
「お姉ちゃんのデートで傷付いた心を癒やしちゃいますよ！」
ひしと抱きしめられた千鶴は、苦笑しながらも反撃を忘れない。
「んじゃ音葉のおごりねー」
ひるみ緩んだ腕から抜け出ると、千鶴は音葉のニット帽を抜き取る。
「えー、生徒にたかるんですかぁ」
ふあっと黒髪の舞う少女は、音陽が見せることがない大口を開けていた。

†

「いらっしゃい。あの二人、また来てるわよ」
千鶴は開いた扉に一瞥をくれることもなく言い放つ。
放課後に人気のない廊下の端っこ、魔法学科第九準備室を訪れるものは彼女しかいない。
「あ、ホントですか」
ハンガーにコートを掛けながら返したのは、もちろん音葉だ。
彼女は突っ立ったまま、テーブルに投げ出された書類を掬い上げた。
「前回の評価、上々じゃないですか。私たちの仕事が気に入ってもらえたんですねー」
純粋に喜ぶ音葉に対し、千鶴は溜息混じりだ。
「まさか妹が担当したとは思ってないでしょうけどね」
「ですよねぇ。何かちょっと後ろめたいかも」
席を立ちお茶を入れる彼女は、今日も音葉とお揃いの黒ずくめ。
ポットを操作すべく屈むと、むっちりとラップキュロットが張り詰める。
ぎっしり詰まったヒップは音葉の目を奪う。
「私も別の意味で後ろめたいわ」
千鶴はティーカップ二つ、苦笑いも伴って振り向いた。
千鶴の視線が己の視線の上をかすめたことに気付くと、音葉は慌てて顔を上げて、その場凌ぎの軽口を叩いている。
「そ、そりゃ、片想いでデートを盗み見てるわけですからねぇ、ストーカーですよねぇ」
「それも否定しないけど。私、魔法で恋愛に手出しするの、嫌なのよ」
テーブルに戻ってきた彼女は、アンニュイな表情を音葉に向けた。
直視を受けた音葉は頬の紅潮に気付かれないかと鼓動を早めたが、表情に似つかわしくない真剣な語気が彼女を冷ました。
「恋愛って、お手軽にしてはいけないと思うのよ。例えば音葉の彼氏が、魔法に頼りきりだったらどう？」

「頼りきりは嫌ですけど……。うーん、二人で楽しむために使うのはいいと思いますよ。大人のオモチャみたいな？」
彼女は虚空を眺めながら、己に当てはめ、想像しながら答えた。
魔法活動の実情を知っている音葉が、恋人と過ごすために魔法をお願いすることはないだろう。夢見る時間が悪夢を見る時間になってしまいそうだ。
しかしもし知らなかったら、魔法が単純に結果をもたらすだけのものであるなら、今すぐにでもお願いするかも知れない。二人で特別なことをすれば、友達が恋人に、恋人がもっと恋人になることはあるだろうと思われる。
「魔法奉仕活動の目指すところにも合致していますよね。生活に溶け込み、ましてや恋愛なんて大切なことに関われるのは、素敵なことだと思います」
「ふぅん、良くも悪くも女子高生らしくないわねぇ」
「そうですか？　って、な、何ですか？　そんなまじまじと私を見て……」
再び千鶴の方を向くと、横目から飛ばされた視線が瞳に飛び込んでくる。
千鶴は「やっと気付いたの？」と言わんばかりの微笑みをこぼすと、ティーカップを口に運んだ。
真っ白なカップを捉えるルビーレッドの唇。
ソーサーに戻される、淡く鮮やかに残された痕跡。
「音葉って、音陽さんの妹なんだなぁと思って」
「どういう意味ですか？」
「優等生は嫌いって意味よ」
「えー、好きの間違いでしょー」
「そうね、音陽さんは好きよ。音葉は嫌いだけど」
「私は千鶴先生が好きなのにっ」
今日二度目の苦笑いに、音葉は努めて明るく返す。
しかし千鶴は、自身の仄暗さすら気に留めることなく、一枚の紙を彼女に渡した。
「黙らっしゃい。ほら、こっちのページが肝心の依頼よ」
「はーい。どれどれ……え？『おまかせ』なんて、ありなんですか？」
初めて見る依頼内容は、音葉が記憶する依頼のルールに違反している
（何か特別な理由があるのかな？）
純粋な興味を示した彼女に対し、千鶴はバッサリと事実を突きつけた。
「通常、この手の依頼は却下。つまり今回は、受付の阿呆が寝ぼけて通したんじゃない？」
「えっ？　そんなことあるんですか？」
「あるわ。担当者を見て、わざと通すのよ」
早くも本日三度目の苦笑い。今度のは本当に苦そうだ。
受付の実態と千鶴の表情を見てしまうと、音葉は改めて、魔法使いとしての見方を強く抱いた。
（自分の恋は、自分でどうにかしようっと……）
彼女が心の持論に頷いた向かいで、千鶴は軽く伸びしながら立ち上がる。
「せっかくの半ドンだってのに面倒だわぁ」
「千鶴、仕事ですよ？」
「ホント、音葉は優等生ねぇ」

音葉のお小言に、千鶴は背中を向けたままに言い返した。
「あーん」
「あーん、じゃないわよ。私たちはデートしてるんじゃないのよ？」
今日は先日の仕事の締めくくりとなった駅から電車に揺られること二駅、ちょっとした繁華街までやってきた。
「ここで女が二人、無言で座ってる方が怖いですよぅ」
「普通に話してればいいじゃない。ま、いいわ、食べてあげる」
「やった。はい、あーん」
――ぱく、むぐむぐ
依頼書にあったメモの通り、二人のデートは街で買い物だ。
「ったく、これだから買い物デートなんて……」
「黒服での洋服選びはお笑いでしたね」
「明るい街では目立ちすぎるのよねぇ。学校から直接来たのが敗因だったわ」
クリスマスに向けて気合いの入る駅ビルの中で、音陽と光は互いの洋服選び。
洋服売り場で買い物中のカップルに張り付くとなれば、千鶴と音葉も洋服を見るふりぐらいはせねばならない。
「私はどう見ても十八ですから、制服で違和感もありませんけどー」
「うるさいわよ。二十九が制服着て悪うございました」
駅ビルには学生もたくさんいる。故にいくら珍しい真っ黒の制服とは言え、音葉だけならば不自然もなかった。
しかし隣には、色香漂うお年頃の千鶴である。
コートを脱いでいた彼女は、ボレロの身頃をバンと跳ね上げ、ニットシャツが急峻な身体を露わにしていた。行動しやすいよう余裕のあるはずのラップキュロットも、彼女にかかればタイトな仕上がりである。
「でも、女の子としては、千鶴のスタイルは羨ましいなぁ」
「はいはい。服買ってあげた分ぐらいのお世辞は言いなさい」
結局、彼女は早々に二人分服を買いそろえ、その場で着替えた。
おかげで今や、レストランの中でもすっかり周りに馴染んでいる。
「お世辞じゃないのにー」
「今更何を言われても……。ま、いいわ。とっとと終わらせて帰るわよ」
「え？　対象はまだ、あそこにいますけど……？」
音葉が背筋を伸ばし、僅かに腰を浮かせると、四つ先のテーブルには音陽と光の姿がある。
幸いにして、そして当然、二人は会話に夢中。音葉が直視したところで、目が合うこともない。
「ええ。でももうすぐ、ここを出る。音葉のおかげで、門限が早くて助かるわ」
「……私、そんな子供じゃありませんけど」
「彼女はそういう人なのよ。子供だとは思ってないわ、彼女だって」
音葉は唇をちょんと突き出して、釈然としない風だ。
しかし現実は千鶴の言う通りで、十分ほどして時計の針が二十一時を指すと、二人は立ち上がった。
「行くわよ」

「はーい」
音陽たちが店を出るのを確認した後、二人も立ち上がる。
音葉は先行し、フレアスカートをたおやかに揺らし二人を追う。
千鶴は会計を済ませてから、短めのタイトスカートを纏いキビキビと追った。
「電車、乗るんですか？」
「音葉なら、どうする？」
直結の連絡改札口を抜けて、音陽たちはプラットホームで電車を待っている。
音葉と千鶴もプラットホームに上がり、離れた場所から二人を観察していた。
「乗ります。そしてわざと乗り過ごさせてですね」
「はいはい、ラブホには行かせません」
「えー」
「対象乙が帰る理由を思い出しなさいよ」
「えー」
「はいはい、お説教は明日ね。仕上げ一発勝負だってのに、一発やらせればとか――」
「寒いです」
「……ごめん、今のは音葉の言う通りね」
千鶴が自嘲を込めた笑顔で夜空を仰ぎ見ると、ホームに電車が滑り込んできた。けたたましい走行音が響くも、不出来な冗談を掻き消すには少々遅い。
音が止み間もなく開かんとする電車のドアに、千鶴は歩みを向けた。
その様に音葉は疑問を口にする。
「えっ？　乗るんですか？」
「仕事が終わったら帰る。当然でしょう？」
「終わった？」
「そうよ。ほら、帰るわよ」
状況を摑めていない音葉の手を引き、千鶴は迷いなく電車に乗る。
――トゥルルルルル……
発車ベルが鳴り、ドアは閉じた。
「窓の外、見てなさい」
「はい？」
「二人を見てなさい。今日のクライマックスよ」
音葉は千鶴に指示されるがまま、窓外を眺めた。
千鶴の言う通り、二人はまだホームに立っていた。
電車が走り出し、ホームの先に見えていた二人が近づいてくる。
「あ――」
音葉が真正面に捉えたのは、ちゅんと小さくキスする音陽と光。
「凄いっ」
音葉はすかさず向き直り、千鶴を見る。
彼女はドアに寄りかかり、音葉とは対極の、憂鬱そうな表情を引っ提げていた。
「あー、服、コインロッカーに入れっぱなしだわぁ」
憂鬱だろうと何だろうと、今の音葉にはお構いなしだ。
目の前で起きた事件の絡繰が知りたい。
「千鶴！　あれ、どうやったんですかっ？」
千鶴はポケットからロッカーの鍵を出しながら、然もありなんと答える。

「魔法に決まってるでしょ」
「そうじゃなくって！」
「明日の授業をお楽しみに」
千鶴は横目で、しれっと微笑む。
瞳をキラキラさせた音葉は、まだまだ驚きが表現したりないのか、千鶴の腕を引っ張るように抱きかかえた。

†

「音葉、その格好は何なのよ？」
教室に入ってきた千鶴は、あんぐりと口を開いた。
「中学時代の制服ですけど、変ですか？」
もちろん音葉は、彼女の言わんとしていることに気付いていた。
故に、しれっとしてみせる。
「身長が伸びたの、高校に入ってからなのね……」
「はい。だからちょっと、ちょっとだけ丈が短いんです」
「ちょっとどころじゃないわよ！　パンツ丸見えよ！」
「見えません！　うちの学校のタイツ、厚いんですよ！」
頭が痛いと言わんばかりに、千鶴は顔面を手で覆っている。
肩幅に全く余裕がなく、お腹がちらりと見えそうなセーラー服。
明らかに丈が短く、屈むまでもなくお尻が見えそうなプリーツスカート。
彼女の登校直後、クラスメイトすら大騒ぎだった格好である。
もちろん今も、言わんこっちゃないと笑われている。
「まぁ、いいわ。今日の授業では、音葉の制服の丈を伸ばします」
千鶴の深い溜息とともに、音葉が心待ちにしていた授業は始まった。
準備室に戻ってきた千鶴は、どさっと椅子に崩れ落ちた。
「魔法に頼るんじゃなかったわ、さすがに疲れる……」
背もたれでは身体を支えきれず、首がだらんと、その後ろに投げ出されている。
彼女も今日は、制服を着ていない。
ミッドナイトブルーのミニスカートスーツに、黒のブラウスと黒のタイツ。
仕事着故の真っ暗な配色に身を包み、だらんと壁掛け時計を見る。
（そろそろ来るかしらね）
気合いを入れ直して背を正すと、案の定、いつもの声だ。
「失礼しまーす。着替えてきましたーっ！」
景気よく入ってくると、ファッションモデルの如く身体をくるりと一回転。
しかし千鶴は一蹴した。
「魔法、かかってないわよ」
「やっぱり……？」
先の授業で習った魔法を使ったつもりが、失敗。
千鶴は椅子を回して音葉の方を向くと、授業とは雰囲気を異にして説明した。
「この魔法、難しいのよ。光を変化させることで、見た目を変える。言ってみれば簡単なんだけど」
「難しすぎですよー。クラスで一人もできなかったじゃないですか」

両手でスカートの裾を上げ下げして、うーんと唸り遺憾の意を表している。

ただでさえ短いスカート。上げ下げしようものならば下は丸見え。

見えるのはもちろん、パンツではなくタイツ。全く透けないのだから恥ずかしくないとは彼女の弁である。

対する千鶴はもう諦めたと言わんばかりに、溜息をつくことすらしなかった。

「そうねぇ。でもこれができないと、昨日のような仕事はできないわ」

「あ、聞こうと思ってたんです。どうやったんですか？」

「簡単よ。互いに物欲しそうな顔を見せただけ」

「だけ？　それだけっ？」

知人を相手にする際、先入観から失敗してしまうことある。

音葉は千鶴のお説教を思い出した。あの音陽がよもや、僅かに背中を押すだけでキスしようとは、未だに思えない。しかし一般論としては、千鶴の言う通りである。

「そうよ。音葉の狙いは正解だったわ。好き合ってるんだから、ホテルに放り込んでやればセックスする。それと同じね」

「でも、それはダメって言いましたよね？」

「ええ。なぜダメかは、自分で見つけなさい。見た目を変える魔法の難しさは二つあってね、一つはイメージを描けるかなの。ホテルに連れて行かないという判断と、イメージを描くこと。根っこは同じよ」

「うーん、そうなのかぁ。イメージを描く、かぁ」

「ちなみに今の音葉には、もう一つの難しさである、光の操作もできてないわよ」

「ですよね……。道は険しく長そう……」

スカートを上げっぱなしで、深々と悩む姿は滑稽である。

千鶴はついぞ苦笑いを浮かべながら、手元の依頼書の角を揃えた。

「数年は覚悟なさい。さ、仕事よ。今日のは張り切っていくからね」

勢いよく立ち上がると、湛えられた胸が揺れる。タイトな固定もお構いなしだ。

書類を音葉に手渡し、コートを摑む後ろ姿。むちっと弾力のある弧を描くヒップラインが空を切った。

（千鶴先生の方がよっぽど、なんて言うんだっけ？　劣情を催させる？　よね？）

音葉は奪われた目をそのままに、依頼書をポケットに押し込んだ。

やってきたのは素っ気ないコンクリートフロア。

学校からほど近い幼稚園の屋上である。

「皆川園長、今年もよろしくお願いいたします」

「今年も雨宮さんに担当していただけるとは。またよろしくお願いします」

魔法奉仕活動としては異例の挨拶を交わした相手は、恰幅のよい赤服白髭の老人。サンタクロース……ではなく、この幼稚園の園長だ。

例年であれば緊張感を伴ったビジネスライクな挨拶に終始するが、今年は少々違った。

「湯川音葉です。お久しぶりです、園長先生」
「しかも今年の生徒さんは音葉ちゃんなんだね。大きくなったねぇ。魔法はうまくなったかい？」
「ま、まぁ、そこそこ、かな？」
「ほほぉ、それは頼もしいね」
園長は如何にも好々爺と言った風情。恰幅のよい体軀が、低い声をよく響かせている。そして優しい視線が音葉をじっくり観察していたが、千鶴はあっさりと割って入った。
「クリスマス会には彼女を置いていきますので、あとでいろいろ聞いてやってください」
「それは子供たちも喜ぶよ」
「ええ、なんと言っても魔法使いですから。ところで今日の依頼ですが、例年通り、サンタクロースの乗ったそりを上空で大きく一回転させ、園庭に降ろすプランで？」
「ああ、お願いするよ。いつも済まないね」
「いえ、こちらこそ。生徒に研修の場を与えてくださり助かっております。安全の方は私が保証しますので――」
「なぁに、卒園生の成長のため死ねるならそれもよかろうよ」
「またご冗談を……」
魔法奉仕活動において、依頼者と話すことは稀だ。しかし千鶴は慣れた様子で、スマートにこなしている。音葉は新鮮だけどいつも通りの彼女を、ただ見ていた。たった今までは。
笑い合う園長と千鶴の予期せぬ会話に、音葉は察しながらも問う。
「あのー、研修の場って……？」
「今日は音葉が一人でやるのよ。張りぼてトナカイ付きのそりを飛ばす、基礎的な魔法の実践ね」
「やっぱり……」
弱含みに返す音葉を見て、園長はポンポンと、彼女の頭を撫でた。
音葉は久しぶりの感覚を味わいながらも、胸には小さな不安が過ぎった。園長は音葉が見上げるほどに大きく、横幅だって広いのだ。加えてあのトナカイとそり。かなり重たいだろう。しかも飛ばすのは人だ。園長の冗談ではないが、失敗すれば即、命に関わる。
音葉の顔色から赤みが抜けた。
「では園長、そりに乗り込んでくださいますか」
「おお。頼んだぞー」
巨体に似合わぬ小気味よいステップで、サンタはそりに乗り込む。
千鶴は彼とは逆方向に歩み、屋上のフェンスの前で手招きしている。
「いらっしゃい」
音葉が駆け寄ると、彼女は園庭を指差した。
「園児たちがいるあの横に降ろすの。そこにあるサンタのそりを、上空でこうやって回して……」
黒い手袋に覆われた指が、そりを起点に青空で大きな弧を描きながら園庭へと降りる。
音葉の黒い指も、千鶴を追って弧を描いた。
「幸いこの辺は電線もないし、高い建物もないわ。大回りにして穏やかな下り坂にするのがコツね」
「はい」

「あとはこの強い北風に注意すれば大丈夫よ。張りぼてトナカイが曲者で、風に煽られるけど気にしないで。あんなもんすっ飛んだって、サンタが到着すりゃ問題なしよ」
「はい。って、それはさすがに……」
緊張を和らげるためだろうか。それとも、単に事実を述べたのであろうか。
音葉が表情を伺うと、千鶴は仕事中らしい穏やかな表情。せめて笑いかけてくれてもと思わなくもない。
しかし彼女やはり、事もなげに言い放つ。
「トナカイの有無よりプレゼントの有無。さ、やっちゃって」
「はい、始めます」
千鶴の言う通り、基礎的な魔法だ。音葉はそりに意識を集中して深呼吸。
ふわりと数十センチほど浮かせた。
小さく穏やかに前後左右に傾け、操作感覚を確認。早くも張りぼてが風の影響を受けているのだろう、予想よりも自由にならない。とは言え、細かい操作を要求されるわけでなし、問題はない。
「それでは、始めます」
「オーケイ、頼んだわよ」
千鶴の声を合図に、そりを青空へと浮かせる。そして、ゆっくりと滑らせる。
園庭からは賑やかな歓声が聞こえた。飛んでいるそりが視界に入ったのだろう。
（うん、いい感じ。次は園庭を大回りするように一回転）
事前に指で描いた空路をなぞることを試みる。
ところが空の上は強風の吹き曝しだ。そりを安定させるのが予想以上に難しい。
安定させるのに重きを置けば、進路は徐々にずれていく。
（あーあー、コース外れてるなぁ。んー、園庭があそこだから……）
音葉は再びフェンス越しに、園庭を視界の端で捉える。
大回りが過ぎて、このままだと着地点に戻ってきそうもない。
（多めにこっちに戻して……）
園庭、そり、園庭と位置関係を繰り返し確認し、舵を切った。
そのとき――
「あっ！」
突風の直撃を受けて、トナカイの首が吹き飛ぶ。
そりのバランスは変わり、魔法で安定させていた水平が崩れた。
（え、こっち？　あれ？　何でそっちが下がるのっ？）
そりは派手に揺れ、足下からは甲高いどよめきが聞こえる。
咄嗟に墜ちるという言葉が脳裏を過ぎったとき、音葉はキッと虚空を睨んだ。
（ええいっ、この際止めてやる！）
ふらふらと空を進んでいたそりを、ぴたりと止めた。
無言のままに息を大きく吐く。
右手が温かい。
「あら、助けはいらなそうね」
隣を見ると、千鶴が立っていた。
うっすらと笑顔で、そりを見つめている。
「余所見しないの。ほら、子供たちが待ってるわよ」
「はいっ」
音葉は右手をぎゅっと握り返すと、再び真正面を見据え、そり

を穏やかに滑らせた。
「お疲れさま」
園児に囲まれるサンタを眼下に見ながら、千鶴は声をかけた。
「済みませんでした」
一方、音葉は千鶴に向かって深々と頭を下げている。
千鶴が手を離さないものだから、右手を繋ぎ前に突き出した格好だ。
「謝ることなんてないでしょう？　ほら、下を見なさい」
「よかった……、本当によかったです」
彼女も園庭を眺めて、笑みをこぼす。
「音葉のことを呼んでるわ。行ってらっしゃい」
園長が大きく手を振っているのを見て、千鶴は音葉の手を離す。
しかし、離れない。
音葉が手を握り直すと、彼女に背を向ける千鶴を引き寄せた。
「何よ？」
振り向いた千鶴は、薄く苦笑い。
「ありがとうございました。それと――」
今度は音葉が、千鶴へと一歩。
同時に身を屈め、顔の高さを合わせる。
紫がかった唇が、ルビーレッドの唇に触れた。
「コンシーラーの使い方、一緒に覚えましょうね」
音葉は手を離すと、バネのような勢いで階段室へと走る。
「黙らっしゃい。目の隈を消すのは魔法に限るのよっ」
振り向いた先に見えた千鶴は、笑顔で「しっしっ」と音葉を追い払っている。

# ちゃーじ

なぎ

人生はクソゲーだという人がいるが俺はそうは思わない。

駅から会社までの徒歩十分の道のりを俺は全力疾走していた。人通りもまばらな時間帯に息を切らしながら走る姿に若干の恥ずかしさも感じるが気にしている場合ではない。

始業時間の一時間前きっかりに職場に到着し「よっしゃ」と喜びの声が漏らしてしまった。更に早く出社している同僚が顔を上げるがいつものことなのですぐに自分達の仕事に戻っていく。

始業時間よりも早く出社するのはもちろん自分自身のためだけどそのモチベーションは別の理由により維持されている。自席に着席して個人端末を操作する。今日で早期出社連続一ヶ月なので『エージェントコイン』購入の割引ボーナスが無事届いていることが確認確認できた。

業務支援エージェントは日々のその名の通り仕事を支援してくれるシステムである。毎日行いべきタスクを重要度可視化したり旧来の電子メールに職場内に代わって連絡手段として持ちいられたりしている。たいていの職場では社員全員が使えるように共通基盤としてエージェントシステムを整備している。

ただし、より大きな仕事の成果を得るために更に高い機能を持ったエージェントを個人的に利用することも可能だ。

例えば営業職の俺にとって欠かせないのがテレアポ業務を支援するエージェントだ。見込み客を確度別にリストアップし自動的にコール、場面場面に応じて盛り込むべきセールストークを表示する。応答内容のダイジェストを作成したり今後取るべきアドバイスをしてくれたりする。

上司に怒られたときの対応用のエージェントなんてのもある。事前に上司の様々な情報を登録しておき、怒られる場面のシチュエーションを選択することで出来るだけ穏便に対応することが出来るのだ。

個別契約のエージェントはもちろん無料では利用することが出来ない。『エージェントコイン』と呼ばれる利用料がメーカーから『課金』される。同僚を出し抜いて高いパフォーマンスを発揮するためにはエージェントを活用し、その利用料を投資していく必要があるのだ。

始業時間前に出社するとボーナスがもらえることだってその結果利用者が多くの成果を上げ高い給与を得て更に『エージェントコイン』を購入することが統計的にわかっているから設定されているのだろう。

『課金』してエージェントを利用していけば人生は簡単だというのが俺の出した結論だ。

周りの景色から取り残されたような不自然な建物だった。間違いなく自分よりも年上のアパートが仕事現場らしかった。屋根の塗装は剥げ落ちてさびが浮かんでいる。白く塗られていただろう壁は汚れて周りの景色に溶け込むことを拒否しているようだった。

「もっといい家に住んでいてもいい収入なんですけどねえ」

乾いた音をたてて鉄骨で出来た階段を登っていると相川はつぶやくように言った。憂鬱な仕事だというのに心なしか楽しげに聞こえる。

「ハァ」

そもそも自分は何があるか知らされていないので同意することも出来ない。相川とは一時間ほど前に集合場所として指定された駅で合流したのが初対面だった。

廊下を進み二〇三号と書かれた部屋の前で相川は止まって呼び鈴を押す。壁越しにくぐもったブザーの音が聞こえる。

「神谷さーん。エージェント支援機構の者なのですが」

端末を操作して応答なしの欄にチェックを入れる。

「応答がないのはわかっているんですけどね。これも規則なんで。じゃあ入りましょうか」

何事もなかったかのように相川は言った。

「どうやって部屋に入るんですか。まさか扉を破ってはいるとか？」

素朴な疑問だった。仕事の内容は『課金』による債務者の現地確認と聞かされていたからいわゆる借金取りのようなことをするのかと思ったのだ。

「そんなまさか。鍵がありますから扉を破る必要なんてないんですよ」

キーケースから玄関の鍵と思われるものを取り出した。

「鍵？　どうやって手に入れたんですか」

「保証人である親族の許可を取って建物所有者に借りたんですよ。生前の神谷さんの負債の減免と利用状況の開示をすると言ったら親族の方は簡単に承諾書を書いてくれましたよ」

相川が説明してくれた所では『課金』によるエージェントに利用が進むと自分の経済状況を越えて利用する者が増え、利用代金により経済的に困窮したり、エージェントに『課金』したにも関わらず結果を得ることが出来ずに絶望し自ら命を絶つ者が増えた。エージェント作成会社では大きな問題となることを避けるために業界団体を作り利用者への支援とエージェントプログラムへのフィードバックを行うこととしたらしい。

「一通りの説明も終わりましたし仕事をしましょうか」

相川が鍵を使って扉を開くと生活臭と共にすえた臭いが伝わってきた。そこで人が亡くなっているというのに不思議と感情は動かなかった。

後日聞いたところでは自分が選ばれたのはエージェントの利用状況からこういった特殊な状況に耐えうる精神構造を持っていると判断したからしい。

確かに『人生（ゲーム）』に戻れることを考えればこんな最悪な状況を遮断して働くことが出来るだからその選択に間違いはないのだろう。

# 五月病にはお休みが効くよ

## 川鵜鶏肋

珠坂の女神の中学時代のエピソードです。いろいろと駄目な人たちが、気を張らない場所で駄目さ加減をさらけ出しています。そしてやっぱり過去話は書きやすいなあ。

## 春屋アロヅ

バンド話に戻りました。ライブシーンはすべて実際の音源（1つはＤＶＤ、残りはアルバム）を聴きながら書いてますので、１つでもどの曲かわかっていただけたら嬉しいです。なお、このお話の後日談らしき短編がサイトにありますので、よかったらそちらもどうぞ。

***http://third.system.cx/***

## Fukapon

「失礼しまぁす」「いらっしゃい。今日は仕事な――っお、音陽さんっ！」「こんにちは、千鶴センセ。いつも妹のこと、ありがとね。それと、その、この前のデート……」そーゆーオフィスライフ送りたいよ。現実なんか嫌いだぁ。とゆわけで今回も直前に書き出しました。ごめんなさい。ところで書いてる最中に虫歯を見つけました。ナース服見に行ってきます。

***http://www.fukapon.com/***

## な ぎ

一年ぶりなのに何もかも進化しておりません。今年になってモバマスはじめました。課金で大好きな場所を手に入れることができるのかという事を考えてみました。さっきまでテーマを「大切な場所」と勘違いしてのは秘密です。

## レイアウト

原稿受け入れチェックを強化してみました。ちょっとエラッタが減ると嬉しいな。
そろそろ朝です、張り切っていきましょう……

***http://www.projectkaigo.org/***

# Next Vol.10 - Nov, 2012

mCMX 編集部ではあなたの作品をお待ちしておりますよ。
「5年前も5年後もここにいるよ」系サークルなんで、数字見るのに疲れたら、是非いらしてくださいな。

# 今こそ買い！水着〇学生

とゆーテーマで次の作品を募集中。5周年らしく。
2012 年 11 月発行予定。COMITIA 102 かな？ かな？
締め切りは当日 00 時、だいたい 02 時ぐらいまでは楽勝で入ります。コピー本だからさ、ノリで書きましょうよ。

# http://www.projectkaigo.org/

詳細はそのうち、ウェブで告知します。
せっかくの5周年だしちょっと何かやりましょうか。

mnfikmyhk
CREATURE MIXING 9
**大好きな場所**

2012年5月5日　初 版 発 行

発行所　まにふいくみやはか
http://www.projectkaigo.org/

印刷／製本　project KAIGO

Copyright © 2012 川鵜鶏肋，春屋アロヅ，Fukapon，なぎ，まにふいくみやはか
この本は Creative Commons「表示 2.1 日本」ライセンスに従い頒布されます。
詳細は http://creativecommons.org/licenses/by/2.1/jp/ をご覧ください。